

第3章

被爆証言集

原爆で亡くなったあなたへ

嘉松 愛子

また八月九日がめぐってきます。忘れ得ぬあなたへの思いをと筆をとりましたが、あの日のことを思うと万感迫り筆がすすみません。隣り合わせに住んでいた私達、あなたは三菱兵器製作所私は電機製作所と動員先は別々でしたが、いつも一しよに家を出ていましたね。その頃の工場では、材料が不足がちで手の空いた人々は疎開跡の瓦礫をとり除き慣れない手に鋏をとって見よう見まねで畝を立て苗をさして見違えるような諸畑にいました。そんな日常でしたが、沖繩の悲しみも、身近に迫る敗戦も知らず、みんな元気で明るい、職場でした。あの朝もいつものように、防空頭巾非常食などの袋を肩にかけ家を出ました。いつもと変わらない朝でした。

しばらく行くと、前方にあなたの後ろ姿が見えます。大

きな声で呼びましたが届きません。一しよに行きたくて駆けだした時です。警戒警報が発令されたのは。私は立ち止ってしまいました。これから予想される空襲警報の事、通勤途中の船乗り場の混雑、船はまだ接岸もしないのに大勢の人波に押される前列にいる時の怖さ、又乗りすぎてバランスを失い沈没してしまった数日前のことなど、遠ざかるあなたをよそに、そんな光景がよぎり、何のためらいもなく家に引き返してしまいました。工場を休むなんて国賊だと言っていた私の自分勝手な初めての欠勤でした。家でひとり留守番をしていると爆音がしてきます。

それまで長崎は大きな空襲もなく警報には慣れたような毎日、工場で一度機銃掃射の音を身近に感じたことはありませんが、B 29という敵機を目にしたことのなかった私は今こそB 29を見ようと、玄関を出た瞬間ピカッと、目が眩む真昼の閃光を浴び何が何やら分りませんでした。その時爆心地に近い兵器工場にいたあなたを今では想像することも出来ません。苦しかったでしょうね。残念だったでしょうね。

日が暮れるまで、あなたの帰りを待っていた御両親と私

たち、翌日から私の父も加わって工場跡一帯をあなたを求

めて探し廻りました。三日間歩いても手がかりになるよう

な一片の遺品も見ることが出来ませんでした。

悲嘆にくれながら、あなたのお母さんは言っておられま

した。「朝から腹が痛いので休みたい」と言ったあなたに、

「それくらいで休んだらいかん。薬を持っていきなさい。」

と言って薬を持たせたと。あれは虫の知らせだったのに、

といつまでも悔んでおられました。私もあなたの後ろ姿を

見送ってしまったことに、自分を責めております。

あなたはまだ十六歳のままでしょうか。

私は八十を過ぎてしまいました。毎年原爆の日には三菱

の慰霊祭に行きます。そして今では私だけしか知らない死

没者名簿のあなたに声をかけます。こんな平和な世にして

いただいてありがとうございます。これもあなた方の尊い

犠牲のためものです。この平和をいつまでも守ってゆくの

が、残された私達の務めだと思います。どうぞ見守ってい

てください。

心より御冥福をお祈りいたします。

原爆忌の俳句を一句あなたへ

十一時二分の鐘を撞きにゆく

長崎の声

Message from Nagasaki

高井良 明

昭和二十年八月九日晴、夾竹桃の花が咲いていたことを鮮やかに記憶に留めている。その時、爆心地から西南八百メートルに位置した旧制長崎県立瓊浦中学校一年に在校。

被爆当日、連日の空襲で延び延びになった期末試験を終え、午前十時三十分ごろ下校、校舎から五百メートルのところを帰宅途中、突然敵機来襲の警鐘、気が付いたら真っ暗やみ、「これがあの世か」と思いまた気を失った。それからどのくらい過ぎたのだろうか。人に声をかけられ、抱きかえられて、気がついたら瓦礫の中を風が音をたてて吹き荒れていた。

電車の窓から人の上半身が垂れ下がり、周りには馬や人の死体が無数にあった。まわりは火の海、高台に逃る途中、池のほとりに出た。池のまわりには首を中に入れた死体が

すき間なく囲んでいた。やみくもに逃げた。どこを通ったか定かでない。山をいくつか越え自宅に帰り着いたのは夕暮どき、左半身やけどをおい、ふくらはぎには何かの破片が刺さっていた。本当によく生き着いたと思う。あれから六十五年、学友三百八十七人が原爆の犠牲になりましたが、また今年も六十五年目のあの日を迎える。幸にも今日まで生き長らえ、残された人生を人の為、世のため力強く、精一杯生きていくつもりです。

(二〇一〇年)

原爆の思い出

高平 弘

私は、原爆投下のとき、長崎市山里町三〇五番地に私と、

姉亀山マス子（当時二十七歳）、姉の長女貞子（二歳）、妹

信子（十五歳）と四人で住んでいました。

母カメと、妹朝美、弟眞也は西彼杵郡脇岬村に疎開して

おりました。

妹信子は、女学生で常清高等実践女学校に通学、学徒動員で働いていました。

昭和二十年八月九日朝、目覚めて何となく仕事に行きたくないのです、姉に今日は休むといったら、姉から皆御国のために一所懸命に働いているのだから、仕事に行かんばと
言って叱られました。

私は当時十七歳で、三菱工業青年学校を卒業して、長崎市樋ノ口町の三菱幸町工場に勤務しておりました。

仕事は鉄の鑄物の溶解場に勤務しておりました。

当日も、いつものように仕事をしていると、組長から、昼には少し早いけど、食事をするようにいわれ、食事をすませ、又鉄を解かすための溶解場の配電盤に立ち、スイッチを操作していると、急に空襲警報が発令され、電源を切る操作を行っている時、又急に解除になってやれ〜と
思っていました。

原爆投下の瞬間、光が先か、音が先か、なにがおきたのか、わからないような、強い熱風が、私の顔を通りぬけ、とっさの思いで、その場に耳と目を押えてふしました。

しばらくしてから、目をあけて立上り、まわりを見ると、目の前がかすんで、よく見えないので、自分の目が悪くなったのかと、思いました。

目は悪くなく、辺りが薄曇りだったのです。

私は大きな配電盤のかげになっておったので、おかげで無傷でした。

目がなれてきて、工場を見まわしてみても、びっくりりしました。

工場内は見るも無惨の状態で、天井ははがれて落ち、鉄

骨はまがり、機械も破壊され、色んな物は、あっちこっちに散ばり、言葉に言いあらわせないほどの状態でした。

すぐに工場内の防空ごうにかけこんだのですが、他には誰れもおらんので、外に出ると私の名前を呼ぶ人がいるので、誰れかと思つたら、同じ仕事場の沖繩出身の人で宮城君でした。

最初見た時は、誰れかわからなかったけど、すぐ沖繩出身の宮城君とわかりましたが、しかし、様子を見てびっくりしました。

頭の髪は焼け、顔全体の皮ふがただれ、洋服は焼け落ち、手足は皮ふがただれ、みるかげもありませんでした。

あまりにもひどいので、「宮城君、あんたどこにおつたの」とたずねたら、「おいは、外におつた」と言いました。

痛かろうと言つたら、うん痛か、ひり／＼すると言つた。

とにかく、このままでは、かわいそうと思ひ、又飛行機がきたら駄目だと思つて、防空ごうにかくれるように言つて、薬をもらいに詰所に行きました。

ところが詰所の前には、多くの人々が集つて、薬どころではないほど、皆んな怪我や火傷した人ばかりでした。

焼けただけ、誰れが誰れやら、わからない人ばかりでした。皆で生死をたしかめ合い、いたわり合つておりました。

詰所の佐藤技師が作業員の皆さんに、ここから、どこにも行かないように言つており、私は心配で宮城君の所に行き、もう少し、待つようにと言つて、又皆の所に行き、すわつて待つていました。

しばらくしてから、今から生きている者を調査するから、名前を言うようにと調査が始まり私も名前を言つて、宮城君が防空ごうの中に火傷しているから、行つて見て下さいと、ことづけました。

外に座つて浦上の方を見ると、いたる所で黒い煙や、赤い火の手が上がり始めました。初めは火の手は遠かつたけれど、だん／＼と私達の方に広がつてきました。

その火の燃えるのが早いこと。

私達の所には、工場の外に詰所、細長い建物で、上は食堂、下は脱衣所、出勤所、詰所など二棟ありました。

工場内は始めは火の手はなかつたけれど、どこからわからん間に、一つの棟に火が着いて燃え上り、見る／＼内に私達のいる食堂まで燃え上つてしまいました。

安全な所に皆んなと座って、附近の状況を見ていました。遠くでは黒々とした煙や、火があちこち見えて燃え上り、ただぼうぜんとして見ていました。

近くを見ると自分達の詰所も燃え、何も出来ず、ただ見ているだけで精一杯でした。

ふと家の事や、姉妹のことを思い出しました。

家は山里町で浦上天主堂のそばです。

家のことが、心配となり、佐藤技師に一言ことわり、家には姉と姉の子供、妹の三人がいるので確認に行きますと、出かけました。

ところが門まで行く間も、煙で先が見えない状態で、背をかがめて、やっと門までたどり着き、外に出て、汽車の線路をこえ、浦上に向ったのです。

その間、上空では飛行機がぶん／＼と音が聞え、進むのに煙と、なにやらわからんような「におい」がしたが、背をかがめて走り、飛行機の音がひどいので、このままでは危いと思って、前から知っていた防空ごうにとりあえず入ろうと思って入りました。

奥の方は、まっくらで、なんにも見えないので入口に座っ

ていたら、中の方から、なにやらうめき声が聞えてきました。

怪我をした人が何人もいるのだと思ったけど、何もしてやれんし、外を見ると、大きな家が炎となって燃え上っているのを、ただ呆然と見ているだけで、どうすることも出来ない有様でした。

だれか男の人が大きな声で「救助隊が薬を持って助けにくるから、がんばれ」と言って立ちさりました。

私も、ここにおっても、いかんと思って、浦上駅の方に向って、歩きだしました。本通りに出て、途中は煙とごみとにおいで目はしむいし、煙で息苦しいし、煙の少い所を背をかがめて走り、本通りに出た。

本通りに出たら、又火の子や、煙がおおいかぶさり、息も出来ないようになり、なるだけ煙の少い所を中かがみになって進み、駅をすぎた頃より、煙が少くなって進むことが出来ました。

長崎医大の正門の下にあった、三菱学校附近にきたら、馬車と馬が焼けただれて、たおれていたの、びっくりしました。

焼けたにおいで、どうにも出来ません。

そこを通りぬけ、あっちこっちを見わたしたけれど、附近には家らしいものは何も見えません。

浜口町の電車の停留所についたら、電車が二―三台、レールの上にかさなって、焼けこがれていました。

本通りの方に行こうと思ひ、見わたしたら通りの方は、火の手があり、煙がひどく、駄目だと思ひ、電車の線路をえらんで走り、途中色々あったけれど、やっこの思ひで松山の下の川までたどりついた。

たどりついた下の川を見たら、びっくりしました。川の中には、はだかのままや、男女の区別さえ分らない、ふくれて沢山の人が重なり合つて、ぶかん／＼と浮いていたのです。あっちもこっちも、水の有る所は人の死体が重なり、地獄の様な有様で、どうする事も出来ない状態でした。

やっこの思ひで、住んでいた山里町三〇五番地にたどりついたけれど、あたり一面、焼野原となり、初めは、どこに家があったか、不明で、ただあるのは、焼けカワラだけだった。

家の裏に井戸と防空ごうがあったので、ようやく家だけはわかりました。

家の焼けあとに立って、ぼうぜんと思ひながら、ああたりが玄関か、座敷はどこかと思ひながら、姉達をさがしまわりました。

まだ探しながら、足の裏が熱くなり、場所次第では、まだ火の気がありました。

手がかりはないかと家の廻りをぐる／＼とさがしまわつたけれど、駄目で、家の裏が風呂屋さんだったので、そこに行つたら浴場の中の水の中に何人かの人が折り重つて死んでおりどうすることもできません。

家のまわりを見るうちに、あの浦上天主堂がくずれ落ち、左の方は半分ぐらくずれ、右の方は下の半分からくずれ、むざんな姿となつておりました。

探しまわつたが見つからないので、刑務所の下に、とり組で作つた防空ごうが有るので、そこにいるかも知れんと思ひ、行くことにしました。

前に姉より、自分たちは、空襲警報の時はあそこにひなんすると聞かされて、いたのでそこに、行つたかも知れな

いと思いたずねました。

防空ごうに行く途中、橋の上から、川の中を見ると、沢山の人達が、水に浮んでいるのが見え、ここにいるかと思いましたが、男女の区別さえ出来ませんでした。

防空ごうまでは、橋をわたり、原っぱを通りぬけんと着かんのです。

原っぱに出て、途中はだかや、火傷してたおれている人を何人か見て、死体をひっくり返してみたけれど、なか／＼見つけることができませんでした。

防空ごうに着いて、内に入ったけど、誰れも、入った人はいませんでした。

ただ、男の子が一人おり、その子も焼けただれていました。

「もうすぐ、助けにくるけん」と言って、外に出て、原っぱや、又家のまわりを、さがしたけれど、なか／＼手がかりが見つからない。会う人もいない状態でした。

あっちこつちとさがして廻っていると、思いがけなく、私の名前を呼ぶ人がいるので、誰れかと思ったら、私の魚屋のおじさんです(西村のおじさん、当時橋口町居住)(お

じさんは母の姉むこです)

見れば、頭や、顔が焼けただれてるのでびっくりしました。

私は、働いていた工場より、家の方に走ってきたが、焼けてしまって、姉や、姉の子供、妹のことを心配して、さがしているばってんどこにもおらんと話すと、おじさんも、自分の子供が不明で、一諸にさがしてくれると言うので、二人で又、家のあとなどをさがしたけれど、それらしいものも、みつかりませんでした。

二人で又探してまわっていると、親せきの中西のおじさんと、岡村のおじさん二人と会い、お互いに生きていてよかったと、喜びあいました。

とにかく、腹がすいとるやろうと言われ、おじさん達から「にぎりめし」をいただき、食べた、西村の魚屋のおじさんにも、食べんねと言ったけれど、「おれはいらん、食べたくない」と言って食べませんでした。

とにかく、行方不明の家族をさがそうと、焼けた家の附近を四人で探し廻ったけど、わかりません。

附近をぐる／＼とさがしまわったが、何にもわからない

ので、これ以上は無理なので、西村の魚屋のおじさんは、諫早が実家であるので、一人で行くのは危険であり、二人のおじさん達から、諫早までつれて行ってくれ、と言われ、二人で行く事にしました。

道の尾駅まで行けば、汽車が出ると言われて、二人で出発、後は私の家族をさがしてと二人のおじさん達にたのみました。

二人で汽車の線路ぞいに、道の尾駅に向って歩いていくと、まだ上空では、飛行機が、飛びまわり、今にも機銃でバンバンとやられるようで、何回か線路から土手の方に下って身をかくし、にげました。

やっと道の尾駅について、汽車をさがし、駅員さんから、どこまで行くのかと言われ、諫早までと言ったら、この汽車に乗りなさいと言われ、二人とも、やっとの事で乗ることが出来ました。

汽車は屋根なしの貨物列車でした。それには、沢山の負傷者の方達が、ごろ／＼とねそべって乗っていました。右も左も火傷した人や、頭の毛のない人、怪我をした人ばかりでした。

しばらくしたら、汽車が一杯になったので出発、走り出しました。

諫早駅について、又湯野尾町まで二人で、約二時間かけて歩き、ようやく西村宅に着きました。家についた時は真暗でした。

西村家の人達は、突然のことではびっくりし、西村のおじさんの怪我などで又びっくりして大変でした。

長崎の原爆の様子など、色々と話をして、食事をして、風呂に入って休みました。

あと西村宅に一週間ばかり、お世話になり母が諫早まで探しに来て、一諸に協岬村に、帰りました。

一言こんな恐しい事が起きた。何んと言っているか、言葉にも表わすことが出来ません。おそろしい地獄を見ました。

原爆を受けてなくなられた方々、姉妹、姪のなきがらをも見つけることが出来ず、非常に残念でたまりません。二度と原爆を使うような事がないようにしてもらいたいです。

平和を願う

木下 トヨ

昭和二十年八月九日十一時二分

会社へ行こうと家を出る、間もなく警報鳴り渡り一目散に引返し解除になるまで待つたらピカッと光って障子がポロ／＼と数秒後にはドーンと来て、奥の方へと飛ばされた

隣のおばさん私の名前を呼んでいる、怖くて返事出来なんだ、死んだと思っておばさんは「ナムアマダブツ」と、となえてる、指の間で外見れば、真暗闇の静けさよ、原子の雲が陽をかくす、又そつとのぞいたら屋根は飛ばされ柱ばかり空は青空日本晴れ

組長さんがメガホンで、駅の方から然えて来る

皆で一しよに逃げましょと、西坂山へと避難する

どこかで赤ちゃん「オギヤ／＼」誰も助ける人もなし

西坂校の上あたり兵隊さんが被爆して座ったまゝでお互いに傷を治療しあつてる

言葉もなく／＼と

山に登りて見おろせば街は火の海、まっかつか、

長崎市街が死街と化して、たゞほうぜんと立ちつくす、

西坂山で皆さんと、カンパン一コで夜を明かす。翌朝父も

帰り来て、妹探しに山、下る

途中でどこかのじいちゃんがたゞれた体で芋虫いもみたいにしてる

「じいちゃん元気を出してネ」と声をかけるとじいちゃん、〇〇さんに逢うたらばよろしく伝えて下さいと……

じいちゃんどこまで這って行ったやら

焼野が原に人影なし、浦上あたりで見たものは、電車は

飛ばされ横だおし馬は焼けこげパン／＼に街は残り火ちよろ／＼と変なおいをたゞよわせ

妹探して先行けば右や左の道の端に、女子挺身隊がゴロ

／＼とあつちに十人こつちに十人

数十人ゴザをかぶせて寝せられて母さん水／＼とあえいでる、アメリカ兵のような人が車に積んだおにぎりを食べ

させようとするけれどたゞ母さん水と言っただけ、あの子
等何人生きたかな……思い出しては涙する

ゴザをはいでは妹さがし、あれもちがう、此れちがう、
とう／＼父が切れちやって持ってたにもつをなげ飛ばす

大橋渡りて空田んぼ、チョゴリを着た国の人達がアイ
ゴアイゴと泣いている、まるで大きなカラスが飛びか
うように、あれは何かと聞いたならばチョゴリの国の人達は、
嬉しい時も悲しい時も、アイゴアイゴと泣くんだよと父は
言う、ホントカナ……

チョゴリの人等に気を取られ浦上川を見過して後で聞い
ておどろいた、水を求めた人達が折重つて／＼、浦上川を
埋めたそな

野を越え山越え徒歩き、やっとの思いで叔母の家、たど
りて見れば妹が元気な姿で待っている

皆元気で良かったね

妹は心配して来てくれた叔父の船で田舎の方に先に着い
ていた

「妹も女子挺身隊で住吉のトンネル内で魚雷みがいて被
爆して数年後には嫁に行き子供三人育てる頃にわけのわか

らぬ血を吐いて数年間も苦しい殺してとうめきつゝ、被爆
者の子は嫁に行けない、来手がないと言われ、かくし通し
て管理手当も嫌がつて四十路半ばで旅立った

夾竹桃の咲く頃は、あの日あの頃、思い出す

何度夢を見たものか涙なしでは語れない

心配して来てくれた叔父も胃ガン、舌ガン、口頭ガン、

それは／＼そうぜつな苦しみがたてた

私もいろ／＼な病気が出てつらい目に合いました

ピカドンは、ほんとに／＼怖いです

世界は一つ戦争などしないでなぜ仲良く出来ないの
でしょうか、平和になる事を願います。

被爆体験

浦辺 弘子

今年で戦後70年を迎えますが当時の私は8歳の子供でしたので、大人の人から聞いた話しやこの目で見た事等をまじめながら現在に至る迄を綴って来ましたので聞いてほしいと思います。長崎の地に原爆が投下されたのは昭和20年8月9日午前11時2分でした。

突然の出来事で、一度に多くの人が亡くなると云う大惨事となりました。投下後近所のおじさん、おばさん達の現地へ子供や、兄妹をさがしに行く人達が沢山いたように思います。

その時の現地の情景は話しにならないぐらい大変な状況だったと聞きました。当時私は原爆が投下された所から約4・6Kで大浦出雲町九十七番地に住んでいました。父親は戦地に行っており、家には母と4歳の弟と生れたばかり

の妹がいました。突然に赤、青、黄色など異様な光が現われたとたんだんと音がして、家が揺れ動きびっくりしました。台所の窓ガラスが割れ、家も少し傾きました。幸わい家族全員家の中におりましたので身体には被害はありませんでした。話しに聞きますと外にいた人達は爆風で飛ばされたそうです。当時空襲警報は解除されていたのでほとんど人が家にいた状況だったと思います。しばらくしてから、空襲警報のドラの音が高々と鳴り響き渡り皆んな防空壕へ逃げ始めました。母と生れたばかりの妹を家に残して私は、栄養失調で歩けない弟を背中におんぶして防空壕に逃げました。夜になってから、壕の外に出て浦上方面の空を見ると、赤々と燃えている情景を見ました。その時の事は、今でも鮮明に覚えています。

それ以来毎日恐怖に怯えた日々を過していました。それに加えて、食糧も十分なくて米粒はさがさなければ見あたらないようなイモがゆの汁を毎日食べていました。8月と云えば暑い夏の時期ですから、身体には沢山のアセモが出ていました。家にお風呂もなくかまどでお湯を沸かしタライで手足を洗うことしか出来ません。暑い時に綿の入っ

た防空頭巾をかぶり、空襲警報のサイレンが鳴ると防空壕へ逃げます。子供の私は防空壕に入っておれば死ぬことはないと思っていました。

夜の場合電気の傘に黒い布をかぶせ灯がもれないようにして、寝ていました。いつB29がブーンと不気味な音を立てて飛んで来るかも知れないと脅えながら、毎日を過していました。そんな時8月15日終戦の日を迎えました。天皇陛下の御言葉が学校のラジオを通して聞きました。日本は戦争に負けた事を知りました。やっと戦争が終り、父親も戦地より戻って来ました。家族全員揃って喜んでいた折1年余りが過ぎたころ突然母親が39歳の時脳溢血で倒れてしまい、半身不随になりました。

その時私は10歳、弟が6歳、妹が1歳半ぐらいの時でしたので長女として母の看病と弟妹の面倒を見なければならなくてはいけませんでした。昼間、父は三菱造船に働きに行っておりましたので学校へ行く時は妹をつれて通いました。母の看病もしなければいけないので学校も休む事が多くなりました。一口では言葉に云いつくせない毎日の生活でした。

トイレに入ると、一人悲しみが込み上げて来て泣いていました。やっと戦争の恐怖から逃れたのに再び苦しみの日々を送ることになりました。そんな中半身不随の状態でも母が出産しました。生れたのは女の子でした。しかしその子は4日目に洗面器一杯の血を口の中からとお尻から出して亡くなりました。徐々に生活も良くなり近所のお風呂屋さんで営業するようになり週に1回程度銭湯に行けるようになりました。しかし、いつも芋洗いの状態で、衣類を脱いで入れる場所も順番待ちです。それにお風呂から帰るといつもおみやげがあります。それは皆さん何んと思いますか。それはシラミです。家につくと裸になり、衣類についたシラミを殺すのが私の仕事でした。こんな経験は二度としたくありません。病んでいた母も私が25歳の時看病のこともなく54歳で亡くなりました。それから5年後、私は30歳の時縁あって、お見合の末、現在の主人の所へ嫁ぎました。そこは茂木枇杷で有名な農家でした。お舅姑さんと、身体の弱い17歳の妹がいる家庭でした。苦労にはなれているとは云えそこで又一苦労致しましたが、主人が真面目で仕事熱心な人でしたから今日迄これのように思っています。た

ばこもお酒も飲みません。

子供も女の子1人男の子3人を育て、孫9人に恵まれて、幸せに暮しています。

現在では被爆者友の会の中で会員の皆様方と仲良く活動을致しております。

二度と戦争は起してはいけないと強く心に刻み、人類を不幸にする戦争絶対反対を叫びながら平和運動に邁進して参りたいと思います。

朝日新聞 ナガサキノート

毎月9日 鐘の音響かせ

井原 東洋一

原爆の恐ろしさと愚かさが、地球の果てまで伝わるように――。毎月9日午前11時2分、長崎市の平和公園にある「長崎の鐘」が、平和を願う被爆者らの手で鳴り響く。

鐘が建立されたのは、原爆投下から三十三回忌にあたる1977年。県内の被爆者5団体の一つ、県被爆者手帳友の会を中心に、被爆者や動員学徒の遺族の寄付金でつくられた。2004年からは原爆が投下された日時に合わせて同会の会員が鳴らしている。

最大で5万人いた会員は、被爆者の高齢化により、現在は5千人ほど。高齢化のため鳴らすのを中断した時期もある。しかし、今でも20〜30人が元気な顔をみせる。

「元気ね、悪かところかね、という月1回の安否確認です」。会長を務める井原東洋一さん（77）も、鐘のロープを引く列にいつも加わっている。「戦争は絶対にいけない。ましてや原爆は最もひどい無差別殺人兵器。再び使わせてはいけない」。鐘を鳴らす手に、力を込める。

開戦控え「大きな名前」

井原東洋一さんは1936（昭和11）年、旧西彼杵郡矢上村（現・長崎市田中町）の小作農家で6人きょうだいの末っ子として生まれた。すでに父平作さんは56歳、母カノ

さんは48歳。遅くになってからの子どもだったため、周りからは「日暮らし子」と呼ばれた。

この年、2・26事件が起き、翌年には日中戦争が始まる開戦前夜の時代。平作さんは「大きな名前を付けよう」と、自分の年齢にちなんで、海軍で後に連合艦隊司令長官になる山本五十六の名前をもらおうと考えた。しかし、いくつか名前を書いた紙を茶わんに入れて振り出して占ったところ、次点の候補だった「東洋一」ばかり出てきたため、こちらの名前を付けることにした。

「とよいち」という読み方で役場に届け出たところ、係の役人が「名前が大きすぎて、大それている。天皇への不敬罪で捕まってしまう」と助言をしたらしい。そこで、戸籍は「とよかず」で登録した。ただ長崎市議になった現在、「とよいち」も使っている。

貧しくとも庭先は豊か

井原東洋一さんの実家は自分の畑を持たない小作農だった。父平作さんが腰を悪くしていたため、母カノさんが天秤棒を肩に担いで家と畑を行き来していた。片方には行きに肥料、帰りに収穫した作物をぶら下げ、もう片方にはいつも井原さんがぶら下げられた。

実家は十軒ほどの集落の中でも貧しい方だった。4人の姉は諫早の製糸工場などに次々と出稼ぎに行った。物心ついた時には、両親と7歳年上の長男満潮みよしほさんとの4人暮らし。登校前に野原や道ばたの草を刈り、肥育していた牛に食べさせるのが日課だった。表地が破れた着物を裏返しにして学校に行ったこともある。

ただ、「ひもじい思い、寂しい思いをしたことは全くなかった」。庭先には、子どもたちがよそのものを盗むようなことがないよう、ザクロやビワ、ミカン、イチジク、柿など色々な果物の木が植えられていた。地面の下には防空壕くわうごうが掘られ、井原さんら小さな子どもたちの遊び場にもなっていた。

学校も集落も戦争一色

井原東洋一さんは1942年、矢上村立矢上国民学校に入学した。学校生活は「戦争一色」。上級生の号令に従って防空頭巾を肩にかけて集団登校し、天皇の写真などを納めた奉安殿に最敬礼した。3年生では大人と同じ長さのゲートルを足に何重にも巻いて歩いた。校長も軍服姿。授業中に先生が突然、「空襲だ！」と叫んで訓練が始まり、素早くいすや机の下に潜り込んだ。上級生は学校の裏山に防空壕^{ごう}を掘り、訓練で使う竹を取り、松の根から燃料となる油をとった。同級生は飛行機や軍艦、戦車を競うように描いた。

集落の人の出征が決まると、神社に集まって武運長久を祈った。出征者が「私が体当たりして来ます」と誓い、「頑張つて」と拍手で送った。千人針を渡し、慰問の作文を書いた。4年生になった45年ごろは、戦争で亡くなる人が増え、慰霊の行事があった。校内には、郷土の戦死者の遺影を横一列に並べた一室があった。最初は少なかった遺影が、終戦前には教室の四方を一回りした。

里イモの皮も「下さい」

井原東洋一さんの実家は、両親と兄が畑仕事をしていたが、地主に米を納めた後に残るのは、自分たちが食べられる程度の量だけだった。わずかに余ったものを、母や姉が繁華街の市場まで片道10^キの峠を越えて、歩いて売りに行った。

戦況が悪化するにつれ、食糧難は深刻となっていた。小作ながらも畑があったため、自分たちの食料には不自由しなかった。しかし、今度は逆に、配給だけでは足りない食料を求めて、物々交換するための着物を手にした多くの人たちが、長い道のりを歩いて街からやってきた。

ある時、良家の娘さんが来たことがあったが、交換できるだけの作物がなかったため、仕方なく断った。すると帰りがけ、牛の餌として残していた里イモの皮を目にした娘さんが、「持って帰りたい」と言い出した。乾燥させて粉にして、団子にして食べるという。「そこまで深刻なのか」と思った。売り物ではないからと、何ももらわずにあげた。

戦況 子ども心に疑問視

戦況は悪化していたが、大本営発表の最後には必ず「我が方の損害、軽微なり」とあり、日本の勝利しか伝えられなかった。しかし、井原東洋一さんは子ども心に、「本当に勝ってるのかな」と疑問に思っていた。

国民学校の2年生だった1943年。担任の女性教師の兄が、北太平洋のアッツ島で玉砕した。先生は激しく泣き崩れ、授業にならなかった。「大変なことになっているんだ」と思った。また、「勝っているには、空襲がたくさんある」ことも疑問だった。B29爆撃機が、ガラガラと光りながら上空を飛んでいるのを何度も目にした。超低空飛行してきた米軍のグラマン戦闘機と自宅近くで遭遇したこともある。機銃掃射の恐怖に、ひっくり返るように山中に逃げ込んだ。

広島原爆についても、「広島が新型爆弾でやられたらしい」といううわさが伝わってきただけで、その惨状はほとんど知らなかった。その原爆が長崎にも落とされるとは、想像もしていなかった。

火の玉 木から落ち気絶

原爆が投下された8月9日、井原東洋一さんは、母カノさんと隣の家のおばさんと3人で、自宅から1キロほど離れた矢上村（現長崎市田中町）の山に朝から入り、薪をとっていた。「暇があれば薪をとりに行っていた」

井原さんの役目は、木の上に登り、カマで枯れ枝を切り落とすこと。下にいるカノさんとおばさんが落ちた枝を拾い集めて束ねていった。その日の朝、警戒警報があったことは覚えていない。

木登りが得意だった井原さんが、森の中でもひときわ高い木に登っていた時だった。木漏れ日しか差し込んでいなかった葉や枝の隙間から、太陽の何倍もある大きな火の玉のようなものが突如、目に入った。「熱っ！」と感じた次の瞬間、ドーンという大音響とともにすさまじい振動が伝わってきた。さらに数秒後、爆風で木全体が大きく揺れ、揺り落とされた。そのまま気絶してしまったらしい。母は「東洋一が死んでしまうた」と勘違いしたという。

降り注ぐ「正露丸」怖く

木から落ちた井原東洋一さんは、しばらくして意識を取り戻した。すると、葉の「正露丸」のような色と大きさの、黒い土の塊のような粒が空から大量に降ってきた。バラバラ、バラバラと落ち葉を鳴らす音が、とても不気味だった。母カノさんと隣家のおばさんと一緒に、大きな岩の陰に身を潜めた。「何なのか分からない。さわったら爆発するんじゃないかと、恐怖感でじっとしていた」

昼だったのに、あたりが夕暮れのように暗くなった。「これは危ない。何が起きているか分からない。帰ろう」。まだ黒いものが降り続くなか、意を決して、3人であたふたと山を下りた。広い通りに出ると、爆心地の南1・2^キの長崎市茂里町にあった三菱長崎製鋼所のものらしい焼け焦げた帳簿の切れ端など、様々なものが飛散していた。心配したおばさんの長男が、迎えに来てくれた。そのことが後に、井原さんが被爆者健康手帳を取得する大事な助けになる。もちろん、その時は知るよしもない。

家族 救護や死体処理へ

被爆した井原東洋一さんや母カノさんは、8月9日午後1〜2時ごろ、矢上村の自宅にたどり着いた。自身は目にしていないが、その日の夕方、自宅から数百^{メートル}離れた現在の国道34号を被爆した人たちが、まるで亡霊のように諫早方面に逃げに行ったと聞いた。

カノさんは国防婦人会の一員として、救護所となっていた近くの運転免許試験場に行き、炊き出しや被爆者の傷の手当てにあたった。警防団に入っていた兄満潮さんは、原爆投下の翌日から死体処理に携わった。4人の姉も皆、長崎市内にいて被爆した。

原爆投下から1カ月ほど後、姉に連れられて初めて爆心地周辺を歩いた。町の様子はあまり覚えていないが、がれきがたくさん残っていた。その時、外国人が集団で連なって歩いているのを目にした。今考えると、三菱長崎造船所幸町工場内になった捕虜収容所の捕虜が、母国に帰るところだったのでないかと思う。収容所には200人ほどの捕虜がいて、8人が原爆で亡くなったとされている。

末期のリンゴ汁を母に

井原東洋一さんの母カノさんは菌茎から出血し、すべての歯が抜けてしまった。被爆2年後の夏には破傷風のよう
な原因不明の病気になる、入院を繰り返した。さらに倦
怠感で体が動かない「ぶらぶら病」になり、寝たきりになっ
た。かさむ治療費を下支えする法的な枠組みも当時はなく、
高価な薬を十分に買ってあげられなかった。

中学卒業後、働きながら勉強するつもりだった。しかし、
先生が父と兄を説得し、長崎工業高校に進むことに。成績
は良く、授業料は免除。片道18^キの道のりを中古の自転車
で1日も休まず通った。折れ曲がったまま残された三菱長
崎製鋼所の鉄骨を横目に見ながら、爆心地近くを毎日駆け
抜けた。

被爆から7年後の1952年。高校2年の井原さんが、
寝たきりのカノさんに、ガーゼに含ませたリンゴの搾り汁
を飲ませていた時だった。「何事も、一番にやらんばいか
んよ」と語りかけたカノさんは、その言葉を最後に帰らぬ
人となった。

高校の師との活動今も

井原東洋一さんが長崎工業高校2年の時、新任の英語教
師として教壇に立ったのが、その後、長崎の平和運動をリ
ードする一人で、現在も「長崎の証言の会」代表委員などを
務める被爆者の広瀬方人さん（83）^{ひろせまさひと}。本欄で2010年3
月14〜29日に紹介^{II}だった。「シャープでフレッシュ、真
面目で積極的な先生だった」。井原さんは、広瀬さんが立
ち上げた文芸部に入り、活動した。

大人になってからは、あまり一緒に活動することはな
かったが、近年になって協力することが多くなった。広瀬
さんが中心になって立ち上げた「福島と長崎をむすぶ会」
は今年8月、福島県南相馬市の高校生10人を長崎の平和祈
念式典などに招く計画を立て、井原さんが会長を務める県
被爆者手帳友の会も加わった。被爆70年に向けて、広瀬さ
んが代表になって10月に発足した「長崎原爆の戦後史をの
こす会」のメンバーでもある。「ちよつと加勢してよ、と
頼まれたら逃げられない」と笑う。師弟関係は今も続いて
いる。

反骨心から労組活動に

井原東洋一さんは1954年に長崎工業高校電気科を卒業し、九州電力に就職した。すでに京都の電気会社に内定していたが、電気科での成績が一番だったためか、教師から「とにかく九電に行きなさい」と決められた。入社後は発足間もない通信部門に勤務。合唱やフォークダンス、ハイキングなど多くの趣味も楽しんだ。57年、地域の福祉活動を通じて高校時代に知り合った一つ年下の和子さんと結婚。その後、3男をもうけた。

しかし、職場は「学歴社会で、高卒で出世するのは難しい現実があった」。元々、貧乏で受ける差別への反骨心は強かった。58年、労働組合に加わり、会社との団体交渉やストライキなど、様々な闘争に力を注いだ。

多忙にはなったが、休日にはできるだけ家族と過ごそうと、キャンプや旅行、ハイキングに連れて行った。それでも小学生的長男の作文は「僕の家庭は母子家庭です。お父さんはいつもいません」。次男が編集長の家族新聞「だんらん」をつくり、絆を深めた。

被爆地域拡大是正に力

労働運動に取り組み始めた井原東洋一さんだが、始めのころは、平和への思いを特に強く意識してはいなかった。

しかし1954年、ビキニ環礁の水爆実験で被曝した「第五福竜丸事件」により原水爆禁止運動が高まりを見せると、長崎の被爆者たちも声を上げるようになった。日本被団協元代表委員の故・山口仙二さんや、被爆語り部の故・吉田勝二さん＝本欄で2010年8月5～24日に紹介＝は、長崎工業高校の先輩だ。井原さんも反核への思いを新たにした。当時、「長崎で労働運動をすることは、平和運動に関わるのが当たり前」でもあった。井原さんの所属していた組合も、原爆の慰霊碑巡りに取り組んだ。

特に力を入れたのが、被爆地域の拡大是正運動だ。「ほぼ長崎市内にだけに限定した地域はいびつだ」。古里の旧矢上村も対象外だった。自身はけがをせず、原爆症も出ていなかったが、「ぶらぶら病」の末に亡くなった母を思うと、ひとごとではなかった。

古里も「特例区域」指定

1976年、旧長崎市などの被爆地域に隣接する「第1種健康診断特例区域」が拡大された。74年に続く是正で、区域内で被爆し、原爆放射能の影響とみられる一定の病気があれば被爆者健康手帳が取得できる。井原東洋一さんは当時、会社を休職して中村重光なかむらじゅうこう衆院議員（社会党）の後援会事務局に専従しており、地域是正をめざし、被爆地域を視察に来た国会議員団に現地を案内して回っていた。

加わった区域には、井原さんの実家の場所こそ含まれなかったが、古里の旧矢上村の一部が盛り込まれた。政府案が決まった夜、これまで熱心に運動に励んできた地元の人々の仲間が、夜中の山道を小さな軽トラックを走らせて、井原さんがいた事務所へ駆け込んできた。中村議員が「早く入手した政府案について報告すると、2人は「ありがとう」「やっと実った」と涙を流さんばかり。井原さんも一緒に抱き合い、自分のことのように喜んだ。実は自分自身にも関わることだったが、この時は気がつかなかった。

手帳なくても「友の会」

井原東洋一さんが県被爆者手帳友の会に入ったのは1987年。被爆者健康手帳を持っていなかったのに、当時会長の深堀勝一さんが半ば強引に引き込んだ。深堀さんとは、被爆地域是正をめざして一緒に地域のオルグをして回った仲。日本社会党の県本部役員だった井原さんは、候補者不足を補うために長崎市議選に立候補し、初当選したばかりだった。深堀さんが会則にある「会に献身的な奉仕をする人」として常務理事にした。以来20年近く、ともに被爆者運動に励んだ。

2002年、第2種健康診断特例区域（「被爆体験者」区域）が爆心地から半径12^キで指定され、旧矢上村の実家もその範囲に含まれた。井原さんは被爆時、村の山で薪を取っていたので、市に被爆体験者の申請をしたが、「該当しない」と書類を突き返された。山の一角は同じ村内でありながら、すでに76年に、一定の病気があれば手帳が取得できる第1種の特例区域に指定されていた。「気づかなかった。自分のことには無頓着でした」

証人見つけ手帳取得

井原東洋一さんが「被爆体験者」の区域に住んでいたことは、戸籍などで簡単に証明できた。しかし、実際に被爆したのは、一定の病気で被爆者健康手帳が取得できる区域にある山の中。証明するには第三者の証人が必要だ。「自分の被爆の原点は、あの山の中。変える訳にはいかん」。ただ、証人のあてはなく、「どうにもならん」と諦めていた。

ある時、入院した隣家の93歳の男性のお見舞いに行った。「トヨカズ君も手帳、持っとっちゃろ」「持っとらんです。証人、おらんですもん」「僕が山に迎えに来たい」。この男性こそ、被爆時に一緒に薪取りをしていた隣家のおぼさんの、長男。井原さんは忘れていたが、男性が手帳を申請した書類には、井原さんら3人を迎えに行ったことが記されていた。26年遅れで手帳を手にできた。

その書類があったのに、市からは何度も何度も、本当にその山にいたのかを確認された。「そんな記録があるなら、最初から教えてくれ」。後から知り、腹が立った。

ワンマン会長に手焼く

県被爆者手帳友の会で、1967年の発足から亡くなるまで39年間会長を務めた深堀勝一さん（享年78）は、「ウルトラワンマンだった」と井原東洋一さんは振り返る。米国で触発されてキング牧師の銅像を作り、「平和公園に据えろ」とむちゃを言う。「友の会平和賞」を独断で創設、第12回で相撲の朝青龍関に授与したのも、「平和と関係なかやがね」と思う。しかも、「彼に意見を言ったら即刻クビ。事務局長が何人やめたことか」。反発して会を離れる人も少なくなかった。

ただ、「頭は鋭く、決断も早かった」。被爆者運動を強烈にリード。県内被爆者の手帳取得を支援し、権力にこびず、頑として立ち向かった。ジャンパーに汚れた運動靴で、政府への要望を繰り返した。

井原さんには文句を言わなかったが、一度だけ、深堀さんの関係者の不正を監査した井原さんを蹴ろうとしたことがある。「蹴るなら蹴れ」とたんかを切った井原さんに、「あんたにはできん」と引き下がったという。

5 団体の連携心がける

2006年に県被爆者手帳友の会の会長に就任した井原東洋一さんが心がけていることがある。長崎で被爆者援護や反核平和運動に取り組む「被爆者5団体」の連携だ。「それぞれの団体には異なる政治的背景があり、合併は難しい。しかし今、政治で解決しないといけないことがたくさんある。最大公約数でまとまることが大切だ」と考えている。

問題は、被爆地域や原爆症認定基準の是正など、被爆者援護にとどまらない。特に、特定秘密保護法への危機感を募らせる。被爆者5団体は法案が衆院を通過した11月下旬、「行きつく先は民主主義の否定、そして戦争への道」と廃案を求める声明を安倍晋三首相に送った。しかし法案は、衆院でも自民・公明両党の強行採決で可決され、成立した。「憲法が壊されている。大声を上げてデモをしたら、『テロ集団』にされてしまうところに、政権の本音がみえる。戦争前夜、という感じだ」。戦時中を生きた世代として、戦争反対を訴え続ける責任を痛感している。

「核制御できぬ」反原発

「人間は核を制御できていない。いつ事故が起きるか分からない」。井原東洋一さんは長く九州電力に勤めていたが、ずっと反原発の立場だ。「トイレなきマンション」とも言われるように、放射性廃棄物の最終処分場が確定しないままの運転にも納得いかない。

九電玄海原発（佐賀県玄海町）についても、1号機の運転が始まる1975年より前から現地で抗議活動に加わり、福岡の本社ビル内でもデモをした。「九電からすれば、目の上のたんこぶですよ」と笑う。2011年、脱原発を目指す電力労働者全国連絡会議を設立し、代表を務めている。ただ、東京電力福島第一原発のような大事故が起こるとは、井原さんも想定していなかった。「もつと万全の対策がとられていると思っていた」という。東日本大震災後、福島を4回訪れ、現地の市民団体に資金援助も始めた。住民が避難して、荒れ果てた地域を目の当たりにした。「それなのに、日本が原発を輸出するなんて、考えられない」と憤る。

被爆の実相 米市民も涙

井原東洋一さんは「地球市民集会ナガサキ」実行委員会の一員として、2010年5月に米ニューヨークで開かれた核不拡散条約（NPT）再検討会議にあわせて訪米した。

「2万人が集まって行進したのに、アメリカの世論、マスコミは無反応。ほとんど報道されなかった」。国際NGO「平和市長会議」の代表として長崎、広島の両市長が演説した時も、「思ったより会場がさみしく、がらんとしていた」。一方で、高校や大学などに赴いて小グループで被爆の実相を話し、被爆の写真を目にすると、涙を流してくれる人がいた。「被爆の真実を教えられる機会が日本と比べて圧倒的に少ない」と実感した。

海外で感じたのは、核兵器は必要だと考える国家と、核廃絶を望む市民との溝だ。そして、「日本はほかの国と比べて政府へのNGOの影響力が小さい」。期待するのは、高校生1万人署名運動や、昨春できた長崎大核兵器廃絶研究センターと学生らの活躍だ。「これからの平和運動にとって大きな希望だ」

ゲルニカの団体と協定

井原東洋一さんが連携を図っているのは、被爆者団体だけではない。

昨年4月、1937年にドイツ軍から大規模な無差別爆撃を受けたスペインのゲルニカ・ルモ市を政府の非核特使として訪問し、75年の節目となる追悼式典に出席。県被爆者手帳友の会と、ゲルニカの空爆体験者の団体とで平和協力協定を結んだ。協定では、①市民を犠牲にするいかなる爆撃・戦争にも反対する②核兵器廃絶を求める③平和の大切さを広める④体験を次世代に継承する、という課題に向けて、ともに取り組むことを確認した。

井原さんはその夜、地元のテレビ、ラジオ番組に出演。協定の意味について問われ、こう答えた。「協定は小さな出来事かもしれない。しかし、高齢の我々がいなくなっても、未来に平和を求め続ける決意が込められている。世界平和に向けた大きな一歩だ」

今春の再訪時には、広島、ドイツ・ドレスデン、終戦前夜に空襲を受けた秋田市の団体も協定に加わり、3カ国5

団体に広がった。

パラオ 兵士と愛妻慰霊

井原東洋一さんが度々訪れる国の一つが、太平洋の島々からなり、世界で初めて「非核憲法」を持ったパラオ共和国だ。原水爆禁止日本国民会議（原水禁）での交流を通じて知り、1996年に妻和子さんと初めて訪問して以来、13回訪れている。

パラオには戦時中、旧日本軍の南洋庁があった。いまでも当時使っていた高射砲や戦車、通信基地の跡などがそのまま残っている。激戦で、旧日本軍の約1万6千人をはじめ日米の多くの兵士が命を落とした。自然にある無数の洞窟には、いまでも多くの日本兵の遺骨が放置され、戦争の悲惨さが伝わってくる。必ず線香を持って行き、手を合わせる。

2004年に亡くなった和子さんは、パラオの青い海にみせられた。その遺志で、遺骨の一部はパラオの海に散骨した。パラオに通うのは、愛妻の墓参りでもある。白い砂

浜の上に布を広げ、遺影を色とりどりの花びらで飾る。供養を終えた後、和子さんの元に届くよう、花びらを海に流す。

捕虜収容所に慰霊碑を

長崎市立香焼中学校がある場所には戦時中、捕虜収容所があった。最大1500人の外国人兵士を収容していた国内最大規模の収容所の一つで、終戦までにオランダ、英国、豪州、米国の計72人が病気や労働作業中の事故で命を落としたという。「外国から遺族が来た時、死者を弔い、心を安らげる場所が必要だ」。井原東洋一さんは現在、収容所の慰霊碑を現地に設置しようと取り組んでいる。25日に市の職員と現地を訪れた井原さんは、慰霊碑の設置予定の場所を確認し、「資金集めをして、なんとか再来年の戦後70年までに完成させたい」と意気込みを語った。

市民グループ「アジエンダNOVAながさき」に加わり、毎年8月に平和公園の「長崎の鐘」を鳴らす運動や、駅前でのクリスマスイベントなどの文化活動にも携わる。映画

や美術の団体にも所属し、「子どもたちに残せるものは、
平和と文化」と力を込める。そして、こう続けた。「文化
は、平和でないと謳歌おおかできない」

被爆者を思い朝晩祈る

中村 キクヨ

中村キクヨさん（90）なかむら 〓長崎市小瀬戸町〓は、記者が取材に訪れた日の晩も、いつものように仏壇の前に座り、手を合わせた。仏壇には水の入ったコップ。目の前で水を求めながら亡くなった被爆者を思い、朝晩の祈りを欠かさない。近所の浜辺に残されていた遺体は、近くの島に埋められた。詳しい場所は分からず、今となっては身元も分からない。

2003年からは、若くして白血病で亡くなった次男のことも、仏壇で祈るようになった。自分の被爆が病気の原因だったのではないか、との思いは今もぬぐえない。

「ずっと解決できないことを、戦争は残した。原爆による影響はまだ続いているし、これからも続く」。そんな思いで、被爆者の援護施策拡充に長年取り組んできた。90歳

となった今も、県内の被爆者団体「県被爆者手帳友の会」で副会長を務めている。

「まだまだ、戦争は終わっていない」。そう言って、記者に語り始めた。

造船所には捕虜の姿も

福岡県に生まれた中村キクヨさんは、5歳の時に父菊太郎きくたろうさんの仕事の都合で長崎県に引っ越してきた。小学5年生から、現在も住む小瀬戸町で生活を始めた。家の前には砂浜が広がり、桟橋からは船の出入りもあった。市中心部に行くために船を使う生活だった。

1940年に鶴鳴高等女学校（現・長崎女子高校）を卒業。着物を着て仕事をすることに憧れ、卒業後は川南工業の香焼島造船所で働くことに。任された仕事は事務で、資料整理や帳簿の確認などが主だった。

41年に東条英機内閣が発足した頃から、造船所の雰囲気が変わってきたと感じた。事務の仕事だけでなく、工場での作業もやらされるようになった。化粧は禁止され、着物

はモンペに変わった。その後、捕虜となって働かされている外国人の姿も目にした。

それでも、「お国のために」と日の丸の鉢巻きを締めて働いた。1年ほどした頃、菊太郎さんに「そんな大変なことしなくていい。早く結婚をしろ」と言われ、仕事を辞めた。

身重の体で夫に千人針

「見合いだ」。父菊太郎さんに言われるまま、小倉市(現・

北九州市)に住む満みつるさんと見合いをしたのは1943年。

満さんは兵隊として内地と戦地を行き来していた。「よそに行ったら次はいつ戻るか分からん」と菊太郎さんにせかされ、2回ほど会って結婚した。中村キクヨさんは19歳、満さんは28歳。「正直、互い何にも分からない状態だった」

長崎に来た満さんは、三菱造船所で働き始めた。だが、平穏な結婚生活は長く続かなかった。44年の冬ごろ、召集令状が届いた。出征まで5日ほどしかなく、中村さんは急いで千人針の準備を始めた。白い布と赤い糸を持ち、岡政

百貨店(後の長崎大丸)へ向かった。人通りが多い場所がいいと思ったからだ。「ご主人ですか」「大変ですね」と声をかけられた。他にも、白い布を手にした女性が通行人に結び目を作ってもらっていた。

中村さんは妊娠7カ月だったが、無事、千人針を完成させた。出征当日は、地域をあげて盛大に送り出すことになった。

出征する夫を送り出す

夫の満さんの出征日。地域の人たち30人ほどが、列を作って長崎駅に向けて歩いた。中村キクヨさんは「身重だから来なくていい」と言われていたが、「これが最後かもしれない」と付いて行った。

「勝ってくるぞと勇ましく」と歌いながら、紙の日の丸を振った。山を越え、約2時間かけて長崎駅まで行って送り出した。

満さんがどこに派遣されるか、分からなかった。3日ほどして、福岡県久留米市で父菊太郎さんと一緒に満さんと

面会をした。

満さんと、検閲を逃れるために手紙を書く際の暗号を決めた。出征先が海外なら「海山さん」、内地なら「山本さん」に決めたと記憶している。それから1週間後、「海山さんによろしく」と手紙に書いてあった。戦地に行けば危険も増す。不安が一気に膨らんだ。

しばらくして、近所の山で警備をしていた兵隊から、「福岡から出た船は、魚雷を受けて、1隻か2隻しか残らなりましたよ」と聞いた。満さんの船ではないことを願った。

自分の誕生日 息子出産

1945年7月、中村キクヨさんは自宅で産気づいた。

だが産婆が見つからず、母キチさんが走り回って探してきてくれた。そんな最中、空襲警報が鳴った。防空壕くうくわうに逃げるように言われたが、中村さんは「私は動ききらん。避難はしない」と訴えた。それを聞いたキチさんは「死ぬなら一緒に死のうね」と付き添ってくれた。

長男が生まれたのは、中村さんと同じ誕生日の7月1日。

「主人もいないし、この子とは離れることはできん」との思いが強くなった。名前は父菊太郎さんが義満よしみつと決めた。源義経のように強くなつてほしいと「義」、夫満さんの「満」をとった。

ただ、義満さんは2千グラに満たない未熟児だった。当時は栄養不足で中村さんの母乳も思うようになかった。1カ月に1回配給されるミルクでは足りず、近所の人から母乳を分けてもらったり、米のとき汁を温めて飲ませたりした。「いつ死んでもおかしくない」と不安を抱えながらの生活だった。

蒸し暑い壕 産後過ごす

空襲警報は増えるばかり。産後で体力が落ちていた中村キクヨさんは「防空壕くうくわうに行っても生ききらん」と母キチさんに訴えた。キチさんは「(夫の)満さんが戦地から帰つて来るまで、死んでは駄目。(長男の)義満がいるんだから」としかつた。それ以来、狭く蒸し暑い壕で多くの時間を過すごした。

8月9日も朝から空襲警報が鳴り、防空壕にいた。空襲警報が解除され、キチさんに義満さんを預け、布おむつを洗って干している時だった。太陽がキラキラして、「なんだろうか」と思った時だった。

ドーンという音と爆風。近所に爆弾が落ちたと思った。目を開けると10メートルほど飛ばされていた。家の中へ急ぎ、「義満！」と呼んだ。義満さんを抱きかかえ、タンスの下敷きになっていたキチさんの声が出た。「義満は元気よ」。爆心地から5・8キロだった。

家族に大きなけがはなかったが、詳しい状況は分からない。夕方、自宅近くの棧橋に船が到着すると、急に騒がしくなった。

激しいやけど 口はどい

棧橋に着いた船からは、十数人の若者が担架に乗せて運び出された。全員が息も絶え絶えだ。船の乗組員にどうしたのか聞くと、「長崎大の学生ばい。長崎は駄目ばい」。

若者は砂浜に並べられた。中村さんや近所の人たちは、

家から毛布を持ってくるなどして走り回った。毛布はすぐに血でべっとりして使えなくなった。「水、水」とうめき声が聞こえる。あまりに水を求められるため、中村さんはけが人の見回りをしている人に、「水って言ってます！」と訴えた。だが、「水をあげては駄目です」と止められた。

見回りの人が船に戻ったのを見計らい、中村さんは首にかけたタオルを水でぬらし、それを垂らして飲ませた、と思う。やけどが激しく、口がどこにあるかも分からない。目を背けながらの作業だった。水をあげると静かになる人、足をつかんで「お母ちゃん！」と声をあげて息絶えた人もいた。4人目くらいで水が出なくなった。夜、家に戻っても浜辺からうめき声が聞こえた。

親戚の3遺体 今も不明

中村キクヨさんのめいとおい、叔母は、爆心地に近い岩川町に住んでいた。原爆投下の翌日、安否を確認するため、長男の義満さんを母キチさんに預けて、父菊太郎さんと一緒に向かった。小瀬戸町から船は出ておらず、2時間以上

かけて山を越えた。

市街地に近づくとも遺体があちこちで積み重ねられ、電車は黒こげ。家々は跡形もなくなっていた。長崎駅までは何とか行くことができたが、八千代町で通行が規制され、北上することができなくなった。

憲兵のような人に聞くと、「岩川町はもう駄目ですよ。

誰もいませんよ」と言われた。辺りの状況を見ても、3人が生きていないことは何となく分かる。そのまま引き返した。

3人の遺体は今も見つかっていない。岩川町の寺に墓があるが、骨は入っていない。あの時、探しに行くことができなかったという申し訳なきが中村さんにはある。

今でも岩川町周辺を通るたびに、「この下に骨があるのでは」と思う。

近くの島へ遺体運んだ

小瀬戸町の浜辺に運ばれた被爆者は2日ほどで全員が亡くなり、放置されていた。打ち寄せる波が遺体にかかる。

「どうすればいいのか」と悩んだ。県庁に伝えても対応してもらえない状況ではないと思った。近所の人に相談しても、「分かん」と言うばかり。

父菊太郎さんは、朝鮮人たちが住む地域を訪れ、遺体について思案していることを伝えると、協力してくれることになった。5人ほどが雨戸で作った担架を持ってきた。

小さな船で近くの高鋒島に運ぶことになった。船に遺体を2人ずつ乗せ、何回か往復。中村キクヨさんは一緒に行かなかったため、遺体が埋められた詳しい場所は知らない。

菊太郎さんは朝鮮人に「ご恩は一生忘れません」と伝えました。朝鮮人が自宅の本棚を見て「あの本を読ませてくれませんか」と言うので、太宰治の本など2冊を渡した。

中村さんは、平和活動を通じて韓国人と会うたびに、あるとき助けてくれた人を知らないか、いつも聞いている。

夫が帰還し次男が誕生

終戦から半年、夫の満さんから手紙が届いた。「子どもは生まれましたか」などと、色々な人から寄せ書きがして

あった。満さんの船団は敵の攻撃を受けて目的地まで行けず、朝鮮半島に避難して生き延びたという。中村キクヨさんは無事を知り、ほっとした。

それから1年ほどして、満さんが家に帰ってきた。母キチさんが長男の義満さんを抱き、その後ろで中村さんが出迎えた。リュックを担いだ満さんは中村さんを目の前に、「中村キクヨさんはいますか」と聞いた。中村さんは「私がキクヨです。満さんですよ」と言った。

見合い後すぐに結婚、短い結婚生活で出征したため、満さんは中村さんの顔を忘れていたのだ。それに気づき、3人は大笑いをした。

1947年には次男の廣ひろしさんが生まれた。義満さんと違い、大きな子だった。義満さんには十分与えられなかった母乳を、いっぱい飲ませて育てた。

友の会発足 会員集める

1967年、一人の男性との出会いが、中村キクヨさんを被爆者運動に向かわせることになった。後に県被爆者手

帳友の会の会長となる深堀ふかほり勝一かついちさん（2006年に死去）が、被爆者の実態調査をするために小瀬戸町を訪れた。

深堀さんは中村さんに、「軍人恩給と同程度に、被爆者も国から補償をもらうべきだ。団結しないと国は動かない」と協力を求めた。当時はすでに、放射線による健康被害も明らかになっていた。中村さんは被爆者への補償を求めて行動する必要性に共感し、協力することにした。

同年、友の会が発足。中村さんは中心メンバーとなった。被爆者から健康不安を聞いたり、被爆者健康手帳の申請などをアドバイスしたりしながら、会員集めに奔走した。小瀬戸町の人の多くも会員になってくれた。長崎市内で一定の会員が集まってからは、市外にも範囲を広げた。中村さんは離島を担当。家族と過ごす時間を犠牲にしながら活動した。

東京へ陳情に行く日も

被爆者援護施策を充実させるため、と説明すると、多くの被爆者は「それならば」と、県被爆者手帳友の会に入会

してくれた。中村キクヨさんを信頼して入ってくれる人もいた。「入ってくれた人のために、徹底的にやらない」と、つらい時でも頑張った。

会費が集まるようになると、東京へ陳情にも行くようになった。援護制度は少しずつだが、改善をしているという実感があつた。2006年には副会長にもなった。

だが、2人の子は母キチさん任せで、夫の満さんにも不自由をさせていた。満さんとケンカにもなった。「なんでお前がそこまでのめり込まんといけんのか」とよく言われた。会員のためにも、と説明すると「わかっとっさ」と言ってくれるが、「そこまでする気持ち分かん」と最後にほぼやかれた。

1995年に満さんが入院。看病をしていると「友の会に行かんでいいのか」。たまに行く時は、「ええよ」と笑顔で送り出してくれた。満さんは1997年に亡くなった。

次男が白血病で入院

2001年、中村キクヨさんは次男廣さんの妻から「廣さん、今日は病院に行くそうです」と伝えられた。翌日もそのまま病院にいるという。4、5日しても病院にいる。中村さんは病院へ向かった。廣さんは「毎日、検査、検査だよ」とケロッと座っていた。だが、2週間しても入院しただけだった。

たまたま、妻に「がんじゃないかしら」と聞いた。妻から聞いた話に言葉を失った。「先生が、母親からもらったて言うの」。どういうことだろう。医師に直接聞いた。廣さんは白血病だと告げられた。そのうえで、「お母さん、原爆にかかってますか。母乳をあげましたか」と聞かれた。長男の義満さんに母乳を満足に与えられなかった分、廣さんにはたっぷり母乳を飲ませた。「あの子には、たっぷりあげました」。医師は「原因はそれなんですよ」と言った。被爆2世への遺伝的影響の有無は解明されていない。それでも、中村さんは「申し訳ない」という気持ちで泣きはらした。

次男の死 誰にも言えず

次男廣さんの白血病について、中村キクヨさんは自分が被爆後に爆心部に近づいたことや、被爆者の看病をしたせいではないかと悩んだ。廣さんは2003年、55歳で亡くなった。被爆者運動を続けるなかで、放射線が被爆2世に影響を残しかねないと改めて知った。それでも、廣さんの死については誰にも言えずにいた。孫たちが結婚などで差別を受けるのを心配したからだ。

06年、平和祈念式典で被爆者代表が読み上げる「平和への誓い」をしないかと、県被爆者手帳友の会会長の井原東洋一さん（本欄で13年12月3日〜26日に掲載）から誘いを受けた。

当初は断ったが、熱心にお願いをされて引き受けた。3日ほどかけて、被爆体験や平和への思いを書き出してみた。だが、井原さんの反応はいまひとつだった。他にも何か書くことはないのか、と聞かれ、廣さんのことが頭に浮かんだ。悩んだ末、井原さんに廣さんの死について伝えた。

次男の死「誓い」で話す

井原東洋一さんからは、平和への誓いで次男廣さんの死を伝えるべきだと言われた。中村キクヨさんは、長男義満さんや3人の孫たちを集まってもらい、相談した。入院している頃の廣さんを、みんな交代しながら泊まり込みで看病してくれた。

「平和への誓いを読むのだけど、廣のこと、言おうかと思う」。被爆2世の問題を提起したいとの思いを伝えた。孫たちの将来の結婚にも影響するのではないか、との不安も告げた。だが、皆が「被爆者のために一生懸命やっている姿を見てきたから、言ってもいいよ。自分たちは割り切るから」と背中を押してくれた。

式典の当日。中村さんは参列者の前で、廣さんが白血病で亡くなったことを語り、「放射線がまだ生きていたので」と訴えた。被爆2世、3世への援護の重要性も強調した。

式典には孫たちが来てくれていた。涙を拭いながら、「おばあちゃん、よかったよ」と言ってくれた。

世界を巡り体験伝える

次男廣さんの死を取り上げた「平和への誓い」の反応は、想像以上に大きかった。ある男性は式典後に手を握り、「僕の子どもも同じ。言ってくれてありがとう」。手紙も届いた。「車を運転しながら聞きました。心当たりがあります」と書いてあった。「話してよかった」と思えた。被爆者運動では2世の問題にも力を入れるようになった。集会では廣さんの話をするが多くなった。

2008年にはピースボートに乗り、地球1周に参加。数人の被爆者とともに、世界各地で被爆体験を語るプログラムだった。4カ月という長い期間だったが、被爆体験や、廣さんの話もしたいと思い、決意した。

米国では現地の高校生に被爆体験を伝えた。生徒の「政府が悪い。私たちは悪くない」「戦争はやるか、やられるか」との感想にショックを受けた。「戦争は駄目、という認識が薄い」と思った。「戦争であっても、原爆は落としてはいけない。平和を心に刻んでください」と中村さんは訴えた。

伝え方いろいろ、と実感

中村キクヨさんは2008年10月、米ニューヨークの国連本部で開かれた国連総会第1委員会を傍聴した。委員会では、広島で被爆し、さまざまな国際会議で証言してきたサーロー節子さんⅡカナダ在住Ⅱが発言をした。

中村さんはニューヨークでサーローさんと同じ部屋に宿泊していた。夜になると、サーローさんは分厚い本を読み、勉強していた。国連で証言するための準備だという。被爆証言は自分の体験を語るだけだと思っていた中村さんは、「何を勉強するの?」と聞いた。サーローさんは、世界の代表に説得力を持つて聞いてもらうためには、被爆体験に加え、核廃絶がなぜ必要なのかを客観的な情報も交えて伝える重要性を説いた。

正直ピンとこなかったが、中村さんは国連のサイドイベントで、自身の被爆体験や次男廣さんが白血病で亡くなったことを精いっぱい伝えた。それを聞いた人からは「真実の言葉を聞いて感激した」と手を握られた。被爆者それぞれの伝え方があるんだと思った。

今も悩み、祈り、行動

ピーズボートでの世界一周を終え、中村キクヨさんは「体力的に大変だったけど、自分にできることは続けていきたい」との思いを新たにしたい。

最近の悩みは、被爆者の高齢化が進み、県被爆者手帳友の会の会員が減っていることだ。援護施策がかつてに比べて整い、「道筋はある程度つけられた」と感じている。

一方で、「この先は運動を続けても同じやろ」と言っている退会を希望する人もいる。中村さんは「運動をしていかないと、今の制度がいつまで続くかわからない」と訴える。毎月9日には欠かさず、平和公園で、友の会が中心になって作った「長崎の鐘」を突く。

白血病で亡くなった次男廣さんのことも、集会などで話すようにしている。ただ、東京電力福島第一原発の事故後は迷いも出てきた。これから子を産む被災地の人たちを不安にしてみまわないか、と思うからだ。原爆投下から69年がたった今も、悩み、祈り、行動し続ける。

安倍氏再登板 9条心配

井黒 キヨミ

長崎市香焼町の井黒キヨミさん（86）の小さな黒い手提げかばんの取っ手には、日本国憲法9条の条文が書かれたカードが下がっている。「つけておかないと気持ちが悪く落ちて着かなくて」。安倍晋三首相が最初の政権の座にあった2007年、憲法改正の手続きを定める国民投票法が成立した。「9条改悪は絶対に嫌」。通っている香焼民主診療所の受付で、1枚200円で売られていたカードを見つけた。思わず買い、お守りとして持つことにした。

安倍氏は26日、再び首相になった。「憲法を改正し国防軍を規程する」「自衛隊の集団的自衛権行使を可能にする」と政権公約に掲げ、総選挙で大勝した。

「9条を改正されたら一番困る」。憲法9条があるから、戦後67年、日本で戦争が起ころなかつたと思う。自分の気

持ちは5年前と変わらないのに、これからの日本は戦争放棄をやめてしまうのではないかと心配が募る。「戦争の愚かさを知ってほしい。核兵器をなくしてほしい」

製糸工から子守奉公へ

井黒キヨミさんは矢上村田中名（現・長崎市田中町）で生まれた。矢上尋常小学校（現・長崎市立矢上小学校）を卒業後、後に富岡製糸場を合併する片倉製糸紡績（現・片倉工業）の諫早工場に就職した。繭から糸を採って生糸にする操糸工場に配属された。工場には私立片倉諫早青年学校が併設され、寮暮らしで昼間は仕事、夜は勉強だった。学校では遠足や海遊び、大運動会や演芸会もあった。

午後3時のおやつが楽しみだった。作業をしている工具の足元に、1人ずつ箱が置かれている。指導員がそばを歩きながら、ふかしたサツマイモを1本ずつ箱の上に乗せていく。残ったイモはまとめてざるに入れた。みんな1本では足りず、ざるからも取り、寮や家に持ち帰って食べた。

朝昼晩の食事は食堂でとった。「あんたはこまかけん、いっ

ばい食べんね」。調理の女性にいつも言われた。

1年ほどで工場を辞め、裁縫を習っていたが、勝山国民学校（現・市立桜町小学校）の教師の自宅で子守奉公をするようになった。

兵隊出せず「肩身狭い」

井黒キヨミさんは1942年10月、勝山国民学校の教師宅での子守奉公から、長崎市桜馬場の中村医院の看護婦見習い兼家事手伝いになった。医院で働いていた2番目の姉の森キクミさん（90）が看護専門学校に通うことになり、キヨミさんが代わった。

尋常小学校を卒業した頃から従軍看護婦に憧れた。父の井原平作さん（^{へいさく}）はすでに年老いていて、弟の東洋一さん（^{とよかず}）（76）と満潮さん（^{みしほ}）（2000年に70歳で死去）は当時まだ幼く、徴兵の年齢に該当する男の人が家にいなかった。「みんなお国のために戦っているのに、うちだけ肩身が狭い」。誰に非難されたわけでもないが、心苦しく感じた。

中村医院で働きながら、夜は長崎市磨屋町の下村病院

（現・古川町のしもむら産婦人科）に併設の長崎産婆学校に通った。人体の仕組み、胎盤の大きさの量り方、包帯の巻き方。一生懸命覚えようと必死だった。同じ目標を持つ友達もでき、医院と学校を行ったり来たりするのが楽しくて仕方なかった。

目のくらむ光 家揺れる

1945年8月9日、井黒キヨミさんは住み込みで働く桜馬場の中村医院にいた。

爆心地の南東3・2^キ。台所で昼食のカボチャを煮っていると、窓の外で飛行機の爆音がした。院長の妻に「警戒警報は解除されたのに変ですね」と言い、一緒にガラス戸を開けた瞬間、目のくらむような光が走った。2、3秒後、ドーンという音とともに熱風が吹き抜けた。家がぐらぐら揺れ、台所の戸棚が倒れた。

2階の表部屋に年老いた女性患者がいた。「中村先生の家にいれば爆弾に遭わないと観音様のお告げがあった」と話し、半年前から居候していた。女性の部屋に駆け上がる

と、女性は顔中血だらけ。ホオウホオウと泣くよううめくような声を出していた。顔をタオルで押さえ、1階に連れて行って消毒した。

2階の裏部屋には院長の弟家族が住んでいた。はいはいができるようになったばかりの赤ん坊が分厚い壁の下敷きになり、気絶していた。院長がカンフル注射を打つと、ぎゃつと泣き出して皆で安心した。

水求める声 耳突き刺す

原爆投下直後から、井黒キヨミさんが働いていた中村医院に次々とけが人がやって来た。最寄りの伊良林国民学校（現・長崎市立伊良林小学校）の救護所を教えたり、看護婦見習いの仲間4人で交代して救護所に連れて行ったりした。院長は救護所の所長だった。

見習い4人は「何かあれば受け入れる」と約束してくれていた医院の患者が住む矢上村に避難し、そこから救護所に通って手伝った。むしろに寝かされた人たちが「水をください、水をください」とかすかな声で叫んでいた。井黒

さんは「ちょっと待ってね」「後でね」と言って通り過ぎるしかなく、求める声が耳の奥に突き刺さった。院長は「水ばやったら生き残れん。5分でも10分でも息つなぎたかけん、絶対やらんで」と注意した。

胸も背中も肉がえぐれ、骨の透けた若い女性が竹の編みかごとつり下げられていた。心臓の辺りがびくびく動くのを見て「こんなに無残なことがあつとばいね。もう戦争は嫌」と思った。光景が目の奥にこびりついた。

院長家族の遺品受け涙

原爆投下の3日後、井黒キヨミさんが職場の中村医院に行くと、8人の遺骨があった。院長の長女、次女、その子どもや義母らだった。長女は城山町、次女は銭座町に住んでいた。院長はほとんど1人で救護所の負傷者を診ながら、時間を見つけて家族を捜した。娘2人が半焼けで見つかり「ひとりで火葬してきたよ」と話した。救護所となった伊良林国民学校の校庭にも次々と遺体が運び込まれ、焼かれた亡きがらから上る青白い煙が夜空に光った。院長は「食

欲がない」と言って、炊き出しのおにぎりを口にしなかった。

井黒さんは、院長の長女の荷物を預かっているという人から連絡を受け、城山町まで取りに出かけた。手渡された三つの風呂敷包みを開くと、長女の浴衣や帯、その息子2人のメリヤスのシャツが入っていた。涙が出た。

1945年8月15日、正午に重大な放送があると救護所で言われた。中村医院でラジオをつけたが雑音で聞き取れない。院長の娘婿の医師に「戦争は終わったよ」と言われた。

玉音放送 切れた緊張感

戦争が終わったと聞かされた井黒キヨミさんは、体がふらふらとした。原爆投下後も「日本は勝つ」と信じ、看護婦見習いの仲間と軍歌「勝利の日まで」を口ずさみながら避難先の家と救護所を往復していたが、玉音放送の後は張りつめていた糸が切れた。

夕方、救護所から矢上村の避難先の家に帰り、終戦の話

をしていると、それを耳にした家主の奥さんが「何言うた？ 日本は負けん。憲兵隊まで引つ張って行くぞ」とすごい形相でにらみつけ、泣きわめいた。その家の息子2人はそれぞれ海軍と陸軍に行っていた。

井黒さんは従軍看護婦になることが夢だったが、戦争が終わればもう必要ないと思った。救護所で院長の補助をした1週間、助けた人を助けられなかった。看護婦になりたいという気持ちも薄れた。終戦後、中村医院の見習い仲間は故郷の島原や五島に帰り、井黒さんだけが残った。1947年8月、破傷風を患う母カノさんの看病のため、医院を辞めた。看護婦の資格は取らないままだった。

「原爆で流産」なじられ

井黒キヨミさんは母のカノさんを亡くした後、1955年から3年間、長崎市の運送会社の食堂で働き、59年に古賀村中里名（現・長崎市中里町）出身で遠洋漁業の船員をしていた男性を紹介され、最初の結婚をした。新居は飯盛村平古場名（現・諫早市飯盛町平古場）で、夫と義父母の

4人暮らしだった。

しゅうとめから原爆に遭ったことを口外しないようにと言われた。近所の人が知れば、奇形児が生まれるかもしれないとうわさするからだという。井黒さんは「はい」とだけ返した。もともと話す必要はないと思ってきた。54年の米国ビキニ水爆実験で初めて「放射能」という単語を耳にしたが、ケロイドやけどのある人が被爆者で、外見に何の傷もない自分を被爆者と意識したことはなかった。

結婚して8カ月後、雨あがりの石の上で滑った。家に帰るとおなかが痛み、トイレで用を足すと、何かがぼそっと落ちた。病院で流産と言われた。妊娠に気づかなかった。「原爆のせいだ」。しゅうとめになじられた。

義父母と不仲募り離婚

井黒キヨミさんの流産がわかると、しゅうとめは「原爆のせいだ。今より先が恐ろしか」と言った。次は奇形児が生まれるかもしれないと、根拠もなくねちねち繰り返した。夫は遠洋漁業の船に長期間乗っていて、流産のことは知ら

ない。近所では「夫の子を産みたくないから墮胎した」とうわさされた。父の遠縁との結婚だったので、父に相談しても困らせるだけだと思い、言わなかった。3人の姉には明かしたが、親身に相談に乗ってくれるはずの母はすでに亡くなっていた。

流産がわかった翌日から畑仕事に出た。2、3日は産婦人科に通ったが、医者にかかることすらしゅうとめは良く思わなかった。

自殺を考えて睡眠薬を隠し持っていたが、「ここで死んでも足蹴にされるだけ。出れば何とかなるかもしれない」と思った。結婚から2年後の1961年、しゅうとめの言い争いを機に家を出て離婚した。長崎市籠町の旅館で1カ月ほど仲居をした後、東京で暮らす一番上の姉マツミさんに上京を勧められた。

帰郷 誘われ被災協入り

東京に出た井黒キヨミさんは品川区に本社がある仁済看護婦家政婦紹介所（現・仁済）に就職し、入院患者に付き添ったり、個人宅の家事手伝いをしたりした。屋根の修理工、冷凍食品を扱う経営者、証券会社の社長などさまざまな職業の人と出会えて楽しかった。

1969年、親類から「ふらふらせず早く所帯を持ちなさい」と長崎に呼び戻され、縁談を持ちかけられた。「もう1回東京に行くから断っておいてね」と頼んだのに、知らない間に話が進められ、再婚が決まった。だが、7年後、再婚相手を胃がんで亡くした。

土木作業員になり、男性に交じって鉄筋を運び、つるはしを振るった。長崎市中町に県漁船保険組合の会館を建てたとき、組合に頼み込んで掃除や調理の仕事を得た。10人ほどと見合いの話があり、高島炭鉱で働いていた井黒義孝さん（2005年死去）と3度目の結婚をした。炭鉱閉山後は今も暮らす長崎市香焼町へ引っ越した。80年ごろ、近所の人に誘われて長崎原爆被災者協議会に入った。

初めて被爆仲間と行動

井黒キヨミさんは1980年ごろ、長崎原爆被災者協議会に入った。78年10月、放射線漏れを起こした原子力船むつの佐世保入港に反発し、79年3月から平和公園で始まった「反核9の日座り込み」にも加わった。むつ廃船や核廃絶を訴えるビラを配り、原爆で右半身不随になった松谷英子さん（70）が原爆症認定を求めた訴訟を支援した。それまで被爆者と一緒に行動したことはなかった。

東京で家政婦の仕事をしていた64年、病院で知り合った人に誘われ、千駄ヶ谷の東京体育館であった第10回原水爆禁止世界大会東京大会を見に行ったことがある。体育館に入りきらないほどの参加者を見て「仲間はいっぱいおととばいね」と感じた。だが、東京の被爆者団体を探そうと都庁で尋ねても、職員は要領を得ない。長崎に住んでいたときは「みんな被爆しているから話す必要もない」と考えていたが、離れて初めて、皆に被爆体験があるわけではないし、同じ被爆者でもそれぞれ違う体験を持っていると思知らされた。

海外で講演 拍手に自信

井黒キヨミさんは2008年9月～09年1月、国際交流NGOピースボートの「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」に参加した。広島、長崎のほか、海外在住の人も含む被爆者103人で20カ国を旅した。

寄港地の一つ、ベネズエラで初めて人前で被爆体験を語った。引き受けた当初は心配だったが、原稿を考えようと当時の様子を思い起こすと言葉があふれ出た。日本語で10分のスピーチが英語、スペイン語にそれぞれ訳され全体で30分。拍手をもらい「どうにか伝わったかな」とほっとした。「私にもできた。話してみてもよかった」。自信につながった。

10年には核不拡散条約（NPT）再検討会議に合わせ、米ニューヨークを訪れた。「地球市民集会ナガサキ」実行委員会の代表団で最年長。弟の井黒東洋一さんが会長を務める県被爆者手帳友の会の会員仲間と外務省の非核特使としても10年にトルコ、11年にネパール、12年にスペインで原爆について伝えた。「何が原動力か自分ではわかりません」

広島慰問 核廃絶へ決意

井黒キヨミさんは33歳で流産し、その後も子どもは産まなかった。でも、我が子のように慕っている「坊ちゃん」がいる。

東京で家政婦として世話になった証券会社社長の孫。当時のアルバムのページには、坊ちゃんの写真がたくさん貼ってある。邸宅の庭、近所の遊び場、旅行先……。笑顔に癒された。「なんでか自分の子がほしいとは思わなかったね」。坊ちゃんは博士号を取り、大学で研究職に就いた。会わなくなつて久しいが、毎年、お中元とお歳暮を送つてくれる。坊ちゃんが甘党だから洋菓子が多いが、昨年末は老舗ホテルのスूप缶だった。

今は誰も恨んでいないし後悔もしていない。昨年、初めて広島の平和記念式に参列した。その前日、被爆者が入居する養護ホームを慰問し、「つらい苦しい思いをした被爆者同士、核兵器廃絶と世界平和のために、私も命の限り頑張りたい」とあいさつした。どこにいても被爆者仲間の顔を見るとほっとする。

亡き友人を思い 水供養

早崎 猪之助

昨年夏から秋にかけて、長崎市の早崎猪之助さん（77）は毎日、平和公園に足を運んだ。

朝から夕方まで、園内の平和の泉からバケツに水をくみ、学徒動員中に被爆死した学生らを悼む碑の前に置いた。手作りの看板も掲げた。

「原爆の時、水を欲しがりました。どうぞ花に水を与えて下さい」

公園を訪れた人が、ひしゃくで水をすくい、お供えの花にかけてくれた。その人たちに、早崎さんは自身の被爆体験を話すようになった。

水供養を始めたきっかけは、碑に供えられた花が夏の日差しでおれた様子を目にしたことだった。原爆投下直後、「水をくれ」と繰り返し返して亡くなった友人たちの姿と重

なって見えた。

あの時、自分は田んぼの泥水しか与えることができなかった。飲ませてやれなかった水をあげ、霊を慰めたい。そして被爆体験を伝えることが、生き残った自分の使命だと感じた。

死んで名誉 何になる

早崎猪之助さんは深江村（現・南島原市深江町）出身。14歳だった1945年7月1日、3カ月の研修を終え、長崎市の三菱重工長崎兵器製作所大橋工場の技術部実験場に配属された。燃料によって兵器の効果がどう変わるかを調べる秘密部門で、32人が働いていた。

「人間魚雷」と呼ばれた丸四艇の実験にも立ち会った。幅1トイ30センチ、長さ4トイほどの艇に火薬を積み、トロツコにくくりつけて爆発させ、衝突時のエネルギーを調べた。火をつける、立ってられないぐらいの轟音ごうおんが鳴り響いた。艇に乗り込む特攻隊員のことを考えた。「どんな気持ちで乗るとやろうか。命はいっちょ（ひとつ）しか持たんけど、

国のためだからしょんなか（しょうがない）」

当時、学校では「死んだら靖国神社に神としてまつられる。お前たちは名誉な時代に生まれたことに誇りを持って。

一日も早く兵隊になるように」と教えられていた。でも、「死んで名誉が何になるか」という思いはぬぐえなかった。

奇跡 打撲だけで助かる

45年8月9日朝、早崎猪之助さんは、三菱兵器製作所大橋工場にいた。

シャツが油で汚れても洗い落とすせっけんがなかったため、上半身裸に裸足で作業をした。空襲警報が鳴り響いたが、しばらくすると解除になり、作業に戻った。エンジンの部品を取り換え、実験を始めようとすると、上司から呼ばれた。「この歯車のピンの先を少し削ってくれ。今すぐだ」。

実験の度に使っていた秒針つきの大きな掛け時計を見ると、午前11時1分を指していた。15分離れた機械室に小走りで行った。

ピンの先を研ぐ機械の横には、幅1メートル以上の鉄筋の柱があった。それに寄り添うように立った瞬間、青白い閃光に包まれた。雷の何百倍という爆音が響き、体が1メートルほど浮いた。8分ほど先には、扉をはずした冷蔵庫が置かれていたが、その庫内まで吹き飛ばされた。そのためか、早崎さんはひじを打ち付けただけで奇跡的に助かった。だが、持ち場にいた上司や仲間は全員即死だった。

救命の声…何もできず

三菱兵器製作所大橋工場は爆心地から約1・1キロにあった。原爆投下直後、工場内は昼間だというのに真っ暗だった。

被爆から20分以上たって、早崎猪之助さんの視界は、やっと少しずつ開けてきた。明るい方へ逃げ出した。何ともあるはずの機械は吹き飛ばされたのか、姿を消していた。建物の外に出ると、黒こげの人や血が噴き出した人が倒れていた。あの日、約7500人が工場で働いていたとされる。だが、誰一人、歩いている人はいなかった。周辺の田んぼ

の稲も焼き尽くされていた。

逃げる途中、煙が立ち上る家の前で女性が近づいてきた。「中に子どもと祖父母がいます。助けて」。だが、当時14歳の早崎さんには、どうすることもできなかった。さらに進むと、5歳ぐらいの子どもが「母さん、起きられ起きれ！」と大声で泣いていた。その先では、家々が燃えさかっていた。がれきの下からは助けを求める声が聞こえてきた。だが、その声も一つ、また一つと消えていった。

水与えた自分「人殺し」

早崎猪之助さんは原爆投下直後、山の中に逃げようとした。だが、あたりに煙が立ちこめており、三菱兵器製作所大橋工場に引き返した。約5万坪の工場は全壊していた。

近くにあった線路に行くと、けが人が横たわっていた。

「水をくれ」「水、水」と、小声で叫んでいた。遠くでは、大人が「水を飲ませると死ぬぞ」と叫び回っていた。だが、水を求める目の前の人の中には、一緒に働いていた友人もいた。心は揺れ動いた。「この人たちは、あと何時間の命

だ」と、決心をした。燃える布団を引き破って綿を出し、田んぼにつけて、泥水を含ませた。人々の口に水を絞り込むと、ゴクゴクと飲んだ。

25人ほどに飲ませた後、最初に飲ませた友人のところに戻ると、息がない。名前を呼びながら胸を揺さぶると、皮がズルリと剥けた。見回すと、みんな死んでいた。水を飲ませたからではないかと、自分を責めた。「なんて罪なことをしてしまったんだ。人を殺してしまった」。涙が止まらなかった。

けが人装い救援列車に

爆心地から1・1^キの三菱兵器製作所大橋工場の周りには原爆投下直後、けが人があふれ、まともに会話できる人はいなかった。早崎猪之助さんはどうしていいかわからなくなつた。

その時、遠くから汽笛が聞こえた。6両の救援列車がやって来た。枕木の火を消しながら、500^ト進むのに30分ほどかかり、照円寺の前で止まった。

とにかく、深江村の実家に帰ろうと考えた。列車に近づくと、「けが人が先だ。君はけが人を運べ」と、担架を渡された。だが、一緒に担架を持てる人がいなかったため、それを脇に放り投げた。列車が来る度に500人ほどが乗せられたが、けが人はいつこうに減らない。早崎さんは3回目の列車に乗り込んだが、すぐに降ろされた。

「このままでは帰れない」。田んぼの泥を全身に塗り、やけどを装った。夜になり、4回目の列車が無灯火のまま到着した。早崎さんはいすの下に潜り込み、息を潜めた。

隣の女性が途中で絶命

原爆が投下された日、早崎猪之助さんは、夜になってようやく救援列車に乗ることができた。

真つ暗な車内では、ほとんどのけが人が座っていられず、横たわっていた。話をする人はいない。低く小さなうめき声だけが響いていた。不気味だった。早崎さんがいすの下に寝ころんでいると、真上に座っていた人が床に倒れ込んだ。空いた席に着くと、右横には20歳ぐらいの女性が座っ

ていた。髪も着物も焼け切れていた。

途中、女性が早崎さんの肩に寄りかかっていた。触れた腕から、ぬくもりが伝わってくる。重みに耐えられず、押し返した。それでも、また倒れてくる。何度も繰り返し返したが、しばらくすると、腕が冷たくなっていった。「死んだのだ」と直感した。何もできず、ただ列車に揺られていた。

2時間後、諫早駅に着いた。歩いて降りる人はいない。警防団の男性の声が響いた。「この列車は死んだもんが10人ぐらいおっぞ。どうすつとか。諫早で降ろすとか」。女性も担ぎ出されていった。

終戦に「死なんて済む」

原爆投下翌日の未明、早崎猪之助さんは深江村の実家にたどり着いた。ひどく疲れ、数日間寝込んだ。死人にはかり囲まれた光景がよみがえり、うなされ続けた。「あの時、あの子どもを助けてやればよかった……。でも、自分には何もできなかった」。そんな思いが浮かんでは消えた。

8月15日、双子の弟が自宅のラジオで玉音放送を聞き、

早崎さんの部屋にきた。「戦争がやんだらしかばい。勝ったっちゃろうか、負けたっちゃろうか」。心配そうな表情だった。ラジオで「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」までは聞こえたが、それ以降は電波が悪く聞き取れなかったようだ。

早崎さんは答えた。「勝ちも負けもあるもんか。戦争が終わればよかばい。お前たちも死んで済む」。翌16日夕方、近所のうわさで敗戦と知った。「負ければアメリカの奴隷になる」と聞かされていたので、少し不安だった。それでも、「これで戦地に行かなくてよくなる」という安心感のほうが勝った。

髪が抜け死におびえる

早崎猪之助さんは終戦後しばらく、深江村で家業の製粉業を手伝って過ごした。

46年9月、40度の高熱が10日間ほど続き、寝込んだ。医者にかかったが、「熱病」と言われただけで、原因はわからなかった。氷枕で冷やすことしかできなかった。熱が下

がると髪が抜け始め、1本残らず無くなった。

近所では、原爆投下直後に救護や肉親捜しで長崎市内に入った数人が、髪が抜けた後に亡くなっていた。当時、「長崎には毒の風邪があるから行くな」と、うわさになっていた。「原爆のせいじゃなからうか。自分も死ぬんやろうか」と、早崎さんは恐ろしくなった。それから1年ほど、髪の毛は生えてこなかった。だが、その後は体調を崩すことなく暮らすことができた。

49年、旧ソ連のシベリアで抑留されていた6歳上の兄が帰ってきた。家を守る必要がなくなり、働くために長崎市内へ再び足を踏み入れた。被爆から7年後だった。

今の平和 意義語りたい

早崎猪之助さんは戦後、大工やスーパーの社員として働いた。妻と3人の子どもの生活をやりくりすることに精いっぱい、原爆について思い出す余裕も、反核運動の携わる時間もなかった。

74歳で退職したのを機に、被爆体験を次の世代に伝えよ

うと考えるようになった。08年10月、横1^{メートル}、縦85^{センチ}の画用紙に、県庁まで燃えた市内の様子を描いた。当時を思い出しながら、赤い水彩絵の具を爆心地を中心に広い範囲に塗った。絵筆を走らせると、様々な声が耳の奥に響いた。家の下敷きになり、生きながらにして炎に巻かれていった人たちの声。動物とも人間ともつかない声。「助けて」とも言えず、キーキーと叫ぶだけの声……。あれはこの世との別れの声だったのだと思った。

20代の孫娘からは「運の悪か時代に生まれたね」と言われる。だからこそ、たくさんの犠牲の上に今の平和があることを子どもたちに知らせたい。

今年、語り部として活動を始める。

長崎新聞 わたしの被爆ノート 忘れぬあの日より掲載

みな口々に「水欲しい」

坊上 テイ

当時、私は東彼杵郡宮村（現在の佐世保市宮地区）にある国民学校高等科二年生（十四歳）だったが、学徒動員のため宮村の自宅から東彼川棚町の川棚駅へ通い、切符切りやポイントの切り替え作業をしていた。

あの日も、いつもと同じように作業をしていると、長崎市の方向の空に、灰色の雲を見つけた。その時は、原爆のきのこ雲とは夢にも思わず、仲間たちと「あれ、何やらか？」と見上げながら話ただけで、あまり気にしていな

かった。

翌日、駅には早朝から地元消防団の大人たちが集まり、全身に大やけどを負った人たちが、次々と列車で運ばれてきた。大人たちから「長崎に大きな爆弾が落ちて、ひどいことになっている」と聞き、初めて原子爆弾が投下されたことを知った。

運ばれてくる被爆者は、みな年齢や性別が分からないほど、全身紫色に焼けただれ、私は子どもながらに焼きナスやイチジクのようなだと思った。その記憶は今も鮮明に残っている。

大人たちは戸板に被爆者を乗せ、川棚海軍共済病院（現在の長崎神経医療センター）や役場に運び、私たち学生は、大人たちに搬送先を伝える誘導の役に当たった。

その日、朝から夕方まで、駅構内には被爆者のうめき声

が響く中、救護に当たる大人たちが慌ただしく動き回っていた。私も悲しむ暇などなく、「病院へ運んでください」とひたすら声を張り上げ続けていた。

被爆者は、みな口々に「水が欲しい」とうめいていたが、実際に一人一人に水を飲ませられるような状況ではなかった。

それまで、宮村でも小規模な空襲はあったが死者は出ていなかった。被爆者を見て初めて「戦争ってこがん恐ろしかとやろか」と思い知りながらも、「日本が負けるはずはない」と信じて、誘導に当たった。

疲れのため、家に帰ってもすぐに寝入ってしまう日が続き、「あの人たちはどがんなったとやろ」と不安と悲しさが込み上げてきたのは終戦後だった。

私の願い

子どもが人の命を奪う事件を新聞、テレビで知るたびに悲しくなる。戦時中、満身に食べられない中で、助け合いながら生きていた私たちの世代には考えられ

ないこと。子どもたちは、思いやりの心を持ってほしい。

長崎新聞 平成18年7月6日掲載

走る格好で息絶えた人

川副 政子

空襲警報が解除され、西山二丁目の自宅で昼食の準備をしていた。突然、虹のような光に包まれ、気付いたら隣の部屋に吹き飛ばされていた。

床は抜け、障子の形はなく、窓ガラスは粉々。屋根の一部は吹き飛び、青空が見えた。何が起きたか分からないまま、当時一歳の娘と、お守りをしていた十七歳の妹の無事を確認し、家の前の防空壕（ごう）へ入れた。

午後二時ごろ、市役所の前で被爆し、顔の右半分と腕に大やけどを負った夫が帰宅、私たちの無事を確認すると、勤め先の軍司令部に戻った。夕方、父も訪ねて来た。父は三重町の親せき宅に疎開するように言い、城山町の自宅へ帰って行った。当時四十八歳だった母や二十六歳の姉、七歳と六歳の弟の安否はまだ分からなかった。

「城山町の家は焼けてしまっただけで何も無い」。十日午前十時ごろ迎えに来た父は、落胆したように実家付近の様子を話した。夜は防空壕で明かしたという。私は心配を抑えながら自宅を出発。娘を背負い、父、妹と徒歩で山を越えた。浦上天主堂まで着くと、建物はごう音を立てて炎上。大橋町周辺では、立ったまま焼け死んだ馬や、走る格好で息絶えた男性の死体に目を覆った。焼け付くような日照りで死臭が立ち込める中、負傷者や死体の間を縫うように歩いた。

大橋町から国鉄の線路に出て、長与駅に向かった。駅では自分たちを捜しに来たという親せきと偶然に遭遇。心配されていることが、うれしかった。その時、大きなにぎり飯をもらったが、のどを通らなかった。

滑石から山を越え、三重町の親せき宅へ着いたのは午後七時ごろ。その夜は「母たちが無事でいてほしい」と祈りながら床に就いた。

母、姉、弟二人が死んだのを知ったのは十二日。父と妹らが実家の様子を見に行くと、一カ所に四人の骨が寄り添うようにあったという。空き缶に入れられ、戻ってきた骨

を見て「これが母や姉、弟の姿か」と思うと涙が止まらな
かった。

長崎新聞 平成19年2月1日掲載

燃える町見るしかなく

川口 与作

当時十五歳。稲佐町三丁目の九州配電稲佐変電所で、技師としてボイラーに石炭をくべる作業に従事していた。浦上天主堂そばの本尾町の自宅に家族八人で暮らし、八月九日は、兄の戦死を受けて上五島から来た兄嫁とその子ども、つまり私のいとこもいた。

朝、会社に行くと、爆撃で被害を受けた西浦上の電線の修理に行くように言われ、同僚七、八人と車で向かった。

長崎師範学校そばの芋畑で、上半身裸になり白い長ズボンをはいて「よいしょ。よいしょ」などと声を掛けながら作業していた。青白い光が突然、ピカーッと走った。近くに爆弾が落ちたと思った。慌てて畑に顔をうずめ、耳と目を両手でふさいだ。原爆がさく裂する音は聞いていない。

人の声があったので、体を起こした。けがはなかった。辺

りはほこりが舞い、薄ぼんやりとしていた。「大変」と、われに返った。自宅方面が燃えていたので、本原方面の山手へ向かった。

脇目も振らずに走った。途中、真っ黒い大粒の雨が降り、白いズボンは真っ黒になった。四、五歳の男の子を連れた母親から「助けて」と言われて振り向いた。だが、どうすることもできないし、自分が助かることで精いっぱいだったので、そのまま立ち去った。

西山を越え、本河内の同僚宅を目指した。午後三時前に着いたが、やっぱり家族の安否が気になり、来た道を引き返した。辺りは死体の山。生きている人から七、八回、とろんとした生気のない目で「水を飲ませてくれ」と懇願されたが、「水はないから勘弁して」と言うしかなかった。

本原の高台から、れんが造りの立派な浦上天主堂が崩れていく様子が見えた。天主堂そばに着くと、人が三十人ぐらい集まり、家族の安否を知人らに確認していた。私は天主堂の坂から、長崎の町が一面燃えている様子をやるせない気持ちで見るしかなかった。

一緒に暮らしていた家族たちは兄嫁や子どもも含め、高

尾町の畑の一角にあった小屋にいた父以外帰らぬ人となった。父の元へ弁当を届けに行っていたであろう母は、遺骨さえ見つからなかつた。生き残った父も、地元の上五島に戻った八月十七日、息を引き取った。

私の願い

あんな地獄絵はない。戦争は当然いけないが、核兵器は造ってはならないし、使ってもいけない。戦争や核兵器は絶対に嫌だ。人間として生を受けた以上、みんな仲良くしていかなければならない。

長崎新聞 平成19年6月7日掲載

やせ細る母 看病むなしく

土橋 信子

当時、闇取引の取り締まりに当たる県の経済保安課職員として、勝山国民学校（勝山町）三階にあった部署で事務を担当していた。

職場で上司から、「六日に広島に新型の爆弾が落とされ、閃光（せんこう）を見た人が全員死んだ」という話を聞いた直後に飛行機が上空を通る音がした。部屋の窓から赤や黄のさまざまな色がまざったまばゆい光が入ってきた。

「光を見てしまったので私も死んでしまう」と直観的に考え廊下に駆け出して伏せた途端、激しい爆風が校舎に届いた。吹き飛ばされないよう、懸命に床にしがみついていた。

しばらくたって、恐怖で閉じていた目を開くと、廊下には割れた窓ガラスが散乱。どのようにして外に出たのか覚

えていないが、気が付くと足をくじいていた。

その日は、ほかの職員と立山防空壕（ごう）へ歩いて移動。浦上一帯が火の海になっていると聞き、稲佐町の家にいた家族の安否を心配しながら一夜を明かした。

翌日、私の居場所を聞き付けた母が防空壕へ来て、「家は全壊したが家族は全員無事だ」と教えてくれた。だが、母の元気な姿を見たのはそれが最後に。

その後、家族は足をくじいていた私を残し、父の実家がある西彼時津町へ疎開した。私が家族と合流したのは終戦の十五日。母は原因不明の下痢が続き寝込んでいた。

薬もない中、効果があるのかも分からない薬草を姉と一緒に母に飲ませ、汚れた下着を近くの川で何度も洗った。毎日苦しみやせ細っていく姿を見ながら、もう助からないと分かりながらも、一日でも長く生きてほしいという思いで看病を続けた。

母は一カ月近く苦しみ、九月七日に亡くなった。看病中は母と満足に話すこともできず、看病の忙しさのため泣くにも泣けなかった。母の死を目の当たりにすると涙があふれ、思いつきり泣いた。

私の願い

戦争中は食べ物も着る物も満足になかったが、今は家電製品があり便利な生活を送っている。不便さを知らない若い世代に物を大切にしている気持ちを持ってもらいたい。人の命を奪う事件が続いているが、みんなが自分よりも他者を愛する心を持てば、世の中が平和になると思う

長崎新聞 平成20年7月10日掲載

水求める声 応えられず

網田 久江

当時、東彼杵郡宮村（現在の佐世保市宮地区）にあった宮村国民学校高等科二年生。学徒動員され川棚駅（現在の東彼川棚町）で改札係を担当していた。長崎市から搬送されてきた被爆者の救護に当たった。

八月九日は勤務中に空襲警報が鳴り、近くの防空壕（ごう）へ駆け込んだ。その瞬間、稲妻のような強い光が走り、近距離で爆弾がさく裂したようなごう音。

やがて、黄色、紫、赤と色を変えながら立ち上るきのこ雲が長崎市方面に見えた。同じ壕に入っていた海軍の軍人が「あれは新型爆弾じゃろう」と言った。

その後、駅長が「被災者救援の臨時列車が長崎から来る。今夜は帰れない」と通達。午後九時。最初の列車が到着した。中には焼けただれた人が足の踏み場もないほど横たわ

り、地獄のよう。「お水ちょうだい」と何度も声を掛けられた。

「医者が「助からないと診断した人には、水をやっていい」と指示してくれたものの、負傷者をホームへ降ろす作業に追われ、渡すことができなかった。どうせ息が切れるのなら、飲ませてあげたかった。負傷者は川棚海軍共済病院（現在の長崎神経医療センター）などに運ばれた。やけどで太ももから足首まで肉がめくれている人、ガラスが全身に突き刺さった人などがいた。「怖い」という感情がわいてこなかったのは、戦争中で感覚がまひしていたからだろう。

負傷者の輸送と救護活動は翌日午前五時まで四回にわたった。川棚駅で降ろされたのは、計六十一七十人くらいだったと思う。

学徒動員の前にも宮村国民学校の子どもらで地元で掘った大防空壕、「無窮洞（むきゆうどう）」の土運びなどに従事。勉強らしい勉強はできなかった。戦後、子ども六人には同じ思いをさせたくない、夫と毎日のように漁に出かけ、みんな高校や短大に出した。

私の願い

毎月九日、長崎市の平和公園へ行き「長崎の鐘」を被爆者の仲間と鳴らしている。北朝鮮やインドなどの核開発を聞くたび「核戦争が起きれば世界が全滅するのに、なんで」と思う。子どもや孫のため核のない平和な世界を願い続けたい。

長崎新聞 平成20年10月9日掲載

焼け野原の街にがくぜん

山岡 光子

当時十歳。江の浦村（現在の諫早市飯盛町）に母や姉、弟、妹と一緒に疎開しており、警防団に所属していた父と同居の兄は自宅の長崎市小瀬戸町に残っていた。

あの時。昼から墓参りに行く予定だったので、母たちと少し早めの昼食の準備をしていた。突風が吹いてきて、さすが倒れた。家の外に出てみると、浦上方面の空が真っ赤に染まっている。とても不気味で怖かった。しばらくすると、風に流されて大量の灰とともに「浦上」「大橋」と書かれた紙くずが空からパラパラと落ちてくる。何が起こったのか、さっぱり分からなかった。

「長崎で何かあったのか」。不安が募り、母たちと身を寄せ合った。その日の夜、近所の人が「長崎に爆弾が落ちて大変なことになっている」と教えてくれた。母たちと長

崎に入ろうとしたが、「被害が大きいから入らないほうがいい」と近くにいた人に止められ、仕方なく家に戻った。

十一日、父が疎開先にやってきた。無事が分かり、ほっとした。父は長崎の被害状況を話し始めた。とにかくひどいということだったが、よく覚えていない。被爆直後、浦上に住んでいた父の妹の家族の安否が気掛かりで捜しに行ったが、家族全員亡くなっていたことを打ち明けた。いとは一緒に遊んだこともあったので、とても悲しかった。

十六日、前日の敗戦の報を聞き、長崎に戻ろうと、家族全員で江の浦村を出発した。翌十七日、日見峠を越えて、蛍茶屋から中心部に入った。遺体はすでに収容されたのか、見当たらない。県庁から電車の線路沿いに稲佐橋に向かって歩いていると、ガスタンクから煙が出ている。建物はほとんど倒壊し、一面焼け野原。馬の死体がいくらか転がっている。変わり果てた街並みにがくぜんとした。

家に戻り、近所の友人たちと再会、無事を確認し喜び合った。焼け野原となった街や爆弾への恐怖を話し、怖かった様子を振り返った。

私の願い

戦時中は、食べ物もなくつらかった。核兵器は大切な親類を奪ってしまった。あのようになりたいとは思えない。戦争は二度と起こしてはならないし、核兵器も廃絶すべきだ。

長崎新聞 平成21年2月26日掲載

閃光走り熱風全身に

河辺 総子

「ザザー」「ドカーン」。八月一日。学徒動員先から銭座町の自宅へ帰る途中の出来事だった。敵機の空襲に遭い、近くの防空壕（ごう）に飛び込んだ。壕の中で震えながらじっと敵機が去るのを待った。敵機が通過し、自宅に戻ると家の屋根には三カ所の大穴。翌二日に小学生の弟と二人で時津村（当時）の農家へ疎開することになった。当時十五歳だった。

九日。時津の農家で入手したカボチャやジャガイモなどを母に持っていかうと、朝から弟と二人で長崎へ向かった。道ノ尾駅近くに来たとき、上空に爆音をうならせながら飛行する敵機の姿。急いで道路の側溝に飛び込み身を伏せたその時だった。

ピカッとオレンジ色のまばゆい閃光（せんこう）が走り、

熱風が全身を覆った。そして大きなきこの雲がムクムクと立ち現れ、大きく広がっていく。

「熱い。一体何が起こったのだろう」

自宅に帰りたいと思ったが、爆心地側から歩いてくる血みどろの負傷者は、住吉、大橋方面は火の海でとても通過できないという。仕方なく時津の疎開先へ逆戻りし、一晩中、黒煙と赤く燃え盛る火を眺め、母と十七歳の兄の無事を祈った。

翌十日早朝、警防団の連絡で、母が負傷したものの兄に助けられ、ゆっくり時津へ向かっているということが分かった。「よかった」。ほっとして、神仏に感謝した。

午後九時すぎに、母と兄が到着。母は右目の下や右腕にガラス片で切ったけがで血のりがべっとり。兄も全身を打撲している様子だったが、母ほどひどいけがはなかった。

母と兄は、被爆直後の様子与时津までの道中の光景を語った。爆風で自宅は倒壊。二人とも倒れた家の下敷きになったが、先に兄がはい出て母を引きずり出した。その後、私たちの待つ時津までひたすら歩いた。たくさんの死体、やけどでうめく人、水を求め叫ぶ人……。その光景は、とて

も悲惨でまさに地獄だったという。

私の願い

人が人を殺す戦争は、何が何でも起こしてはならない。戦争が始まると、女性、子どもなど弱い人が一番ひどい目に遭うことは間違いない。特に、戦時中の食料事情は悲惨で、着る物も履く物もなかった。人の心も荒廃する。人間が、核兵器を造るような技術と資金を持つているならば、その技術と資金は平和のために生かすべきだと思う。

長崎新聞 平成21年4月4日掲載

『がまだせ』と励ます

田崎 浩

八月九日、長崎市に原爆が投下されたとき、当時住んでいた佐世保市崎岡町でも爆音と光のようなものを感じた。午後には新型爆弾が長崎市に落とされたことを聞いた。

当時、佐世保市早岐警防団第五分団に所属。翌十日、分団長から「新型爆弾で被災した人たちが早岐駅に来るので救護運搬の応援出動をするように」との命令があった。

正午すぎ、被爆者が乗った汽車が駅に到着。確か五両編成だった。大村駅や川棚駅でも被爆者は下車しており、各車両には十人前後が残っていた。私たちは車内にいた人たちを運び出し、担架や戸板に乗せ、線路伝いに約六百メートル離れた早岐国民学校まで「がまだせ（頑張れ）、がまだせ」と励ましながら運んだ。

被爆者はやけどで水膨れがひどく、手を引っ張ると皮膚

だけがめくれることもあった。服はぼろぼろで、男女の区別がやっとなつくぐらい。ガラスが顔や肩など体のあちこちに刺さったままの人、髪の毛が左右どちらかだけ燃えたようになっている人…。

原爆の放射能のことが知られておらず、被爆した人たちを運搬や看護した私たちも被爆した。

早岐国民学校ではむしろ、わらを校舎の中に敷き、その上に寝せた。軍医や地元の医者のほか、看護師二十人くらいも集められ、治療に当たっていた。やけどに塗るための種油を近くの精油所へ買いに行くように言われ、仲間と一斗缶を買いに行った。

薬や油を塗った後、包帯でぐるぐる巻きになった人たちが「水をくれ」と言っていたが、医者からは「水を与えるのは良くない」と言われていたので、飲ませることができなかった。

校舎の中で息を引き取った人や運搬途中で亡くなった人もいた。陣の内町にあった通称「徳丸墓地」の横にあった火葬場に運ばれていた。

十一日も同校に行き、校舎内で被爆者を移動させるのを

手伝ったりした。

六十年以上たったが、地獄のような光景は忘れられない。

私の願い

投下から六十年以上経過した今でも体の不調による不安におびえ、いつ訪れるか分からない死と直面しているのが被爆者だ。都市を壊滅し、人類を滅亡に導く原爆は廃絶しなくてはならない。オバマ大統領が、唯一の核兵器使用国とし、道義的責任に言及したことは廃絶への大きな前進と思う。

長崎新聞 平成21年4月16日掲載

異臭が唯一の記憶

中村 雪和

当時、小学三年生。八歳だった。自宅は長崎港を望む高台で、現在の長崎市立西坂小辺りにあった。弟、妹らと近所で遊んでいる最中、「空襲」を告げるサイレンが鳴り響いた。瞬間的に弟の手を引っ張り、家の中に転がり込んだ。閃光（せんこう）、爆風、ごう音……。しかし、詳細はよく覚えていない。記憶にあるのは真夏の昼間、一転して真っ暗闇になっていたこと。そして「急いで逃げるよ」と母の声。弟と妹と計四人で一緒に山の上にある防空壕（ごう）に向かって走った。振り返ると、自宅が燃えていた。恐ろしいとか、きついつとか、そういう感覚は皆無だった。「一体、何が起きたのか。さっぱり分かんない」。そういう思いにとらわれていた。

飲まず食わずのまま、防空壕で一夜を明かした。そこは

どんな状況だったのか、どんな気持ちを抱いたのか―ほとんど覚えていない。とにかく気が動転し、冷静ではいられなかったはずだ。

翌十日朝。諫早に住んでいた祖父が自転車を引いて、壕にやって来た。捜し回った揚げ句、ようやくたどり着いたのだろう。祖父はまず、私と弟を連れて諫早に向かった。祖父が引く自転車の荷台に弟が乗り、私は祖父に付いてひたすら歩いた。ルートは覚えていないが、長崎を抜ける道中、家という家はなくなり、がれき状態。たくさんの遺体が道なき道を埋めていた。やはり、怖さは感じなかったように思う。ただ、焼け焦げた遺体が発する異臭だけは、今でも感覚として残っている。唯一の「原爆の記憶」かもしれない。

数日後、母が妹三人を連れ、諫早に来た。原爆投下時、現在の三菱重工長崎造船所で働いていた父を捜し、安否を確認していたという。

「お父さんは十日に亡くなったとよ」。母はそう言った。おやじが死んだ―。そう聞いても、悲しいという感覚が全くわき上がってこなかった。なぜか、涙が出てこなかった。

私の願い

世の中が平和で、穏便であってくれるのが一番いい。核兵器や戦争がないというだけで、平和だとはいえないような気がする。親子のつながりが薄れ、自分さえよければ、という風潮がはびこっている。昨今、家族のきずながしつかりしていることもまた平和の在り方だと思う。

長崎新聞 平成21年5月28日掲載

教室はまるで生き地獄

平田 弘

8月9日は、かんかん照りのいい天気だった。農作業の後、佐世保市重尾町の自宅庭で、所属していた警防団の先輩から頼まれた自転車のパンク修理をしていた。

仕上げた後、先輩が帰り始めると辺りがピカッと光り、何秒かして「ドーン」と音がした。1週間ほど前、川棚町に爆弾が落とされたので「また川棚に落ちたとじゃるか」と先輩と話した。大村の方にきこの雲が見えた。

当時原爆の存在は知らなかった。その後、軍から警防団を通して「敵は新型爆弾を使った。今までのような避難方法ではいけない。小さい防空壕（ごう）ではだめだ」と伝えられた。

10日午後1時ごろ、「早岐国民学校（現・市立早岐小）に行け」と指示があった。長崎から汽車で早岐駅まで運ば

れ、早岐国民学校に収容された負傷者を、2^キほど離れた高台にある佐世保海軍共済病院（現・佐世保共済病院）早岐分院に搬送する仕事を任された。

学校の教室の床には50人ほどがそのまま寝かされていた。かわいそうに、死んだ子どもはほったらかしにされていた。体中にガラス片が刺さった人、傷口からうじ虫がわいた人、服がぼろぼろになった人……。生き地獄だった。軍は「日本は戦争に勝つ」と言っていたが、本当に勝てるんだろうかと感じた。

遠い佐世保まで運ばれているぐらいだから軽傷者ばかりだったはずだが、ほとんど死んでしまった。竹2本に荒縄を編んで作った担架で生存者を運んだ。手袋はなかったから、皮膚が焼けただれた人も直接手で持って乗せた。触ると皮膚がべらつとはがれる人もいた。人間の焼けた嫌なにおいがした。「動かしてくるな」「水をくれ」とうめいていた。水をやれば死ぬと思い、やらなかった。

2人一組で運んだ。担架の後ろにいると負傷者からにおいが流れてくるので、前の人と「おまえが前に行け」と言い合っていた。夕方まで病院間を10往復ぐらいたした。

私の願い

原爆投下を通して、戦争が本当に嫌になった。人々は殺し合いではなく、話し合いを大切にしないといけない。被爆の実相を子の代、孫の代に伝えていくことも大切。オバマ大統領が「核なき世界」の実現を目指しているが、米国は原爆を使った以上、核兵器廃絶も率先して進めてほしい。

長崎新聞 平成21年6月25日掲載

兄と再会 抱き合い涙

木場 七之助

現在の五島市出身で、地元尋常高等小学校を卒業した後、親元を離れて長崎市城山町の寮から浜口町の三菱長崎工業青年学校に通っていた。

当時15歳。授業は週に1回しかなく、学校では銃や剣を磨かされていた。それ以外は、長与の工場などで、魚雷の製造をしていた。

8月9日は、魚雷の中に入り、寝そべって電灯で手元を照らしながら燃料パイプなどを付けていた。ピカッと火花のように光り、ドンと地の底から揺れる音が響いた。爆風がきて、ガラスもカーテンも吹っ飛んだ。体を守る余裕はなく、生き埋め状態になった。近くに爆弾が落ちたと思った。

けがはなかった。工場の仲間と長崎市大橋町（当時）の

三菱長崎兵器製作所大橋工場へ向かった。戸板でけがをした人を線路まで運んだ。助け出した人を触ると、皮膚がベロンとはげ、爆風で服が飛んでいる人もいた。やけどを負い、田んぼでパチャパチャと水を浴びている人もいた。日が暮れるまで、「自分も死ぬかもしれない」と思いながらも、ずっと運んだ。大橋工場の敷地内で死んだ人の脇で寝た。疲れ果てていたし、場所を気にする余裕はなかった。

10日は昼すぎまで戸板で人を運び、2番目の兄を捜した。茂里町の三菱長崎製鋼所に向かった。

建物も木も倒れてしまい、道路はがれきでいっぱい。目が飛び出した状態で亡くなった人がいた。川に浮いた死体を見た。黒焦げの馬が倒れ、腹はパンパンだった。場所は定かでないが兄と再会し、「生きていたか」と抱き合って涙した。長男が暮らす竹の久保町で、戸板を集めて屋根を作り、2人で寝た。11日朝、長男と再会した。竹の久保町に住む親せき3人は亡くなっており、茶毘（だび）に付した。その後は大波止の旅館にしばらく滞在した。兄弟3人や親せきと、郷里の五島へ貨物船で荷物に交じって帰った。

私の願い

私は幸運にも助かったが、たった1発の原爆で、同級生や職場の仲間など、たくさんの方が死んでしまった。直接的なけがだけでなく、心臓や肝臓が悪くなるなど、今なお原爆症も引き起こしている。恐ろしく思う。戦争や原爆は二度とごめんだということは、被爆者の共通の思いである。

長崎新聞 平成21年11月26日掲載

今も体内にガラス片

岡山 クマ

大橋工場へ挺身（ていしん）隊員を出すよう平戸の田助国民学校に要請が来ていた。高等科2年の私は志願。一人っ子で家の跡取りだった。担任は思いとどまるよう言ったが、ためらいはなかった。

長崎市住吉の神社近くの寮に住み、工場で魚雷部品の仕上げを担当。8月9日も朝に寮を出た。着いて間もなく警戒警報が鳴り、寮近くのトンネルに避難。警報解除になり、工場へ駆け足で戻り作業をしていた。

突然、ピカッと光った。爆風で飛んできたガラス片が右ひじから背中突き刺さっていたのを後で知るが、そのときは痛みも、どう逃げたのかも覚えていない。気が付くと道端に倒れていた。誰かが葉の付いた木の枝を体にかけてくれた。

振り向くと、大橋工場の柱の鉄骨があめのようにグニャッと曲がっていた。沈みかけた太陽は卵の黄身のように、手を伸ばして触ると落ちてきそうだった。

工場の憲兵に、暗い道を寮まで連れて行ってもらった。師範学校校門のそばを通りかかると負傷者でいっぱい。「助けて、助けて」の聲が耳に残っている。寮も大勢の負傷者。外の広場にも寝かされていた。

その夜、救援列車が寮の前の方に止まった。朝鮮の人に背負われて汽車まで行き、タラップを懸命に登り車内へ。通路に座り込んで寝てしまった。途中で降りる体力はなく、終点の佐世保市の早岐駅まで。救護所になっていた早岐国民学校へ運んでもらった。3日ほど昏睡（こんすい）状態が続いたという。

同じ年ごろの男の子のえぐれたおなかから、大きなうじが入りしていた。「お父さん、お父さん」と助けを求めている姿が忘れられない。18日に平戸へ帰郷。母は安否をよほど心配したらしく、やつれはて、45歳だったのに80歳ほどのおばあさんに見えた。

体の傷は520個もあった。傷あとが気になり暑くても

半袖を着たことはない。右腕と背中には今も摘出できないガラス片各2個が残ったまま。

私の願い

戦争は二度としてはいけない。原爆は造っても、持つてもだめだ。原爆に遭ったら本人だけでなく、家族まで影響を心配しないといけない。核兵器は世界からなくさないといけない。恐ろしさを伝えていかねば。平和な暮らしが続くことを願っている。

長崎新聞 平成22年3月4日掲載

元軍医の父を手伝う

羽田 恵美

3人の兄は中国やフィリピンに出征していて、両親と長兄の妻、次兄の妻、幼いめい、それに23歳の私の6人暮らし。生活は貧しく、コメの代わりに大豆を食べていた。配給だけでは足りず、家の周りでサツマイモを育てていた。ぜいたくとは程遠い暮らしぶり。「戦争に協力するほかない」。そんな思いを抱きながら生きていた。

私は三菱長崎兵器製作所住吉トンネル工場（住吉町）で魚雷の部品を磨く仕事をしていた。8月9日は夜勤明けで、朝から自宅で寝ていた。

突然、ガラガラと耳をつんざく雷鳴のようなごう音がした。爆風で家具や建具が倒れ、縁側の窓ガラスは粉みじん。畳は吹き上がり、木造平屋の屋根に穴が開いた。庭に出ていた父は吹き飛ばされたが無事で、木陰で草むしりをして

いた母も無事だった。庭で遊んでいたために爆風からかばった長兄の妻は首の後ろにガラスが刺さった。

父は元軍医だった。それをうわさで聞いた負傷者が助けを求めて次々とやって来た。「とにかく助けよう」。天職だったのだろう。父はしまっていた医療器具を取り出した。臨時の救護活動が始まった。

父はけがの治療に当たり、私たちはそれを手伝った。母は裏で器具や包帯を煮沸消毒した。包帯といっても浴衣の古布。患者は赤や青の柄の「包帯」を着けていた。消毒液など薬品が十分にそろっておらず、傷口に油を塗った。麻酔薬もなく、患者は激痛で泣き叫んだ。

やけどの独特のにおいや、化膿（かのう）した傷のただれたにおい。例えようのないにおいが辺りに立ち込めていた。患者の火膨れした皮膚の中でうじ虫がはっていた。ひどいものだった。

戸板に乗せられ、人に付き添われ、次々とやって来る患者。力尽きて亡くなる人もたくさんいた。遺体は警防団の人たちが運んでいった。私は父を加勢するだけ。ほかのことを考える余裕などなかった。戦争が終わるまで続いた光

景だった。

私の願い

原爆でたくさんの方が命が失われた。あの惨状は二度と経験したくないし、二度とあつてはならない。しかし、世界には多くの核兵器が存在する。核兵器をなくしてほしい。今の世の中は平穏でぜいたく過ぎるほど豊かになった。将来を担う子どもたちはとにかく平和に暮らしてほしい。

長崎新聞 平成22年4月15日掲載

海に飛ばされ命拾い

神田 源隆

当時16歳。平戸の中野国民学校を卒業後、福岡の海員養成所を経て日本郵船神戸支店の船員になっていた。兵員輸送用に建造されていた「鶴岡丸」受け取りのため、しばらく長崎市万屋町の旅館に滞在していた。あの日は暑い朝だった。建造先の三菱重工長崎造船所に向かうため、元船町の浮棧橋まで歩いてきていた。

棧橋近くには同僚3人のほか、知り合いの荷揚げ作業員がいたのを覚えている。私は半袖に長ズボン、作業員は上半身裸で仕事をしていた。

迎えの船を待とうと、棧橋に腰掛けた時だった。赤黒い閃光（せんこう）が走り、浦上方面が真っ黒に煙っているのが目に入った。驚いて5、6歩走ったところで爆風に見舞われ、海に飛ばされた。

数十秒は海中にいただろうか。必死に棧橋まで泳ぎ戻したが、同僚や作業員の姿は消えていた。身に着けていた腕時計の針は、（原爆投下時刻から1分後の）11時3分を指して止まっていた。浦上方面に向いていた右腕や顔は大やけどを負った。海中にいたため、熱風を吸い込まなかったのが命拾いにつながったと思っている。

旅館に戻る途中、立ち寄った防空壕（ごう）の中で、作業員を見つけた。腰から上が焼けただけ、うめき声を上げて転げまわっていた。旅館は屋根が飛ばされたため、5日間ほど風頭山の墓地で過ごし、担架で救護所になっていた長崎高商（現在の長崎大経済学部）の講堂に運ばれた。むしろを敷いた講堂には負傷者が並べられ、次々と息を引き取った。講堂にいた40日間で隣の7人が死亡。窓の外には、火葬される煙が幾筋も見えた。

平戸の実家に戻ると、焼け焦げた顔に最初は家族も戸惑ったが、名前を告げると泣いて喜んでくれた。今も夏になるたび、ケロイドになった腕がうずくが、生きていてよかったと実感している。

私の願い

絶対に戦争を起こしてはいけない。外交や宗教の力で、争いが起きないように解決するべきだ。しかし、現在の日本も多くの自殺者や交通事故死亡者がおり、決して平和とは言えないだろう。「人を殺してはいけない」「授かった命を大切にする」という道徳教育を全国で押し進めてほしい。

長崎新聞 平成22年6月17日掲載

ぶくぶくと動く死体

西田 ソウ

65年たった今でも、あの日の光景を夢で見ることがある。思い返すだけで涙が止まらない。

18歳だった私は三重町の実家を離れ、二つ年上の姉夫婦と松山町に住んでいた。義兄は川南工業深堀造船所の従業員。姉と私はその食堂で所員の食事を作るのが仕事だった。8月に入り、妊娠中の姉が胸膜炎を患って今町（現在の興善町）の産婦人科病院に入院。私も休みを取り、病院に寝泊まりしていた。

その日は姉の退院予定日だった。前日に島原から来た義兄の妹と、布団を干しに朝から松山町の自宅に戻っていたが、空にB29を発見。急いで病院に戻った。病室でジャガイモを炊こうとしちりんの火をおこしていると、突然目の前に光が走り、「バーン」とものすごい爆音が聞こえた。

「地下の防空壕（ごう）へ」。医師や看護師が叫んだ。頭上に落ちてくる木やがれきを避けながら急いで逃げた。裸足で階段を一気に飛び降りたので、床に散乱していたガラスが足裏に無数に突き刺さった。窓の外を見ると、県庁がごうごうと燃えていた。

しばらくして、造船所にいた義兄が病院に迎えに来た。職場近くの防空壕に避難するため、港まで移動。真っ黒に焦げ腹だけがぶくぶくと動く死体が何十体も転がっていて、その上を何度も跳び越えた。途中、焼けただれた体で「おいっちに、おいっちに」と号令を掛けて進む3人の兵隊の姿も見た。その痛々しさと地獄のような現実には涙を流しながらひた走った。その間も飛行機はやってきて、空から油をまいているようだった。

数日後、三重町の実家へ戻ると玄関から父がつほを背負って出てきた。「ととー」。飛び付く私に父は言った。「生きとったとか」。私たちが死んだと思い、松山町に骨を拾いに行くと場所だったらしい。私も姉もわんわん泣いた。

私の願い

あの時見たほろほろの兵隊や、松山町の近所の人たちはどうなっただろうと、夢に見るたび思い出しつらくなる。もう二度とあんな光景を見たくないし、子ども、孫の世代に絶対に見せたくない。たくさんの命を奪い、人々を苦しめた核兵器をなくし、戦争のない平和な世の中になってほしい。

長崎新聞 平成22年8月13日掲載

うじ虫をはしで取る

川内 フミ

当時は、東彼杵郡宮村（現佐世保市南風崎町）に家族9人で暮らし、農業に励む毎日。20歳だった。上空でチョウのように見えるアメリカ軍の飛行機を目にするたび、恐怖が募っていたのを覚えている。

あの日は、庭にある柿の木の下で友達と楽しくしゃべっていた。「ピカッ」。被爆地から遠く離れた地でも確かに強い光を感じた。慌てて友達と家の中に逃げた。悪夢のような体験の始まりだった。

新型爆弾が長崎に落とされた、と大人たちに聞いたのは翌日。「被爆者の手当てをしてくれ」。地元の青年団員だった私は、自宅近くの病院で10〜20日にかけて5日間、長崎から救援列車で運ばれてきた被爆者の救護に当たった。

ボロボロの服、紫色に焼けただれた肌、年齢や性別さえ

も分からない人もいた。大きな病院だったがベッドは足りず、畳の上いっぱい被爆者は寝かせられていた。日がたつにつれ、被爆者の傷口にはうじ虫がわいていた。首、腕、背中、足：体のいたるところにだ。うじ虫をはしで取ってはひたすら容器に入れた。

「水がほしい、水がほしい」と苦しむ被爆者。言われていたのは、「安心して死んでしまうから水はあげてはならない」。本当にかわいそうで、つらくて仕方がなかった。あのまま亡くなってしまふのだったら、最後に水をあげたかった。

自宅の上の山には火葬場があった。地元消防団が、亡くなった被爆者を運んで火葬した。山中から不気味に上がる煙を自宅から見て、今日も誰かが亡くなったんだ、と毎日思っていた。

私の二つ年上で、同じ病院で救護に当たった医者は若くして亡くなった。原因はがんと聞いた。当時は放射能の影響など知る由もなく、一心に被爆者を助けようとしたのだ。救護活動とは関係なかったのか。今も頭から離れない。

私の願い

原爆の惨劇は忘れることはできない。戦争は絶対にあつてはならないもの。二度と経験したくないし、誰にも経験させたくない。待っているのは悲しみだけ。一日も早く核兵器のない世界になることを願っている。未来を担うのは子どもたち。どうか、優しい心を持って立派に育ってもらいたい。

長崎新聞 平成22年11月18日掲載

弟の骨割り「ごめんね」

山口 榮子

長崎市築町の貯金局の事務所で帳面をめくって仕事をしていたと突然、辺りが明るくなり、爆風で窓ガラスが割れた。事務所は大騒ぎになり、机の下に隠れたが、高い所へ逃げなければと思い、同僚の年下の女性と上小島の高台へ向かった。しばらく何が起きたのか分からず、持ってきた弁当を食べながら、遠くで燃え上がる県庁をぼうぜんと見つめていた。

駒場町（現松山町）の自宅が気になったので、同じ方向に住んでいたこの女性と一緒に向かった。長崎駅を過ぎると地面が焼けて熱かったので、目に留まった防火水槽の水をかぶって進んだ。周囲はがれきの山と炎。下大橋周辺の浦上川にはたくさん死体があり、皮がはげ筋肉がむきだし馬の足はピンと硬直させたまま死んでいた。路面電車

の線路はあめのようにくにやりと曲がり、骨組みみだけになった電車内には黒焦げの死体が10体ほどあった。途中で女性と別れたが、その後どうなったかは知らない。

実家はすべて焼けていた。台所と横の部屋に1体ずつ骨があり、母と祖母だと分かった。あまりの光景に言葉を失った。

当時19歳。その日の朝、なぜか「行くな」と泣きついた7歳の弟と病気の17歳の弟がいたが、2人とも死亡した。上の弟の頭蓋骨を骨つぼに入れるために割ったが、その後3日間、弟が夢に出てきた。「骨を割ってごめんね」と思った。

午後6時ごろ、油木の防空壕（ごう）に行くと、叔父らしき人がいたので「おじさーん」と叫んだら、「おーい」と返ってきて、うれしかった。ただ、壕も地獄だった。脇腹の傷口から腸が出てくるのを手で押さえている人、腕の皮がはがれ爪の付け根から垂れ下がっている黒焦げの人。壕にはたくさんの死体もあり、材木を組んだ小屋で寝泊まりした。そばで死体が焼かれていたが、雨が降ると、骨に含まれるリンが反応し、火の玉のように青い炎がついた

り消えたりしていた。

私の願い

当時のことはつらくて思い出したくないが、後世に伝えなければと思い、話すことにした。家族全員と罪もない人々の命を奪った原爆、戦争は本当に嫌だ。戦争を二度と起こさないためには、外国と仲良くしなければならぬ。そして、隣近所の人と仲良くすることがその第一歩になるのではないか。

長崎新聞 平成23年3月31日掲載

最期まで妻捜す男性

中島 タエ

当時25歳で、5歳の娘を育てながら農業を営んでいた。

8月9日朝、自宅の庭にいと、辺りが強くピカッと光り、ドカーンという爆発音が聞こえたので、急いで近くの防空壕(ごう)に逃げ込んだ。「川棚に爆弾が落ちたのだろう」と思ったが、長崎での原爆だと後で知った。

長崎市から南風崎駅に搬送された被爆者は、駅から200メートルほどの福田医院で救護された。10日以降、私たち婦人会のメンバーも駆り出された。浴衣などを包帯代わりにして手当てされた人たちが廊下いっぱい寝かされ、何とも言えない臭いが漂い、うめき声が響いていた。

被爆者の腕や足に刺さったガラス片を医者が取り除く際に、腕などを握って押さえる手伝いをした。内部まで焼けていたのか、メスで少し刺せば簡単に破片が出てきて、皮

膚がだらりとはがれた。どれも生まれて初めての光景や感覚で、気分が悪くてご飯が食べられなかった。

救護を受ける高齢男性に「私の妻はどこにいるんだろう」と尋ねられ「どこかよその病院にいるんでしょう」と答えたが、翌日に男性は亡くなった。自身も瀕死(ひんし)の状態なのに、最期まで奥さんの心配をしながら再会できず亡くなった男性がかわいそうで、今でもたびたび思い出す。救護のかわいもなく毎日何人も人が亡くなり、消防団員が近くの高台へ運び火葬していた。

義兄の家族が長与町に住み、義兄とその長男、次男は長崎市茂里町の製鋼所に勤めていた。「義兄と長男は亡くなり次男が危篤」との知らせを受け義母と義姉と3人で長与に向かったが、到着する直前に息絶えたという。当時の混乱で義兄と長男の遺品はなかった。義兄の妻らと浜辺で次男を火葬し、佐世保に戻った。帰りの列車は搬送される被爆者でいっぱい、ここでの臭いも強烈だった。

私の願い

戦争の苦難は遭った人にしか分からない。一瞬で街を焼け野原にして後に何も残さず、多くの命を奪ってしまう原爆も恐ろしい。命が助かっても一生苦しめられる。核兵器は造ってはいけない。子どもたちの生きる時代がどうなるか不安でならないので、平和な世の中になってほしい。

長崎新聞 平成23年6月30日掲載

水望む声 応えられず

中浦 努

1945年は旧国鉄職員になって3年目の16歳。春に吹田市にある大阪鉄道教習所（電気科）を修了し、佐世保市の早岐駅にある電気関係の補修をする長崎電力区早岐分区に勤めていた。電力不足による停電が頻繁に起き、さらに夜間は、空襲警報などに対応する照明電気の減圧切り替え作業などがあって、一瞬も油断できない勤務が続いていた。8月9日は徹夜明けの非番で、川棚の自宅裏の山で地域の人たちと軍需物資となる松ヤニを採取していた。その時、大村湾を隔てた長崎の岩屋山の付近に光を見た仲間がいて「ありゃ新型爆弾ばい」と言っていた。警防団員をしていた父はその日の夕方に呼び出され、翌朝帰ってくると「昨晩は戦災者の救護で大変だった」と話していた。

10日は、川棚から早岐まで列車で出勤したが、社内は通

路もデッキも負傷者で埋まっていた。「水」「助けて」などとせがまれたが何できず、早岐駅では逃げるようにして列車を降りた。

11日は徹夜勤務明けだったが、そのまま同僚3人と長崎の鉄道設備復旧の応援に出向いた。列車は道ノ尾駅までしか行かなかった。降りたホームの脇にひつぎが置いてあり「故陸軍伍長―」と書いた札が張ってあった。

道ノ尾駅から一面焼け野原の中を線路伝いに長崎駅まで歩いた。途中、浦上川の傍らには腹を風船のように膨らませた馬車馬が死んでいた。また、浦上駅近くの路線端にあった菰（こも）を上げてみると女性の死体が横たわっていた。

長崎駅に着くと、まず竹の久保に行つて、鉄道官舎や防空壕（ごう）の中から職員家族の死体を取り出し、駅構内の空き地に古い枕木を積んで造った仮の火葬場まで戸板で運んだ。その際「こりゃ、もう世も末ばい」と言った同僚の言葉は、今でも忘れられない。

私の願い

同僚の言葉は「今世の終わりだ」を意味したのでらう。一面焼け野原で、被爆地は何年かは草木も生えないと言われていたので当然であろう。絶対に原爆だけは造ってはならない。本当に地球が人が住めるところではなくなるような気がしている。被爆者も少なくなる現在、声を大にして叫びたい。

長崎新聞 平成23年7月28日掲載

飲めば死ぬ でもよか

井村 泰

長崎方向の空に落下傘のようなものが見えた。途端、雷のような音が響き、山の向こうに火と煙が立ち上がった。

諫早市の県立農学校（現・県立諫早農高）2年生で16歳。同市で寄宿舎暮らしだった。実家は島原半島の北有馬町の農家。諫早市小野の農場で約50人の同級生と一緒に教師の講話を聞いていた時、午前11時2分を迎えた。皆、立ち尽くした。

翌日、長崎市からの通学生に聞いた。「新型爆弾が落ちたらしい」。稲佐には、かわいがってくれていた大叔母がいる。心配になった。数日後、行方を捜すため長崎へ。道ノ尾駅で汽車を降り、歩いた。町は焼け野原。道端や川岸には焼けたただれた数々の遺体。無我夢中で進んだ。「これ

では見つけ出せない」。怖さより薄気味悪さを感じ、浦上付近で引き返した。

数日後、実家に一時帰宅すると大叔母がいた。長崎で崩れた家の下敷きになって重傷を負い、はい出していったん防空壕（ごう）に逃げ込み、古里を屈指したという。内臓の一部が体外に出ているひどい状態。痛ましかった。この大叔母は数カ月後に亡くなった。

8月19日、救護に当たることになった。旧制諫早中の講堂に運び込まれた多数の負傷者の中から、やけどで顔がはれ、服が焼けた男性を諫早駅近くの海軍病院に担架で搬送。途中、男性は幾度もせがんだ。「水ば飲ませろ」。飲ませてはいけないと命令が下されていた。「飲めば死ぬ」「それでもよかけん飲ませて」。懇願されたが、最後まで断った。飲ませた同級生もいたようだが、そうするとすぐに息切れたらしい。

卒後、実家で農業を継いだが、40代のころまで風邪をひくと歩けないほど体調を崩すことが幾度もあった。その後、被爆者健康手帳を申請。入市被爆の証人が見つからず8月19日の救護活動を理由に手帳交付を受けた。

今でも思うことがある。海軍病院に運んだあの男性は助かったか分からない。せめて水を飲ませてあげればよかっただろうか。

私の願い

無差別に、何の罪のない人たちを殺す原爆を使うことは人道上許されない。いつか人類が人類を滅亡させてしまう。原爆は絶対反対。廃絶すべきだ。実現は難しくても、世界人類が平和に暮らす時代を求めているかねば。二度と戦争をしたらいけない。戦争をすれば、お互いが惨めになる。

長崎新聞 平成23年11月17日掲載

人の優しさ身に染みた

武末 昭夫

目が覚めたとき、がれきの中にいた。体を動かそうとしても腰に激痛が走り、抜け出せない。左腕にやけども負っていた。このまま死ぬのかと思い始めたころ、遠くから私を呼ぶ声が聞こえた。「たけすえー！ たけすえー！」

対馬で生まれ育ち、17歳で長崎に召集され、茂里町の三菱長崎製鋼所で働くようになった。当時20歳。あの日は溶接作業をしていたが、原爆がさく裂した瞬間の記憶は抜け落ちていく。ただ、爆風で工場の端から端へ何十メートルも吹き飛ばされたことだけは覚えている。

呼ぶ声は、技術指導の先生と先輩だった。がれきを取り払い、引っ張り出してくれた。近くに倒れかけた鉄骨があり、間一髪の状況。工場の屋根は吹き飛び、煙突だけが不気味にそびえていた。

工場敷地の外へ出ると、全身にやけどを負い、男か女か判別できない人たちが血や泥にまみれながら浦上川の方へ這(は)っていた。私は2人の肩を借り、近くの防空壕(ごう)を屈指した。

防空壕は負傷者でごった返していた。仕方なく先生の実家がある西山地区へ移動し、そこで一夜を過ごした。翌日、車で大村の病院へ連れて行ってもらい治療を受けた。ずっと素足だったので、看護婦からもらったスリッパがあった。たかった。

数日後、対馬へ帰ると決めた。お金はなかったが、何も考えず長崎駅から福岡行き汽車に飛び乗った。博多駅からは歩いて港へ向かった。船乗り場の事務所で事情を説明すると対馬へ渡る船に無料で乗せてもらえることになり、船内で食事もごちそうになった。人の優しさが身に染み込んだ。船の上から古里の懐かしい山並みが見えた時、涙がぼろぼろとこぼれた。

終戦後、島内に点在する砲台の解体を手伝ってほしいと本土の製鉄所から頼まれた。難しい作業と聞いていたが、三菱の製鋼所で働いた私にとっては簡単だった。武器を造

り出すために学んだ技術が、壊す仕事に役立つようになり、複雑な思いもした。

私の願い

あんな思いは二度と経験したくないし、誰にもさせたくない。生き残った被爆者は健康への不安を抱え続けている。核のない平和な世界をつくるためには原発もいらない。放射能で汚された自然は簡単に元に戻らない。未来を担う子どもたちのため、大人たちが考えを改めることが大切ではないか。

長崎新聞 平成24年1月5日掲載

神学校裏に同級生埋葬

中田 喜藏

故郷の上五島を離れ、大浦天主堂（南山手町）隣の神学校宿舎で暮らしながら、旧制東陵中に通っていた。

当時16歳。8月9日、神学校の校庭で友人と話をしている時、被爆した。爆風で倒れたが、けがは軽く、手を切った程度。いったん防空壕（ごう）に避難した後、神学校に戻った。

昼すぎ、真っ黒にやけどした全裸の2人が神学校に来た。「火の中をくぐり抜けてきた」。語る声で、ようやく同級生だと分かった。別の同級生2人も全身にやけどを負って戻ってきたが看病らしいことは何もできなかった。4人はその日のうちに亡くなった。

10日朝、神学校裏の畑に穴を掘り、4人を埋葬。その後、東陵中の教頭が「妻子が家の下敷きになっている」と助け

を求めてきた。神学校で暮らす長男を頼ってきたのだろう。だがその長男こそ、先ほど埋葬した4人のうちの1人だった。

上級生らと大橋町の教頭宅へ。どの道を通ったか覚えていないが、夕方ごろ到着。すぐにながれきの撤去作業に当たったが、何も道具がなく作業は難航した。

やっとの思いでがれきを取り除くと、既に息絶えた母子の姿。教頭の妻は、幼子2人をかばうように、しっかりと抱きしめていた。

がれきから搬出しようと妻の手を引っ張ると、皮がぬるつとむけた。教頭は厳しい人だったが、その時はただ、疲れ切った表情を浮かべるだけだった。

やがて県庁に勤めていた教頭の長女が戻ってきた。長女はしばらくぼうぜんと立ち尽くし、3人の遺体を抱いた。そして流れる涙で布きれをぬらし、遺体をそっとふいていた。

11日以降も上級生に連れられ、行方不明者を捜して回った。誰を捜していたのか、記憶は定かではない。街は死体であふれ、死臭が漂っていた。その悲惨な光景だけは、い

まも記憶にこびり付いている。

私の願い

ローマ法王ヨハネ・パウロ2世の「戦争は人間のしわざです」という言葉を胸に刻んでいる。皆が許し合える人になればと思う。被爆者の高齢化が進み、体験を語れる人が少なくなっている。私も年々記憶が薄れ、うまく言葉が出なくなっているが、機会があれば若い世代に語り継ぎたい。

長崎新聞 平成24年3月1日掲載

差別が嫌で黙っていた

内野 チヨノ

「早く防空壕（ごう）に行け。（後で自分も行くから、それまでは危ないので）家に帰ってくるな」。空襲警報が鳴り響いたあの日の朝、近くの工場へ出勤する母が叫んだ。12歳だった私は1歳の妹を急いでおんぶし、小学4年生の妹、4歳の弟と駒場町（今の松山町）の家から数百メートル離れた防空壕へ走った。徴兵された父に代わって一家を支えていた母との、それが今生の別れになった。

「ブーン」。不気味な飛行機音に気付いたのは、空襲警報が解除され、ぐずる末の妹を防空壕の外であやしている時だった。『危ない』。とつさに妹をおなかの下に隠すようにして地面に伏せた。直後、強烈な爆風に吹き飛ばされ、気を失った。われに返ると、背中がひどく痛い。やけどだったが、何が起きたのか分からないショックで、自分

のけがに構っている余裕などなかった。

防空壕には、全身が焼けただれ、皮膚が垂れ下がった人たちが次々に避難してきて、身動きも取れない状態。おかげの配給に来てくれた兵隊さんは、酔っぱらいのようにならついていた。外には無数の黒焦げの遺体。きょうだい4人も何とか無事なのが不思議だった。母の言いつけを守らずに家に帰っていたら、命はなかっただろう。

11日朝、4人で旧西彼三和町にあった父の実家に歩いて向かった。爆風で靴をなくしたのではだし。地面が熱かった。夕方、たどり着いた私たちを喜ぶ祖父母を前にして、肩の力が抜けたようにわんわん泣いた。

父も長兄も復員したが、ただ1人、母だけが帰ってこなかった。母の同僚という人と、父の弟に当たる叔父がそれぞれ、職場で母らしき黒焦げの遺体を見つけたと言って、茶毘（だび）に付して遺骨を持ってきた。だから実家の墓には、母とされる遺骨が2人分、眠っている。

戦後、被爆者は嫁のもらい手がないと言われ、差別が嫌で黙っていた。被爆者健康手帳を取ったのは被爆から20年以上たった1968年だった。

私の願い

戦時中は母の代わりに、私が幼いきょうだいの面倒を見なければならず、学校に行けなかった。学がないので、戦後は仕事を探すのにも苦勞した。今は心臓などを思う。病気をすると原爆のせいではないか、という不安をずっと抱えながら生きてきた戦後だった。戦争は、もう嫌です。

長崎新聞 平成24年3月15日掲載

焼け野原でレール修復

石井 民治

1カ月ほど前まで暮らしていた浦上が一面の焼け野原に変わっていた。国鉄の青年寮、にぎわっていた商店街――全てが跡形もなくなっていた。

1945年、国鉄の線路工事となって2年目の17歳。配属は田平村（現平戸市田平町）の平戸口駅だったが、レール敷設を学ぶため7月ごろまでの約半年間、浦上にあった青年寮で暮らした。そして、田平村に戻った。

8月9日は、平戸口駅近くで作業していた。夕方、工手長から「新型爆弾が長崎に落ちた。不通になっている道ノ尾―浦上駅間の復旧に向かうように」と通達を受けた。

翌日、朝一番の列車でたち、諫早駅で長崎方面から走ってきた列車とすれ違った。その車内には男女の見分けもつかないほどやけどした人たち。「爆弾でけがしたとやろう

か」。同僚とささやき合った。その日は道ノ尾駅に泊まり、11日早朝に徒歩で出発。たどり着いた浦上駅は全壊し、線路上に幼子がつぶせて亡くなっているのが見えた。最初は遺体を見るたびに恐ろしさを感じたが、やがて感覚がまひした。焼け野原の中でレールだけは割と真つすぐ延びているのが不思議だった。

浦上川をまたぐ鉄橋のレール修復を担当。空襲の見張りをしている、浦上川に大勢の人が水を飲みに来ているのが見えた。辺りには異臭が漂い、岸には黒焦げになった遺体が山のように積み上げられていた。昼食に白米のにぎり飯2個を支給されたが、さすがに食べる気になれなかった。

浦上での復旧工事は3、4日で終わり、田平に戻った。「目が真っ赤になっている」と地元と同僚から言われ、寝不足だったことに気付いた。工事中にいつ眠り、何を食べて働いていたのか。無我夢中だったこと以外、よく思い出せない。

玉音放送を聞いた15日は「ようやく終わった」と、ほっとした気持ちだった。

私の願い

陸軍に徴集された兄は1945年、インドネシア沖で戦死した。兄が存命だったら翌年、国鉄を辞めて実家の農業を継ぐこともなかっただろう。退職したため、直接被爆でなくても被爆者健康手帳を受けられることを80年まで知らなかった。人生を狂わせた戦争が二度と繰り返されないことを願う。

長崎新聞 平成24年3月29日掲載

無言で立ち尽くす少女

酒井 武

当時17歳。徴用先の長崎市の三菱長崎兵器製作所大橋工場で、戦艦を機雷から守る防雷具を作っていた。

8月9日。昼食のため同僚たちと工場裏の畑のナスビをいくつか収穫。工場に戻り、焼いて食べようと溶接器具の火を付けた瞬間、気を失った。

意識が戻り、15メートルほど吹き飛ばされたことを知った。ガラス戸の破片が飛び散り、頭から血が流れていた。脇腹にガラス片が刺さっていた。なぜか誰もいない。何が起きたのか、分からなかった。シャツを包帯代わりに頭に巻き、外へ出ると焼け野原。逃げ惑う人たちが右往左往していた。道ノ尾駅に向かった。途中、幅2メートルほどの小川の岸を歩いていると、同年代の少女が川を向いて無言で立ち尽くしていた。髪の毛や眉毛は焼け、服も着ていない。やけどで

剥がれた上半身の皮膚が揺れていた。少女の視線の先には、川の向こう側の土手を下りきて水を飲む人たちの姿。少女は少しでも動くとい体に痛みが走るからなのか、微動だにせず、水を飲む人たちをただ恨めしそうに見つめていた。

川では、多くの人が力尽きて死んでいた。折り重なった死体を踏み台にして土手を上がっていく人たちもいた。みんな自らの命を守ることで精いっぱいだったが、その光景は地獄のようだった。

夕方、近くに止まった列車に乗った。車内は人が人ばかり。通路にも太ももがえぐれた男性が横たわっていた。諫早で乗り換え、翌朝、島原半島の加津佐の実家に戻ると、近所の人々が次々に被害の様子を聞きに来た。一人が「新型爆弾らしい」と教えてくれた。9日朝に大橋工場で見た新聞で、広島に新型爆弾が投下されたことは知っていたが、長崎も同じ目に遭うとは思いつかなかった。

終戦から十数年は、鼻血が頻繁に出た。白血球の値も低く、原因は不明のまま、不安な日々を生きた。

私の願い

現在の領土問題が原因となり、再び戦争が起きてしまわないか心配だ。もし起きれば、私たちが経験した原爆よりもはるかに大きな威力の核兵器が使われてしまうだろう。子や孫のためにも、平和的に問題を解決させて、二度と戦争を起こしてはならない。そして、核兵器をなくしてほしい。

長崎新聞 平成25年1月10日掲載

夜更けても空明るく

岩間 涼

白いシャツがたなびく軒先。洗濯を終え、2階の部屋でのんびりしていた。外から聞こえる飛行機の爆音。「まずい」。慌てて窓から顔を出し、干していたシャツを握りしめた。シャツが揺れて目立つのを避けるためだ。上空にキラキラ光る何かが見える。バーンと音がしたかと思うと、爆風で吹き飛ばされ、畳の上にたたきつけられた。

上五島の国民学校高等科を卒業後に島を離れ、長崎市鮑の浦町で寮生活を送りながら、養成工として三菱長崎造船所の製缶工場（同町）で働いていた。当時17歳。あの日は寮の当直だったため工場には行かず、寮の自室で過ごしていた。

爆風に飛ばされた後、一目散に近くの防空壕（ごう）へ。けがはなかったが座ったまま、ただ時間が過ぎるのをじっ

と待った。

夕方になり、どんな立場の人か忘れたが寮生から「ハタダ先生」と呼ばれる男性から避難の指示があった。仲間と寮から徒歩5分ほどの山あいの細道に移動した。

すると、米軍機が細道の上を低空飛行してきた。機銃を出しているわけでもなく、焼夷（しょうい）弾を落とすわけでもない。偵察のためだろうか。「よくここに避難していたことが分かるな」。そう思いながら、みんなと縮こまった。

夜も更け、寮に戻った。まちを焼き尽くす炎のためだろうか。長崎の中心部の空が夜になっても明るかった記憶がある。「日本は負けるな」。そう感じていた。

翌日だったと思う。爆心地付近へ向かった。稲佐橋を通るとき、橋の下の石垣に、首から上だけの遺体が流れ着いていた。被爆後、初めて見た遺体。涙がこぼれた。爆心地付近は一面が焼け野原で、どこに何があったのか全く分からない状態だった。

15日。工場で玉音放送を聞いた。くやしくて泣いた。「もう日本はおしまいだ」と絶望した。

私の願い

庭にカシの木を植えている。枝や葉を剪定（せんてい）し、きのご雲に見えるようにしている。日常生活では原爆のことを忘れがちだが、決して忘れてはならないという思いからだ。原爆を使えば、何もかもめちゃくちゃになる。被爆者は長年、健康被害に苦しむ。原爆はなくしたほうがいい。

長崎新聞 平成25年3月7日掲載

焼け野原にがくぜん

松永 ツル子

長崎市緑町で5人きょうだいの長女として生まれた。福岡市の伯母夫婦に子どもがおらず、私は小学4年で養子に行った。

伯母は軍人相手に福岡で下宿を営んでいたが、1945年に下宿を佐世保へ移転。14歳の時だった。8月9日は、佐世保でラジオや軍人らの話から「大きな爆弾で長崎がやられた」と知り、母や妹弟のことが心配だった。父は出征していた。

列車で移送された被災者が早岐国民学校の体育館に運ばれ、10、11日は介抱した。やけどした人やガラス片が刺さった人が埋め尽くし、医者が治療。私たちは水を飲ませてあげた。暑さと、けが人や死者らのおいが館内にこもっていた。

10日は全身が腫れて「痛か、痛か」とうめく中年女性を励ました。11日に息絶えていた。特に外傷はなかったため、後に「原爆の影響で腫れて亡くなったのかしら」と気が掛かりだったことを覚えている。

13日、母が伯母の知人の車で佐世保へ訪ねてきてくれた。きょうだいも無事と聞き、安心した。母ら家族は被爆当時、チフスで長崎市内の病院に隔離入院していたという。爆風でガラスが割れ、妹が室内で飛ばされながらも、どうにか助かった。病院から自宅を見に行く途中、浦上川に水を求めて人が群がっていたり、そのまま流されてしまったりする様子が稲佐橋から見えたという。

佐世保で母は毛布など物資をもらい、長崎に帰った。私は16日、きょうだいに会うため長崎の緑町付近へ。広がる焼け野原を見てがくぜんとした。家族はバラックで暮らしていた。式見出身の母の親族は無事だったが、父方の親族は浦上にいたためほぼ全員亡くなった。

浦上天主堂近くへ妹と墓参りに行く際は、親族宅の跡地を通るたびに「ここのおばちゃんにかわいがってもらったね」と思い出を話す。昨年末に膝を痛め、今年はまだ行っ

ていない。

私の願い

戦争をしても、悲しくみじめな思いをするだけ。あんなことは、もういや。新しい時代を担う子どもたちのためにも、二度としてはいけない。世界中で行われている核実験も信じられない。

争い事や対立があっても、武力ではなく、対話で解決すべき。誰もが平和を望んでいるはずだ。

長崎新聞 平成25年3月21日掲載

諫早目指し線路歩いた

吉川 溟子

あの瞬間、職場の三菱重工長崎造船所敷地内にある建物のロビーにいた。突然白く光り、すぐに爆音が鳴った。10人ほどが、さっとかがんだ。

立ち上がるとすぐ突風が吹いた。「何が起きたの」。心配になり持ち場に戻ると、書類や弁当などすべてが吹き飛ばされていた。

20歳だった。自宅は長崎市引地町（現・興善町）で、当時は疎開先の諫早市小長井町の母の実家から列車通勤していた。その日はあちこちで発生した火災のため、実家には帰れなかった。

職場から2キロの高台にある同僚宅に泊めてもらうことになった。窓から見渡すと街は炎で赤く染まっていた。そこから自宅が燃えているのが見えた。家族はみな諫早に疎開

していたが涙が出た。

翌朝、同僚の家族に礼を告げて外へ出た。頭巾をかぶり、母が作ってくれたマスクを着けた。うだるように暑かった。長崎駅まで歩いた。着くと長い列ができていて列車にいつ乗れるのか分からなかったため、覚悟を決め、諫早を目指して線路を歩き始めた。ほかにもけがを負った人たちが列をなしてゆっくりと歩いていた。前を歩く男性は尻が焼けただれていた。途中、子ども同士が抱き合うような姿で黒く焼け焦げていた。怖くて目をそらした。

「ケイコ」「テルコ」。娘を捜す男の人の声が聞こえた。病で床に伏している諫早の父が私を呼んでいるような気がして、一刻も早く帰らなくては、と思った。

長与駅まで歩くと、運よく列車が着いていたので乗り込んで、小長井駅に向かった。

ようやく駅に着くと母がホームにいた。列車が来るたびに迎えに来ていたのだろう。「お母さん」。大声で叫んだ。母は私を見つけると駆け寄って抱き締めた。泣いてはいけないと思ひ、母を見つめて笑った。

私の願い

これまで家族以外に被爆体験を語らなかつた。諫早市には救護被爆者が多く、逃げただけの私が語るのおこがましいと思っていた。でも被爆者が高齢化し、語る時期に来たと感じている。若い人の中には戦争を肯定する人がいると聞くと、戦争は人殺し。当時を思い返しても、何もいいことはなかつた。

長崎新聞 平成26年7月3日掲載

死体とうめき声の駅舎

朝長 昭一郎

当時、諫早の県立農学校（現県立諫早農業高）1年生で14歳。千綿村（現東彼杵町）の自宅から列車で通い、食糧増産のため学校で農作業に明け暮れていた。あの日、養蚕の桑畑に肥料を運ぶ途中、B129が長崎方面に飛んで行くのが見えたが、空襲慣れしていて誰も避難していなかつた。しばらくして雷光よりもひどい光が目の前を覆い、少し遅れて「ドシン」と重たい音。長崎方向の空に赤みがかつた黄色い入道雲のような雲ができ、慌てて防空壕（ごう）に隠れたが、爆音も聞こえないので数十分後には農作業に戻つた。午後3時に学校が終わり下校。級友と諫早駅まで歩いている途中、ひどいやけどを負つた人たちを戸板に乗せて向かって来る行列に出会つた。「何事ですか」と聞くと「長崎が新型爆弾で全滅した。けが人を小、中学校に運

んでいる」と教えられた。

駅舎の前で駅員から「水を飲ませるな。飲ませたら死ぬ」と注意された。ホームも地下通路も歩く隙間がないほどの数の死体とうめき苦しむ人たちでいっぱい。全身黒焦げの男子にズボンをつかまれ「君たちも同じ学徒だろう。水をくれ。うすき商業だ」とせがまれたが、どうすることもできなかった。その男子は大分県の白杵商業の生徒だったのだろう。どうせ死ぬのなら水を飲ませてあげればよかった。今でも夢で思い出し、後悔で気持ちが沈むことがある。

自宅に向かう列車内で、「水、水」の悲痛な訴えやうつろな視線に耐え、千綿駅まで隅っこでじっとしていた。早く帰りたい一心だった。

19日には級友と2人一組で、全身が焼けただれたり、うじがわいたりした重傷者を担架に乗せ、諫早中から普通に歩いても30分かかる距離の海軍病院まで運んだ。3人目は病院に着いた時には亡くなっていて、疲れと恐ろしさで先生に「もう運べません」と告げた。

私の願い

もし地獄というものがあるのなら、苦しむ被爆者で埋め尽くされた諫早駅はまさに生き地獄だった。戦争は勝っても負けても、犠牲者と遺族を生むだけで、どちらにも利がない。兄が終戦前にビルマで戦死したが敵を討とうと思ったことはない。これ以上、悲しい記憶を増やしてはいけない。

長崎新聞 平成26年11月6日掲載

炎の夜空　ただ眺めた

嘉松　愛子

あの日の朝。16歳だった私は、挺身(ていしん)隊として動員されていた平戸小屋町の三菱電機長崎製作所に向け、いつものように立山町の自宅を出た。

数分もしないうちに警戒警報が鳴った。「きょうは休もう」。それまで一度も休んだことはなかったが、なぜか急に思い立ち、引き返した。

自宅でネコと遊んでいると、敵機の爆音が聞こえた。一見見ようと、玄関の外に1歩出た午前11時2分。白い稲光のような強烈な光に襲われた。

真っ昼間の閃光(せんこう)に驚いたが、新聞で見た広島と同じ爆弾が落とされたのだろうと直感した。辺りに目立った形跡はなかったが、家の中は茶棚が倒れ、炊事道具が散乱していた。

「また爆弾が落とされるかもしれない」。近くの畑にごぎを敷き、両親と数日間過ごした。金比羅山からは、やけどをした人がぞろぞろと列をなしてどこかに下り、県庁の方は真っ赤な炎が夜の空を染めた。その見慣れない風景を、特に何かを感じることもなく、ただ眺めた。

母は被爆後、貧血気味になり、私も手や足に赤い斑点が現れ、数年間消えなかった。また、外傷もなく元気にしていた顔見知り突然亡くなったという話をよく聞いた。詳しい原因は分からないが、被爆の影響だったのだろう。

終戦から1年ほど過ぎたある日。役所から広報が届いた。兵隊に行っていた八つ上の兄が「ニューギニアで栄養不良のため亡くなった」と知らせるものだった。

「いつ帰ってくるか」と待ち続けた母に読んで聞かせた。母が大きく表情を崩すことはなかった。心のどこかで覚悟していたのだろう。

しかし、人の親になった今の自分なら、その時の母の気持ち痛みほどよく分かる。戦争でわが子を失うことが、どんなにつらかったことか。

私の願い

戦争は絶対にしてはいけなしいし、加担してもいけなしい。私たちが体験した悲しみや苦しみを、子や孫の世代には絶対に味わわせたくない。核兵器の使用や所持についても反対だ。一瞬にして多くの命を奪うだけでなく、その後の健康にも多大な不安と影響を及ぼし、苦しんでいる人が大勢いる。

長崎新聞 平成27年2月19日掲載

命拾いした「技術ビル」

「地球が爆発したんだ」

早崎 猪之助

長崎市文教町の長崎大文教キャンパスの一角。原爆投下で甚大な被害を受けた三菱長崎兵器製作所大橋工場（爆心地から約1・1キ）に、「技術ビル」と呼ばれた建物が、かつてあった。ここに立つたび、奇跡的に生き延びた「運」を感じる。あの日、あと0・5秒遅れていたら命はなかったかもしれない。

14歳で、同工場の職工学校1年生として実験場の掃除などをして働く日々だった。手伝っていた潜水艦のエンジン実験の終盤、歯車にピンが入らなかった。「ピンの先を研いでこい」。上司の指示を受け、急いで研磨機のある隣の「技術ビル」へ走った。

ビルに入り、「補機室」へ。鉄筋コンクリートの柱の陰にあった研磨機の前に来た瞬間。目がつぶれるような光と、

100の雷を束ねたような音を感じ、ビル内の約13層先の物置まで吹き飛ばされた。強烈な爆風だったが、鉄筋コンクリートの柱が「盾」となって、大きなけがをせずに済んだ。だが、両耳が痛くてたまらない。「痛い痛い」と大声で叫んでも、自分の声が聞こえなかった。地球が爆発したんだと思った。

黒い煙で周囲は真っ暗。漂うのは火薬のにおい。四つんばいで移動しようとしたができず、座り込んだ。しばらくすると、煙が少し薄れて視界が開けてきたので、ようやく逃げ出すことができた。

工場の門へ向かう途中、周囲の光景に驚いた。山芋を掘った跡のように基礎が抜けてしまった建物。生きているのか死んでいるのか分からない真っ黒な男女。何が起こったのか。唯一分かったことは、「もう一度ピカッとなったら死ぬかもしれない」ということ。必死で防空壕（ごう）を指し、工場を後にした。

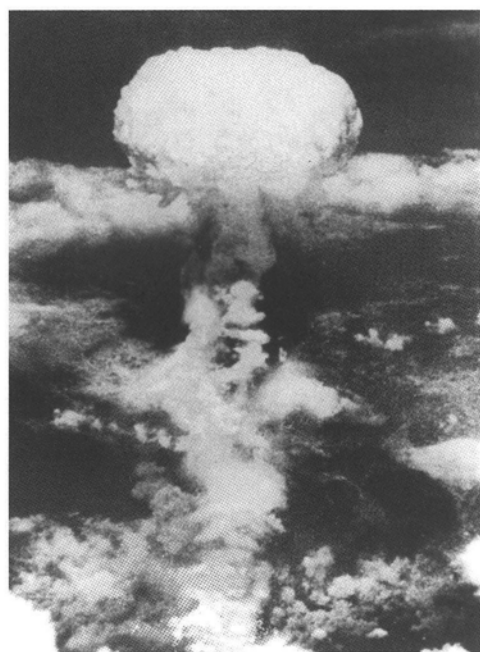
長崎新聞 平成26年7月29日掲載

第4章

活動の記録

(1) 被爆・戦後70年の歴史と友の会活動記録

西暦	和暦	長崎と原爆関係
一九四二	昭和17	8・13 マンハッタン計画開始 9月17日、マンハッタン管区の総指揮官にグローブス准将就任
一九四四	昭和19	8・11 長崎市内、空襲を受ける（第一次空襲） 2・4 アメリカ・イギリス・ソ連首脳のヤルタ会談が行われる
一九四五	昭和20	4・1 アメリカ軍、沖縄本島に上陸 4・26 長崎市内、空襲を受ける（第二次空襲） 7・16 アメリカ、史上初の核（プルトニウム）爆発実験に成功（アラモゴード） 7・26 ポツダム宣言発表 7・29 長崎市内、空襲を受ける（第三次空襲） 7・31 長崎市内、空襲を受ける（第四次空襲）



きのこ雲・原子雲
(長崎原爆資料館 写真提供)

-
-
- 8・1 長崎市内、空襲を受ける（第五次空襲）
 - 8・6 午前8時15分、広島市に原子（ウラン）爆弾投下される
 - 8・9 午前11時2分、長崎市に原子（プルトニウム）爆弾投下される
 - 8・10 久留米・佐賀陸軍病院など県外救護班、長崎入り
 - 8・11 針尾海兵団第一次救護隊、長崎入り
 - 8・12 長崎医科大学第十一医療救護隊三ツ山地区巡回診療開始
 - 8・12 九州帝国大学第一次救護班治療開始
 - 8・12 佐世保海軍病院武雄分院救護隊、長崎入り
 - 8・13 西部軍管区防疫班、長崎入り
 - 8・13 九州帝国大学篠原健一ら放射能調査のため長崎入り
 - 8・15 日本、ポツダム宣言を受諾し、天皇の終戦詔書放送される
 - 8・17 熊本医科大学第一次救護班・針尾海兵団第二次救護隊、長崎入り
-



きのご雲／原子爆弾炸裂15分後（長崎原爆資料館 写真提供）

西暦

和暦

長崎と原爆関係

一九四五

昭和20

9・1 長崎県知事、『8月9日長崎市空襲災害概要報告書』を作成

9・2 長崎地方に豪雨、廃墟の様相変わる

9・11 病院船へブン号、九州で解放された約一万人の捕虜を引き取るため、巡洋艦一隻・駆逐艦三隻・空母一隻とともに長崎に入港

9・13 マンハッタン管区調査団、長崎を調査(14日まで)

9・14 文部省、学術研究会議に原子爆弾災害調査研究特別委員会を設置

9・16 連合軍先遣隊500名、長崎出島岸壁に上陸

9・19 GHQ、プレス・コード指令

9・25 アメリカ海軍技術派遣団、長崎調査を始める

10・19 GHQ、日本映画社原爆記録映画撮影班員に撮影中止を指令(12月12日正式の撮影禁止命令)

6・29 マンハッタン管区調査団「広島・

一九四六

昭和21



山王神社 (長崎原爆資料館 写真提供)



爆心地標識 (長崎原爆資料館 写真提供)

一九四八	昭和23	<p>長崎への原爆攻撃」公表</p> <p>6・30 米国戦略爆撃調査団報告書「広島・長崎への空襲の効果」完成</p> <p>7・1 アメリカ、マシーナル諸島のビキニ環礁で原爆実験</p> <p>8・9 遺族の有志、松山町の原爆落下中心地広場で戦災死没者慰霊祭を行う</p> <p>9・30 長崎市、戦災復興土地区画整理区域を決定、事業に着手する</p> <p>8・1 国立予防衛生研究所長崎支所（長崎原子爆弾影響研究所）設立</p> <p>8・9 長崎爆心地で文化祭 マツカーサー連合軍最高司令長官、メッセージを寄せる 市民代表として副議長が平和宣言を行う</p>
一九四九	昭和24	<p>4・11 長崎市原爆資料保存委員会設置（1959年4月1日廃止）、原爆資料の収集に着手する 5月6日、同委員会、原爆資料館開設を決議</p> <p>5・11 広島平和記念都市建設法・長崎国際文化都市建設法成立、それぞれ8月6日・9日に公布</p> <p>5・ 爆心地公園に原爆資料館を開設</p>



松山町の高台から浦上天主堂方面を望む（長崎原爆資料館 写真提供）

西暦	和暦	長崎と原爆関係	
一九四九 一九五〇	昭和24 昭和25		8・29 ソ連、初の原爆実験（シベリア） 1・31 トルーマン米大統領、水爆製造を指令 6・25 朝鮮戦争始まる 7・ 長崎市原爆資料保存委員会、長崎原爆死傷者数（推定）を発表。死者7万3884人、重軽傷者7万4909人 10・1 ABCC、国勢調査付帯調査として原爆被爆生存者の全国調査実施
一九五一	昭和26		9・8 対日平和条約・日米安全保障条約調印（サンフランシスコ）、1952年4月28日発効 2・20 長崎市、民生委員による原爆障害者調査に着手
一九五二	昭和27	8・9 長崎市、原爆犠牲者慰霊祭を平和公園で行う 10・3 イギリス、初の原爆実験（西インド洋モンテベロ島） 11・1 アメリカ、初の水爆実験（太平洋エニウエトク環礁）	
一九五三	昭和28	5・14 長崎市原爆障害者治療対策協議	



浦上天主堂（長崎原爆資料館 写真提供）

一九五四	昭和29	<p>会（長崎原対協）発足 1958年9月20日、財団法人として再発足</p> <p>6・2 長崎原爆乙女の会結成</p> <p>8・12 ソ連、初の水爆実験（中央アジア）</p> <p>3・1 アメリカ、マーシャル諸島ビキニ環礁で水爆実験 ミクロネシア住民被災、マグロ漁船第五福竜丸も「死の灰」を浴びる</p> <p>2・11 長崎国際文化会館完成、原爆資料館を五階に移設し、原爆資料展示室を設ける（4月1日開館）</p> <p>8・6 第一回原水爆禁止世界大会広島大会を開催</p> <p>8・8 長崎の平和祈念像除幕式</p> <p>8・24 広島平和記念資料館（原爆資料館）開館</p> <p>9・19 原水爆禁止日本協議会（日本原水協）結成</p> <p>10・1 長崎原爆青年会結成</p> <p>5・3 長崎原爆青年乙女の会発足（長崎原爆青年会と長崎原爆乙女の会を統合）</p> <p>6・23 長崎原爆被災者協議会結成</p> <p>8・10 日本原水爆被害者団体協議会（日</p>
一九五五	昭和30	
一九五六	昭和31	

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情
一九五七	昭和32	<p>本被団協）結成大会を長崎国際文化会館で行う</p> <p>5・15 イギリス、初の水爆実験（太平洋クリスマス島）</p>	<p>11・10 長崎市農民会館の一隅にささやかな会、長崎県動員学徒犠牲者の会の発足</p>
一九五八	昭和33	<p>3・ 原爆死没者慰霊納骨堂建設</p> <p>3・31 ソ連、核実験停止を決定</p> <p>5・28 長崎原爆病院開院</p> <p>7・11 浦上天主堂遺壁の一部を爆心地公園に移築する</p> <p>8・22 アメリカ・イギリス、10月31日以降一年間の核実験停止を発表</p> <p>10・31 アメリカ・イギリス・ソ連三国核実験停止会議（12月19日までジュネーブ）</p>	
一九五九	昭和34	<p>11・20 国連総会、完全軍縮に関する82カ国共同決議案を可決</p>	
一九六〇	昭和35	<p>1・19 日米安保条約調印（ワシントン）、6月23日発効</p> <p>2・13 フランス、初の原爆実験（サハラ砂漠）</p> <p>5・7 アメリカ、地下核実験再開を声明</p>	

一九六一	昭和36	7・5 長崎原爆後障害研究会発足 8・30 ソ連、核実験再開を発表 11・15 核兵器禁止平和建設国民会議（核禁会議）結成
一九六二	昭和37	4・1 長崎大学医学部、付属機関として原爆後障害医療研究施設を設置
一九六三	昭和38	7・15 アメリカ・イギリス・ソ連三国、大気圏内・宇宙空間および水中における核兵器実験を禁止する条約（部分的核実験停止条約）に仮調印、8月5日正式調印、10月10日発効
一九六四	昭和39	8・14 日本、部分的核実験停止条約に調印 10・16 中国、初の原爆実験（中国西部地区）
一九六五	昭和40	2・7 アメリカ、ベトナム戦争で北ベトナムのドンホイを爆撃（北爆開始） 11・1 厚生省、原子爆弾被爆者実態調査を実施（国が行う初の全国一斉調査）
一九六七	昭和42	6・17 中国・初の水爆実験（中国西部地区） 6・18 長崎県被爆者手帳友の会結成 8・5 原爆資料協議会を設置

2回

6・18 県青少年センターにおいて、長崎県動員学徒犠牲者の会員が主体となって被爆者手帳友の会の発足式



昭和42年6月18日、長崎県被爆者手帳友の会発足記念祝賀会

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情
一九六七	昭和42	11・9 原爆記録映画、アメリカ政府から日本に返還 11・28 広島・長崎原爆被爆者援護対策促進協議会（八者協）発足	1回
一九六八	昭和43	7・1 アメリカ・イギリス・ソ連の三首都で核拡散防止条約の調印式 8・9 原爆殉難者名奉安所が7月完成、平和祈念式典のさいに2万6902人の名前を奉安 8・24 フランス、初の水爆実験（南太平洋ムルロア環礁）	1回
一九六九 一九七〇	昭和44 昭和45	2・1 長崎の証言の会結成 2・3 日本、核拡散防止条約に調印 5・16 長崎市原爆被爆教師の会結成 8月9日長崎県原爆被爆教師の会結成 6・26 長崎原爆爆心地松山町で復元運動始まる 7月15日松山町原爆被災地復元の会を結成 7・1 長崎原爆被災者協議会・長崎原爆遺族会・県被爆者手帳友の会の三団体で	7回 2回

長崎県被爆者手帳友の会

一九七二	昭和46	原爆被爆者団体連絡協議会を結成 1・1 長崎市に原爆被災復元調査室を設 置 3・26 長崎原爆被災復元調査協議会発足 6・24 浦上天主堂鐘楼ドーム保存工事完 成 2・23 原爆被災資料センター(仮称)設 置推進設立準備委員会発足 3・5 青年と被爆二世の会結成 6・24 長崎市長、原爆犠牲者慰霊・世界 平和祈念旬間の制定を提唱 8・13 原爆犠牲者慰霊・世界平和祈念の 長崎市民大行進が始まる 3・5 長崎国際文化会館内の原爆資料展 示室のスペースが二倍になる 5・9 外務省でアメリカ軍接收広島・長 崎被爆資料の返還式 7・1 長崎原爆戦災誌編さん委員会発足 5・16 インド、初の原爆実験(ラジャス タン州) 4・1 広島・長崎で放射線影響研究所の 開所式(ABCを改組) 5・14 長崎大学医学部付属原爆被災学術	6回
一九七三	昭和48	11・30 生き残りたる吾等集ひての発行	9回
一九七四	昭和49		6回
一九七五	昭和50		9回

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情	長崎県被爆者手帳友の会
一九七五	昭和50	資料センター開所式 7・9 長崎市、映画「ながさき原爆の記録」を製作し初公開 8・1 長崎国際文化会館内の原爆資料の充実化		
一九七六	昭和51	8・5 広島・長崎両市の平和文化都市提携調印式（広島） 4・21 長崎国際文化会館四階に広島コーナーを設ける 8・9 平和祈念式典に、三木首相が歴代首相として初めて参列する	5回	8・7 安日 晋先生（長崎原爆病院）のご遺徳を偲び被爆者手帳友の会が記念碑を建立
一九七七	昭和52	12・1 広島・長崎両市長、国連でワルトハイム事務総長と会見、「核兵器の廃絶と全面軍縮のために——国連事務総長への要請」を提出し、核兵器廃絶を訴える 3・31 『長崎原爆戦災誌』第一巻完成 4・1 長崎市原爆被爆対策部を新設、原爆行政の一元化を図る	11回	
一九七八	昭和53	8・9 アメラシング国連総会議長、国連代表として平和祈念式典に参列 2・27 NGO国際軍縮会議（3月2日ま	8回	8・5 「長崎の鐘」除幕式（平和公園600名参加）



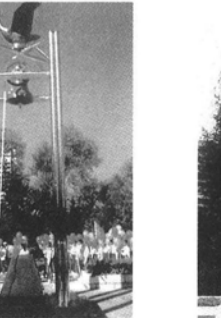


一九八一	昭和56	2・26 ローマ法王ヨハネ・パウロ二世、爆者コーナーを新設する	8回	
一九八〇	昭和55	8・2 長崎市・県共同製作原爆アニメーション映画「8月9日長崎」が完成 8・4 長崎国際文化会館四階に外国人被爆者コーナーを新設する	6回	5・11 千々石原爆慰霊碑落成式 8・5 特養ホーム「かめだけ」落成式
一九七九	昭和54	3・31 『長崎原爆戦災誌』第二巻完成 7・25 広島・長崎両市、『広島・長崎の原爆災害』を出版 8・5 長崎県被爆者手帳友愛会結成大会 8・8 平和祈念式典にあわせ初めて野外原爆写真展を行う	8回	3・26 西有家被爆者慰霊碑 12・8 特養ホーム「かめだけ」起工式
		5・23 第一回国連軍縮特別総会（6月28日までニューヨーク）が開催され、広島・長崎両市長出席「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」国連本部にて開催 7・15 長崎「原爆問題」研究普及協議会発足 10・24 国連軍縮週間始まる（10月30日まで）		3・7 口之津支部慰霊碑除幕式
		でジュネーヴ		

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情
一九八一	昭和56	<p>長崎訪問</p> <p>5・14 ポーランド自主管理労組「連帯」のワレサ議長、長崎国際文化会館を見学</p> <p>5・31 ドイツ民主共和国(東ドイツ)ホーネッカー国家評議会議長(元首)、平和公園で長崎市へ贈った平和モニュメントの除幕式に参列</p> <p>6・13 長崎市が1978年8月からすめていた朝鮮人被爆者の実態調査結果を発表</p> <p>3・31 広島・長崎両市共同製作の原爆映画「ヒロシマ・ナガサキ——核戦争のもたらすもの」完成</p> <p>4・25 ノーベル平和賞受賞者マザー・テレサ、長崎国際文化会館を見学</p> <p>6・3 国連広報局主催「現代世界の核の脅威展」、ニューヨークの国連本部ロビーで開催され、広島・長崎両市長、開幕式に出席</p> <p>6・7 第二回国連軍縮特別総会(7月10日まで)開催され、広島・長崎両市長が</p>	3回
			<p>12・14 ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー(特養ホーム「かめだけ」)</p> <p>4・10 創立十五周年記念(功労者表彰・記念祝賀会・タイムカップセル・その他)</p> <p>5・30 南串山原爆殉難碑</p> <p>11・14 島原原爆殉難者の碑</p> <p>11・23 長崎県から優良団体の表彰を受ける</p>


長崎県被爆者手帳友の会

一九八三	昭和58	<p>演説</p> <p>2・12 長崎平和推進協会設立総会開かれる</p> <p>3・31 『長崎原爆戦災誌』第五巻完成</p> <p>5・26 十フイート運動による映画「歴史——核狂乱の時代」が完成</p> <p>7・19 スイスのジュネーブ市で「核兵器・現代世界の脅威展」(国連広報局主催)開催される</p> <p>長崎市長、19日の開会式に出席、浦上天主堂の復元模型など長崎・広島の写真29点と40枚の写真パネルを展示</p> <p>9・1 ドイツ民主共和国(東ドイツ)のマグデブルグ市で「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」が開催され、長崎市長、市議会議長が出席</p> <p>9・28 広島・長崎原爆資料の国連本部(ニューヨーク)での常設展示始まる</p> <p>11・29 中国の胡耀邦総書記、長崎を訪問、翌日平和公園で供花を行う</p> <p>3・31 『長崎原爆戦災誌』第四巻完成</p> <p>5・1 長崎市原子爆弾被災資料協議会が発足</p>	2回
一九八四	昭和59	<p>11・19 ソ連観光客の原爆被災者特別養護ホーム“かめだけ”慰問</p> <p>12・24 ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー(特養ホーム“かめだけ”)</p>	4回

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情
一九八四	昭和59	<p>9・10 スウエーデンのストックホルム市で「核兵器・現代世界の脅威展」(国連主催)開催され、長崎市長、市議会議長が出席</p> <p>1・10 ドイツ連邦共和国西ベルリン市で「核兵器・現代世界の脅威展」(国連主催)開催され、長崎市長、市議会議長が出席</p>	5回
一九八五	昭和60	<p>3・31 『長崎原爆戦災誌』第三巻完成</p> <p>4・1 長崎市平和基金を開設</p> <p>7・4 イランのラフサンジャニ国会議長、長崎を訪問、長崎国際文化会館を見学後、平和公園で供花を行う</p> <p>8・8 第一回世界平和連帯都市市長会議長崎会議が長崎市平和会館で開催される</p> <p>9・11 バチカン市国で原爆展開催され、長崎市長、市議会議長が出席</p>	8・8 わが戦いの日々が発行
一九八六	昭和61	<p>4・11 長崎市平和会館一階に平和の願いコーナーを開設、ファットマンの模型も展示</p> <p>4・26 ソ連ウクライナ共和国のチェルノ</p>	3回

一九九〇 平成2	<p>8・9 第七回非核宣言自治体全国大会が</p> <p>8・2 イラク軍がクウェート領内に侵攻 冷戦の終りを確認</p> <p>12・2 マルタ会談（米ソ首脳会議）開催、 崎会議開催</p> <p>10・11 第九回核戦争防止国際医師会議長 崎会議開催</p>	2回	<p>9・18 長崎の鐘 第三号（中国・ 瀋陽市）贈呈式</p>	
一九八九 平成元	<p>8・8 第二回世界平和連帯都市市長会議 長崎会議開催</p>	4回	<p>12・2 第一回友の会平和賞授賞式 具島兼三郎氏</p> <p>12・2 第二回友の会平和賞授賞式 宇都宮徳馬氏</p>	
一九八八 昭和63	<p>5・31 第三回国連軍縮特別総会（6月23 日まで）開催され、広島・長崎両市長が 演説</p>		<p>8・9 長崎の鐘 第二号（ソ連邦・ レニングラード市）贈呈式</p>	
一九八七 昭和62	<p>5・25 モスクワ市で「核兵器・現代世界 の脅威展」（国連主催）開催され、長崎 市長、市議会議長が出席</p> <p>6・1 東ドイツで開催されたベルリン七 五〇周年世界市長会議に長崎市長が出席</p> <p>10・21 北京市で「核兵器・現代世界の脅 威展」（国連主催）開催され、長崎市長、 市議会議長が出席</p>	5回	<p>5・16 友の会創立二十周年記念祝 賀会 宝来軒別館</p>	

昭和62年5月16日、動員学徒30周年・友の会20周年・創立記念祝賀会（宝来軒別館）

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情	長崎県被爆者手帳友の会
一九九〇	平成2	<p>長崎で開催される</p> <p>8・21 イタリアのラクイラ市・リミニ市で開催された平和会議に長崎市長出席</p>		<p>12・1 第三回友の会平和賞授賞式 森滝市郎氏</p>
一九九一	平成3	<p>1・7 部分的核実験禁止条約改定会議（ニューヨークで18日まで）が開催され、広島・長崎両市長が演説</p> <p>1・17 クウェートに侵攻したイラク軍の撤退を求めて多国籍軍がイラク領内を空爆開始、湾岸戦争始まる（2月24日、地上戦突入。3月1日、停戦）</p> <p>4・19 ソ連のゴルバチョフ大統領、長崎を訪問し稲佐の悟真寺のロシア人墓地参拝後、平和公園で献花</p> <p>6・25 長崎原爆被爆地域問題検討会、爆心地東14キロの飯盛町でも残留プルトニウムを確認したとする報告書をまとめ、県・市に報告</p> <p>7・ 稲佐小学校被爆校舎解体作業始まる</p> <p>9・27 ブッシュ米大統領、海洋戦術核撤</p>	1回	<p>12・8 長崎の鐘 第四号（ハワイ州・ホノルル市）贈呈式</p>  <p>12・7 第四回友の会平和賞授賞式 杉原千畝氏</p>

一九九二
平成 4

去など大幅な核軍縮を表明、ソ連にも同様の措置を取るよう呼び掛ける。10月6日、ゴルバチョフソ連大統領も地上戦術核の撤去などを表明

1・16 平和公園地下駐車場工事現場で旧長崎刑務所浦上刑務支所のレンガ造りの側溝部分が出土。これを契機に市民が保存運動を展開

2・20 平和公園の被爆遺構を保存する会
結成

3・9 長崎市議会で本島市長が「刑務支所は被爆遺構ではない」との考えを明らかにする

3・31 世界の核被害者救済組織として「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会」が発足

4・7 平和公園の被爆遺構、移設始まる

4・20 岩松繁俊長崎大教授、平和公園の被爆遺構に対する長崎市の方針に反対し、平和宣言文起草委員辞任を申し出る

6・20 長崎市の核実験への抗議が5000回に

7・2 ブッシュ米大統領、海洋配備戦術

2回

9・1 第五回友の会平和賞授賞式

初村滝一郎氏

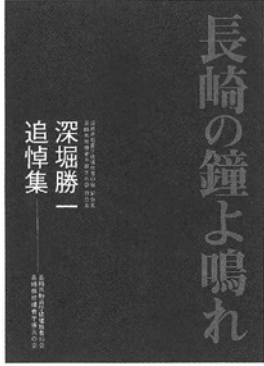
西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情 長崎県被爆者手帳友の会
一九九二	平成4	核の撤去完了を発表	
		7・31 在韓被爆者の金順吉さんが三菱重工に未払い賃金や強制連行、被爆への慰謝料を求める訴訟を長崎地裁に起こす	
		8・5 朝鮮民主主義人民共和国在住の被爆者が日本で治療を受けるため来日	
		8・6 浦上刑務支所と長崎刑務所に収監中、被爆死した韓国人3人の遺族による遺骨返還要求を、長崎刑務所が拒否	
		9・1 長崎市が制定した「被爆建造物等の取扱基準」施行	
		10・2 ブッシュ米大統領、1997年以降、米国の核実験全面禁止の条項を盛り込んだ法案に署名	
		10・19 本島長崎市長、韓国ソウルで「在韓被爆者の苦しみは日本人の責任」と謝罪	
		1・3 米ソ大統領が、戦略核弾頭保有数を3分の1に削減する第2次戦略兵器削減条約（STARTⅡ）に調印	
一九九三	平成5	1・15 米イージス艦モービルベイが長崎	3回

一九九四	平成6	<p>入港</p> <p>3・26 南アフリカのデクラーク大統領、南アが1989年までに6個の原爆を製造し、その後解体したことを明らかにする</p> <p>5・26 長崎市の松谷英子さんが原爆症の認定を却下した厚生省に処分の取り消しを求めた訴訟で、長崎地裁が訴えを全面的に認め処分取り消しの判決を下す</p> <p>7・ 朝日小学校被爆校舎解体</p> <p>8・10 細川首相、「(太平洋戦争は)侵略戦争だった、間違った戦争だった、と認識している」と発言</p> <p>9・ 飽浦小学校校舎解体</p> <p>12・7 浦上刑務支所で原爆の犠牲になった中国人遺族が平和公園を訪問、同支所の原爆遺構に献花</p> <p>3・22 浦上刑務支所、長崎刑務所の原爆犠牲者の韓国人遺族が遺骨の返還、死亡通知発行を日本政府に直訴</p> <p>5・12 全国から寄せられた1万234名の署名を添え、長崎市に責任ある保存策を求め要望書を提出</p>
	1回	<p>12・8 第六回友の会平和賞授賞式 岩崎和佳子氏</p>

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情	長崎県被爆者手帳友の会
一九九四	平成6	6・7 政府が、国際司法裁判所へ提出する「核兵器に関する陳述書」で「核兵器使用は国際法上違法とはいえない」とする方針を決定。その後、被爆者らの反発を受け撤回		6・15 被爆者手帳友の会会報綴の発行 7・7 “かめだけ” ホーム創立十五周年記念祝賀会 12・8 第七回友の会平和賞授賞式 杉山千佐子氏
一九九五	平成7	8・ 長崎刑務所、韓国人2遺族へ遺骨返還 11・14 飽浦小学校新校舎完成	1回	8・23 ハワイ長崎の鐘ツアー出発 11・14 第八回友の会平和賞授賞式 ゴルパチョフソ連大統領 12・8 第九回友の会平和賞授賞式 日本山妙法寺
一九九六	平成8	4・1 磨屋・新興善・勝山小学校を統合し、諏訪・桜町の2小学校に名称変更	2回	3・11 被爆惨状絵図完成記念祝賀会 6・19 友の会創立三十周年記念集会 勤労福祉会館 12・3 第十回友の会平和賞授賞式 高木仁三郎氏 ミニ平和賞授賞式 岩松繁俊氏 山下弘文氏
一九九七	平成9	9・ 磨屋小学校校舎解体	1回	4・1 長崎市政功労表彰 於長崎市民会館 8・8 キング牧師の除幕式（恵の丘純心大） 12・2 諫早記念碑除幕式
一九九八	平成10	7・19 長崎刑務所、韓国人遺族・徐栄子さんへ遺骨返却	3回	12・7 ハワイ・ホノルル市訪問（六名） 1・15 ハワイ・ホノルル市訪問（五名）
一九九九	平成11	12・15 磨屋小学校跡地に諏訪小学校新校舎完成		5・17 第十一回平和賞授賞式 車 貞述氏 平和祈念会館 8・7 キング牧師顕彰碑、除幕式（平和祈念会館）
二〇〇〇	平成12	8・ 勝山小学校校舎解体		

二〇〇一	平成13	8・ 伊良林小学校の被爆校舍解体
二〇〇二	平成14	11・ 被爆した旧長崎医科大学のゲストハウスが現存していることが、長崎大学医学部教授の調査で判明
二〇〇三	平成15	3・26 長崎市被災資料協議会が、旧長崎医科大学のゲストハウスとクスノキを被爆建造物に登録することを決定 4・30 新興善小学校校舍解体始まる 12・5 勝山小学校跡地に桜町小学校新校舎完成
二〇〇四	平成16	6・28 立山防空壕、部分公開へ。被災資料協議会全員が保存整備に合意
二〇〇五	平成17	6・ 米国シカゴのデーリー・ニューズ紙（廃刊）の故ジョージ・ウエラー記者が昭和20年9月6日から約2週間にわたり九州北部や長崎を取材した「幻の長崎ルポ」が写真25枚とともに確認された。 一番乗りの米紙記者で、取材した原稿を連合国軍総司令部（GHQ）検閲担当に送ったが、公表されなかった
二〇〇六	平成18	
8・9		「聖マリア像」除幕式の実施
6・16		韓国平和交流功労賞の授与式 受賞者 深堀勝一
2・17		第十二回平和賞授賞式 朝青龍明徳関
5・29		第十三回平和賞授賞式 龍田弁護士（龍田紘一郎）
11・9		「長崎の鐘」打鐘再開（毎月9の日）
2・2		深堀勝一会長 死去
6・18		井原東洋一会長 就任

西暦	和暦	長崎と原爆関係	国会陳情
二〇〇七	平成19	5・16 長崎市平和公園が国の登録記念物に選定される	2・4 故深堀勝一会长追悼ミサ及び偲ぶ会・追悼集発行
二〇〇八	平成20	5・16 長崎市平和公園が国の登録記念物に選定される	6・18 創立40周年記念誌 「閃光のあの日から」発行
二〇〇九	平成21	3・30 長崎市の被爆遺構「三菱兵器住吉トンネル工場」の一般公開が始まる	9・7 ビースポルト乗船（4名派遣）
二〇一〇	平成22	5・22 長崎原爆資料館の入館者数（前身の長崎国際文化会館も含める）が通算5000万人に達する	3・27 韓国ハプチョン被爆者交流 第一次派遣
二〇一一	平成23	8・9 平和祈念式典に米国の駐日首席公使が同国代表として初めて出席	8・6 「長崎の鐘を鳴奏会」はじめる
二〇一二	平成24		4・30 NPT再検討会議（4名派遣）
二〇一四	平成26		10・11 トルコ原爆展（4名派遣）
二〇一五	平成27		5・15 ネパール原爆展（2名派遣）
			4・21 スペイン ゲルニカ・ルモ市追悼式（3名派遣）
			7・6 奄美の被爆者調査（3名派遣）
			6・18 被爆70年記念誌発行「過去から未来への継承」



長崎と原爆関係

国会陳情

長崎県被爆者手帳友の会

2008年～2014年

(2) 近年の友の会活動詳細

■ 2008年～平成20年度～活動総括

- (1) この1カ年間の「友の会」活動で特筆すべき事は、被爆の実相を語る具体的な活動として、ピースボートへの乗船、韓国被爆者との交流、奄美大島の原爆被爆者への激励など、海外、県外などへの自主的活動が広がった。
- (2) ピースボートは発足25周年目の特別企画として、第63回目の乗船者に被爆者100人を招待し、世界20余カ国を巡回する内容で募集を行った。

これに、中村キクヨ副会長以下4名が自主参加し、被爆者の代表として乗船者及び各国の停泊地などで体験を語り、交流を深めた。のべ4ヵ月間に及んだこの活動に「友の会」として、補助金を支出した。
- (3) 平成21年3月27日から30日まで、3泊4日の日程による「高校生1万人署名活動実行委員会」からの参加要請に応じて、韓国の釜山、ハプチヨンの被爆者へのお見舞
- (4) 奄美大島の被爆者、とりわけ「被爆乙女たち」の手帳取得に際しては、過去「友の会」役員4名を派遣し、「平和の鐘」を贈るなど「被爆者協会」の立ち上げに援助して来た経過があったが、高齢の為、平成20年8月をもって「解散」の報せをうけ、井原会長の公務出張の折に「激励の集い」を行い見舞金を贈った。
- (5) 昨年の定期大会では、結成40周年の節目として、被爆証言集「閃光のあの日から」を発刊し、記憶を記録して残した。
- (6) 「長崎の鐘」の小説で知られる長崎市名誉市民第1号



長崎県被爆者手帳友の会、40周年記念総会



平和の為に『長崎の鐘』を鳴奏会

の故永井隆博士が、生誕100周年を迎えられた事から、その記念の舞台劇「長崎の鐘」長崎公演（岡部耕大脚本・演出）に際し、成功にむけて積極的に支援し、大成功を収めた。

- (7) 長崎県宗教者懇話会（会長・野下千年中町教会主任神父）は、世界平和のために、長崎の教会、寺院その他の施設などで、時刻を決めて、一斉に鐘を鳴らす運動を提唱し、「長崎の鐘を鳴奏会」を立ち上げた。

この運動に「友の会」が平和公園内に建立した「長崎

の鐘」を活用する事となり、積極的な役割を担い、8月6日～9日間、毎日4回の「平和の鐘打鐘」を行って、次年度以降の運動拡大につなげた。

- (8) 被爆者援護を求める運動は、被爆者認定に関して、国は新たに積極的基準を4月に施行したが、被爆者がおかれている現状から求めている内容とは程遠く、裁判結果からも、その是正が必然であり、又認定作業の遅れも甚だしく、大きく批判されている。

- (9) 在外被爆者問題などでも、国やそれに従う県・市は、裁判で敗訴した部分だけに対応する手段ですでに17連敗中であり乍らも抜本的対策を怠っている。

- (10) 被爆二世問題は、従来にも増して積極的な活動を行っているが、田上長崎市長は、交渉の場に一回出たきりで、全く施策の前進面はみられなかった。

- (11) 被爆「体験者」は395名もの「マンモス裁判」を遂行中で「自分たちも被爆者だ！」と声をあげ、「友の会」は「被爆者は、どこにいても被爆者である」原則を貫き、自らの組織の課題として取り組んでいる。

- (12) 「核兵器廃絶」「平和推進の為の諸活動」及び「平和に



ピースボートでの「原爆語り部」
無事帰国



日・韓被爆者と高校生との交流

逆行する発言等への抗議」などの行動と活動については、
県原水爆、県被爆連などをはじめ、他の被爆者団体と可
能な限り足並みを揃え、共同行動を行って来た。

(13) 会員の高齢化は、健康障害の深刻化と生活の不安もあ
り、かつ年間100名近い死亡者が数えられるなど、組
織上の課題も生じている。

(14) 毎月9の日の「平和の鐘打鐘」と「慰霊祭」への参加、
及び年1回の「研修旅行」は、会員相互の親睦の場とも
なっており、健康のバロメーターともなっている。

(15) 被爆者の将来不安の解消については、被爆者認定基準
の是正と作業のスピード他、被爆二世、被爆「体験者」
問題解決への前進と昨年から首相に要望している「重粒

子治療施設建設」の市議会決議と意見書の具体化を図る
運動が残されている。

(16) 「核兵器廃絶と世界平和の実現」については、本年1
月に米国大統領に就任したオバマ氏が米国として初めて
「世界で核兵器を使用した唯一の国として道義的責任を
感じており、世界の核兵器廃絶に立ち上る」との前向き
なメッセージを世界にむけて発しており、この流れを大
きく強くする為にも、来年5月に予定される、国連での
核軍縮会議の成功に、皆さんと共に努力し、「長崎を最
後の被爆地に！」の悲願を、長崎から発して頂けるよう
切望し、被爆者の声を代弁している田上長崎市長の平和
姿勢を評価した上で見守りたい。

2009年〈平成21年度〉活動総括

- (1) 被爆者援護対策の向上と改善を求める運動は、命との闘いであると同時に、核廃絶と世界の平和と安全を求める闘いの連続でもある。
- (2) 2009年4月5日、アメリカの歴史上初めて黒人出身のオバマ大統領は、「世界で初めて核兵器を使用した核保有国の道義的責任として、核兵器なき世界」の実現に全力をつくす。しかし、容易な事ではない。私が生きている間には達成できないかもしれない」と訴えた。
- (3) このことは、全世界に「希望」をもたらす発言だとして「ノーベル平和賞」が与えられた。
- (4) しかし、「核による抑止力」に依存する保有国や、「核の傘」の中にいる日本などに、核廃絶への積極的姿勢はみられない。
- (5) 昨年8月9日に、長崎県下の被爆者5団体は、原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に出席された、麻生首相及び民主党の鳩山代表、日本共産党の志位委員長と相次いで会談し「非核三原則の法制化」を柱とし、「長崎を最後の被爆地に！」とする平和政策とともに、被爆者援護対策の前進を強く要請した。
- (6) 鳩山代表は、「非核三原則は国是の方が良い」とする姿勢だったため、自民党政権と区別化すべきだとして、ぜひとも「法制化するように」との強い申入れに対して、「検討したい」と答弁されたが、全く進展はみられない。
- (7) 「政権交代」を命題とした衆院選では、初めて、県下4選挙区で「民主党を推せん」して戦った結果、全員当選を果たしたものの、民主党政権の前進面は、不安定とあいまいさの前にかすんでしまい、全く視界不良になっている。
- (8) 被爆者対策は、被爆者認定作業の遅れは異常であり、第3号被爆者（介護被爆者）に関する事務的改善が明らかになったものの、具体的進展はこれからである。
- (9) 395名のマンモス裁判が行われている被爆「体験者」問題については、「手帳友の会」は、自らの事とし



「9の日打鐘」と「反核9の日座り込み」



韓国人被爆者支援と交流。
アミュプラザで出発式



平和の為に「長崎の鐘」を鳴らす

- て、物心両面から支援を行い、勝利判決をめぐして全力をあげる、5月12～13日の上京陳情にも、2人を参加させた。
- (10) 被爆2世問題については、県2世の会の副会長ポストを担い、国、県、市などへの申し入れや交渉を行ってきているが、前進面はみられていない。
- (11) 「9の日打鐘」の継続の中から、新しい平和運動の芽も生まれてきており、今後とも、それらの中心的活動を

担わなければならない。

- (12) 「高校生1万人署名運動」をはじめ、各種の平和運動や文化活動には、他団体と協調して、積極的にとりくんできた。

- (13) 国際的な平和活動や被爆者対策については、昨年続き、本年も3月下旬に、韓国人被爆者救援の団体に呼応して、2名の代表を釜山に送り、その役割を果たした。

- (14) 5年毎に行われる国連の「NPT再検討会議」には、会長以下自主的に参加する4名の代表に対し、補助金を支出した。

- (15) 「手帳友の会」の内部体制強化については、いまだ組織的な課題は残しているものの、事務の適正化にあわせ、財政的な安定確保に留意して運営しており、年1回の学習交流会も定着してきている。

- (16) 今後とも、常任理事及び支部組織体制の強化につとめ、被爆者の高齢化に対応する対策に万全の方策をとることが必要である。

■ 2010年〈平成22年度〉活動総括

(1) 長崎県被爆者手帳友の会の運動は、地球滅亡につながる「究極の悪魔の兵器、原子爆弾の惨禍」の非条理に苛まれた被爆体験をもつ者の責任として、自らの命をいとおしむばかりでなく、他の人々を含めて、二世、三世へと影響を及ぼし続ける被害の特異性を語り継ぎ、再び戦争が起こらない様、又、核兵器が使われる事がない様に「核も戦争もない世界」「核兵器廃絶、世界の恒久平和」を実現する活動の継続である。

(2) 1 昨年4月5日、ブラハにおいてアメリカのオバマ大統領が「核なき世界実現」への決意を声明し、希望をもたらす発言に対して、「ノーベル平和賞」が与えられたこともあって、昨年5月3日に、ニューヨークの国連本部で、5年毎に開かれる「NPT再検討会議」の成功に、世界の人々は、大きな期待をよせていた。

(3) しかし、日本政府は、この会議に、外務副大臣の出席でお茶を濁し、広島、長崎の市民を代表とする「平和市長会議」が提唱している「2020議定書」の提案国を



NPT 再検討会議関連活動の報告集会



「長崎の鐘を鳴奏(ならそう)会」。3年目の活動



見出す努力さえ行わなかった。

(4) 「NPT条約」は、もともと核保有国と非保有国との間の不平等が明らかであり、5大国のほかに、インド、パキスタンおよびイスラエル、朝鮮民主主義人民共和国などにも、核兵器保有疑惑が顕在化してきており、各国とも自国の国益を優先する事情から、明白な成果が得られたものとは言い難かった。

(5) 2010NPT再検討会議には、世界のNGOや日本の被爆者団体多数が、周辺活動を展開するために参加したが、長崎県被爆者手帳友の会からも、「地球市民集會会長実行委員会」のメンバーに加わり、井原東洋一會長、井黒キヨミ、倉守照美及び田中安次郎の4名が代表参加した。

(6) 朝長万左男団長（地球市民集會會長崎実行委員長）のもと「チーム長崎」の15名は、4月30日から5月8日までの日程で世界のNGO関係者たちとの交流、高校や大学



トルコ原爆展で平和特使として参加し、世界各地で交流する被爆者4名（左から上へ）

新たに非核特使4人

トルコ原爆展で宗教者交流も

「非核特使」の壮行会

訪問による講話や紙芝居、ピース・ウォーク、国連総会の傍聴、屋内・外で開かれる平和集會への出席など、各種行事で、原爆の恐怖と惨禍、被爆体験講話な

ど、過密なスケジュールを洩れなく消化して、任務を達成した。（友の会より4名参加）

(7) 8月5日には、潘基文国連事務総長が初来崎され、原爆資料館での被爆者代表との会議に、井原東洋一會長が出席し意見と要望を述べた。

(8) 8月6日から9日にかけては、「長崎の鐘を鳴奏会」が3年目の活動を行い、その中心的な役割を「友の会」が担い、打鐘参加者には、「友の会」から、携帯ストラップ「ピース・ベル」を贈り、好評をえた。

(9) 8月9日の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、被爆者5団体による所定の役割を果たした上、菅直人首相との会談には、井原東洋一會長以下3名が出席し、首相の被爆者対策と平和行政に対し、強く前進を求める意見を述べた。

(10) 10月には、「トルコにおける日本年」期間中に開かれた、アンカラでの原爆展に、「非核特使」として井原會長、中村副會長、井黒キヨミ、倉守照美の4氏が出席、次いで11月のイスタンブール原爆展へは、本村チヨ子氏が出席して、体験講話を行った。



韓国の被爆者との交流。「被爆者手帳友の会」から2名派遣

派遣した。

(12) 平成22年度は、以上のように、国際的交流行事が数多かったが、原則自費参加のため、個人的負担が大きいことから、友の会として、所要の餞別金を贈呈して援助した。

(11) 3月末には、高校

生平和大使と共に、韓国人被爆者との交流へ、嘉松愛子、倉守照美の両氏を代表

(13) 被爆2世に関する諸活動では、県組織の副会長として、

野口伸一2世代表がその役割を受け持ち、任務を果たしてきた。

(14) 被爆体験者に係る裁判闘争に関しては、「友の会」自らの課題として、所定の援助金を贈り、中央、地方の行動に参加して、勝利をめざしている。

(15) 毎月9の日の「長崎の鐘打鐘」と「慰霊祭」は、有志会員の定期的な参加により定着し、「9の日座り込み」も可能な限り参加した。

2011年〈平成23年度〉活動総括

(1) 2011年（平成23年）3月11日の東日本大震災は、東京電力福島第1原子力発電所の爆発を誘発し、人為的な制御が不可能なままに現在もなお放射性物質を放出し続け、深刻な被害を拡散している。

(2) 放射能による汚染は、空気、水、土、森林、海洋、動物、水棲生物、加工品、構造物などのすべてに及び為

政者や東京電力の情報隠蔽は、昔の大本営発表にも似て、まさに現代の戦争そのものであり、被爆者団体として看過する事はできない。

(3) 長崎の被爆者5団体は、いち早く意志統一し、長崎原爆で被った経験をもとに4月8日、総理大臣に対し、福島原爆災害の拡大の防止、ヒバクシャを増やさない施策



「長崎の鐘を鳴奏会」。
初日参加者212名。
(8月6日・平和公園)



長崎原爆写真パネル展。
トリブバン大学で開会式



核兵器廃絶2011
平和ナガサキ大会

と安全の措置、正確な情報の発信、被爆者の調査、検査、記録、医療措置、被爆者手帳の交付などの要請書を提出した。

(4) また、4月14日には、被爆5団体の代表が国会を訪れ、民主党陳情団受入れ責任者、総務副大臣、環境副大臣に直接申し入れた。

(5) 原子力発電所関連に関しては、その後も年間を通じて、反原発署名、再稼働反対、各種学習会や諸行動に積極的

に参加し、被爆者団体として、先駆的に動いてきた。

(6) 世界の核兵器禁止の動きは、米国の新しい形の臨界前核実験の実施など、オバマ大統領のプラハ発言に逆行する様な情勢が続いており、潘基文国連事務総長が訴えている「核兵器禁止」の実現までには、まだ道遠しといわなければならない。

(7) 私達、長崎県被爆者手帳友の会の運動は、会員同志の親睦と交流、被爆者の援護、2世、3世の育成強化と要求の実現、被爆「体験者」支援、在外被爆者支援のほか、反核、反戦、反原発のあらゆる運動への積極的なかわりの中で、その存在を自覚している。

(8) 反核、平和のための国際的交流や「原爆語り部」などの活動では昨年5月に、ネパールにおける「原爆展」に、井原会長及び井黒キヨミさんが「非核特使」として出席し、大統領から感謝状をうけた。

また、10月には、カザフスタンにおける「核兵器のない世界を目指す国際フォーラム」に、本村チヨ子さんが「非核特使」として派遣された。

さらに、本年3月末には「高校生1万人署名運動」の



平和への誓い

無念さに留め

被爆者代表 松尾 久夫氏

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典、平和への誓い

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典、平和への誓い

生徒達と共に、韓国被爆者との第4次交流団として、中村キクヨ副会長と井黒キヨミさんを派遣した。

(9) 8月7日の「核兵器廃絶2011平和ナガサキ大会」

2012年〈平成24年度〉活動総括

(1) 東日本大震災被害から、2ヶ年余を経過したが、東京電力福島第1原子力発電所は、深刻な事故の上に津波被害も重なり、制御不能な状態のまま、廃炉せざるをえない事態であり、第2発電所を含む福島県内すべての原子力発電所を廃炉にすべきとの県民合意がなされている。

では、倉守照美さんが「被爆者の訴え」を行い、8月8日の原水禁「被爆者と語る会」では、長濱、山川、早崎、井黒の各氏が語り部の役割を果たし、8月9日の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、松尾久夫さんが、全被爆者を代表し、「平和の誓い」を世界中へ訴えた。

(10) 会員の研修と文化の向上、親睦、他団体との交流と連携には、恒例の研修会を平戸市で開催し、各種団体との平和と文化の向上にかかわる諸活動に協力した。

(11) 長崎県被爆者手帳友の会の運営に必要な財政状況については、会員の減少もあり、前途に困難性はあるが、会の効率的運営につとめ、収支の安定がはかられている。

(2) これに対し、国と東京電力の無責任ぶりは依然として改善されないどころか、現在もなお、予備電源供給システムの事故による停電や、放射能を含む大量の汚染水が漏水するなど、一般的に信じられない初歩的なミスが続き、発電所からの放射能放出による脅威は全く取り除か

れていない。

(3) この様な事態は、原子力発電所立地地点から20 km以内を警戒区域として、居住制限すると共に、それ以遠の地や風下地域などでも、多種の制限が課されており、遠い将来にむけても、故郷へ帰還し、居住する事をあきらめざるをえない事情にある住民を生みだしており、補償をめぐる裁判も続発している。

(4) また、原発廃炉をめざす訴訟も、個別の発電所ごとに訴えられ、原告は著しく増加するとともに、「反原発」のうねりも高い。

(5) この様な中で、総選挙による自民党の圧勝の結果、政府は「原子力政策の失敗と安全神話の破綻」の反省もななく、「原子力規制委員会」に圧力をかけ、「プルサーマル原発建設容認」、「停止中の原発再稼働」及び「外国への原子力発電施設輸出」など、国民の意志とは逆の産業政策を進めようとしている。

(6) 原子爆弾と原子力発電は、その目的と仕組みは異っているが、放出される放射線被害は同様であり、むしろ制御不能に陥った原子力発電所の方が、より強いエネルギー

ギーの放射線を放出し続けていることから、さらに危険度が高いものと判断される。

(7) 被災がれきの広域処理に関しても、国は政策を誤った。長崎市議会及び田上長崎市長は、一早く受け入れ方針を示して動き出したが、長崎県下の被爆者5団体は、「放射性廃棄物は拡散すべきではなく、遠距離移送は経済的見地からも合理性に欠ける」との原則を貫き、強く反対する立場で自治体と政府に申し入れた。

(8) 以上のように原子力発電所、再処理工場、高速増殖炉など関連する内容に関しては、年間を通じて、反原発、再稼働反対、新增設反対、廃炉裁判など、署名や行動に加わり、「核と人類とは共存できない」との姿勢で、先駆的に活動してきた。

(9) 世界の核兵器禁止の潮流にもかかわらず、米国は依然として臨界前核実験をくりかえし、北朝鮮も核保有国としての挑発的な動きを顕在化させている。

これらに対しては、その都度、抗議声明発表や座り込み行動など、原水禁長崎県民会議や県平和運動センターなどと協調した活動を行ってきた。

(10) 私達長崎県被爆者手帳友の会は、自ら被爆を体験した者の団体組織として、会員の親睦と交流を深め、被爆者援護対策の充実、がん検診の実施を中心とする被爆2世問題及び被爆「体験者」訴訟支援、在外被爆者への支援、高校生による平和活動への支援など、「長崎を最後の被爆地に！」との願いをこめて、可能な限りそれらの活動に参加し、行動してきた。

(11) 当然にも、反核・平和推進の諸活動には、他の友好団体と緊密に連携をとり、その一員として行動している。

平和団体が主催する「元旦座り込み」「9の日座り込み」「核実験に抗議する座り込み」などに参加し、独自活動として、「9の日打鐘」と「長崎の鐘を鳴奏会」とりくみ、毎年2,000個を作製し配布している「ピースベル」は、国際的にも好評を博している。

(12) 平和に関する国際交流では、昨年4月末から5月上旬にかけて、スペインのゲルニカ・ルモ市長の招待をうけ、ゲルニカ空爆75周年記念式典に、井原会長、井黒キヨミ及び倉守照美の3名が自主参加し「平和協力協定」を締結した。



「非核特使」として、ゲルニカ・ルモ市で「原爆の惨状」を語る



「友の会」の「いつくしみの聖母」。慎んで移設



世界平和を告げる、「長崎の鐘」を鳴奏会(鳴らそう)。(8月6日～9日まで)



新聞報道に見る会員の活動

(13) 国内の被爆者団体との連携は、「広島被爆協」(坪井直この運動は、ドイツ共和国のドレスデン市空爆被害者の皆さんにも波及し、本年4月末から5月にかけての第2次訪問団派遣につながった。(6名が参加)

理事長)や、秋田県秋田市土崎の空爆体験者(高橋茂代表)との協議と交流を進展させている。

(14) 韓国被爆者との交流は13次に及ぶ「高校生1万人署名活動」の皆さんに呼応し、「友の会第5次訪韓団」として、3月29日から4月1日にかけて、井原会長、阪口篤子、本村チヨ子を派遣した。

(15) 4月22日から5月1日にかけての第2次ゲルニカ訪問の成果として、広島被団協と土崎空爆体験者の会が「文書による協力協定」に参加したことから、秋田市長との会談が実現し、平和の進展に視する動きとしてマスメディアが報道した。

秋田市へは、4名を派遣した。

(16) 毎年8月の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、5団体持ちまわりで、所定の役割を分担し、8月9日の首相への申し入れも、5団体協議により実現しているものの、申し入れの成果は充分ではない。

平和団体主催の諸行事にも「原水禁」加盟団体として、役割を果たしている。

(17) 友の会内部の団結と支部間交流の場として、1泊2日

の「研修会」を定例化しているが平成24年度は、雲仙市青雲荘で開催し、広島被団協の坪井直理事長と箕牧^{みまき}事務局長を講師に招き、交流の実をあげた。

(18) 「友の会」の組織実態は、高齢化の影響は避けられず、死亡や支部の担い手不足などで、直轄会員化の傾向となっているが、財政の収支バランスを図るため各種の合理化を推進し、あわせて、昨年7月には、家主の都合により事務所移転が必要となり、所要の条件を整えて、松山町へ移転した。

(19) 平和団体や友好団体がとりくむ各種の文化事業や活動へは積極的に共同行動を行い、会員の文化度の向上につとめてきた。さらに「いつくしみの聖母像」と「キング牧師の胸像」も、運よく適切な団体へ委譲することができた。

この間、財政運営面では収支改善の努力により、その成果は、数字に表れている。

本年度は、被爆70周年にむけた記念事業を準備する。

■ 2013年〈平成25年度〉活動総括

- (1) 2012年（平成24年）12月の衆議院議員選挙で自民党の圧倒的な勝利により、安倍第2次政権が誕生した。
- (2) 政権交代の成果を期待された民主党政権は、国民本位の視点を忘れた内部矛盾を露呈し、自民党に変らぬ首相交代をくりかえして、国民の目に未熟さを植えつけ、次第に信頼を失い続け、回復できなかった。
- (3) 2011年（平成23年）3月11日の「東日本大震災」の自然災害により連動した「福島第一原子力発電所過酷事故」の人災は、原子力に関する安全神話をも崩壊させ、人の手によって収束不可能な実態をさらけ出し、政治の混乱を増幅させてのち、再び自民党政権へと回帰した。
- (4) 第2次安倍政権は、「アベノミクス」と称して、財政再建、金融緩和政策、成長戦略など、「三本の矢」の目くらましを手段に「日本を取り戻す」とのキャッチフレーズで、2013年（平成25年）7月の参議院議員選挙の勝利にむすびつけ、衆参両院のねじれ解消どころか、憲法改正に必要な3分の2勢力を突破するに至った。
- (5) 安倍反動政権の本領発揮に勢いをつけた民族主義者たちは、次々に「戦後レジームからの脱却」を声高に、国のカタチを「戦争する国」へと急転回させ始めた。
- (6) 日本銀行総裁を安倍首相が唱える金融緩和政策に従順な人物に取りかえて操り、内閣法制局長官も、改憲派に更迭して憲法改訂の転換を目論んだ。
- (7) まず、2013年（平成25年）12月6日には、「特定秘密保護法」を強行成立させた。国家統制を強めるため、教育法制を改めて、もの言わぬ人材育成の方向を定め、労働法制を改めて、労働者を無権利状態に押し戻して、企業の奴隷にする政策を執っている。
- (8) 2014年（平成26年）4月1日からは、消費税の3%増税を強行し、さらに10%増税をねらっている。国民の1%と言われる富裕層のために、99%の貧困層は、生活にあえぎ、保健・福祉などの社会保障制度改悪の下に苦しめられ、憲法が保障する最低限の生活が不可能な事態にある。

(9) 原子力を中核に据えたエネルギー政策が、すでに破綻している事実は、福島第1原発の収束不可能な深刻さから、明々白々であることを放置し、2020年のオリンピック誘致のために、「放射能、汚染水は、完全にプロックされている。」などと、国際社会に対して恥ずべき「大ウソ」を吐き、「原子力はエネルギー政策の基盤」を豪語して、事故時の無限大補償を添えて、他国への原発輸出を先導している。原子力政策の行きつく先に、原子力爆弾があることは言うまでもない。



第29回「反核平和の火リレー」出発式。(4月24日・平和公園)



再び、ゲルニカ・ルモ市を訪問。「平和協力協定」の発展を期す



韓国被爆者交流第6次派遣団



キング牧師の胸像安置までのいきさつ

- (10) 平和憲法のもとでは、「武器輸出三原則」により、世界の平和を維持する立場から、当然にも厳しい規制が図られていた。
- しかし、安倍政権は、この規制を取り外して、紛争の戦火にガソリンを撒き散らす手段を選択し、「死の商人」になった。
- (11) 憲法で禁じている「集団的自衛権の行使」については、憲法改正によらず、解釈を改めて、「地球の裏側」まで自衛隊を派遣できるようにし、「憲法の改釈は私がやる」との暴言を弄して、立憲主義をないがしろにしている。
- 「世界最強の米軍」が攻撃された時に、反撃を加えられるようにする。との発想だから驚く外はない。
- (12) その上、中・韓・北朝鮮などの近隣諸国との関係は緊張を増すばかりで、民間交流による友好関係を破壊し、いたずらな対立を助長する姿勢は、日本の国益を損う外交不在の悪政と言わなければならない。
- (13) 戦争の無意味さ、不条理さ、惨酷さを心と身体で知り尽くしている我々被爆者は「戦争は軍隊が行うものではなく、国民すべてが巻き込まれる」「原爆は、地球を亡

ぼす」「三たび許すまじ原爆」「長崎を最後の被爆地に！」と叫びつつ、老躯にもなお鞭うって、恒久平和実現のための運動を継続している。

(14) 長崎の被爆者5団体は、平和実現の諸活動には一致して、国際機関、日本国政府、県・市などの行政機関などに対する要請、申し入れ、抗議、声明文発表などを行い、一体感を強めている。

(15) 平和団体、反原発団体、高校生平和活動、平和にかかわる文化諸活動などには積極的に提携し、自ら参加し、又成功を支援し援助する活動を続けてきた。

(16) 長崎県被爆者手帳友の会の日常的活動の一つに「9の日打鐘」があるが、この運動は、「長崎の鐘を鳴奏会」の結成につながり、さらに昨年は、岐阜県高山市長には、全国の自治体に対しての「平和の鐘を鳴らそう」とのよびかけにも役立った。

私たちの小さな日常活動は、大きな響きとなって広がっている。

(17) 被爆者の日々の苦悩は、69年目を迎えている。現在も完全に癒される事はない。

被爆者の高齢化はその深刻さを益々増大させており、ガン年齢に達した被爆二世の不安にも、未だに行政が対処するには至っていない。二世問題は、全国及び県内組織の一員として主要な役割を担っている。

(18) 被爆「体験者」は、被爆者だと受けとめ、裁判を支援しているが、政治の課題であり、長崎市による「研究会」設立へ努力した。早急な成果を求め乍らも、課題は山積している。

(19) 来年は、被爆70年の節目を迎える。主要な諸課題を解決する年として平成25年度から取り組んでいる事業を次年度に継続し結実させなければならない。

(20) 世界における「核兵器禁止」への運動は、オバマ大統領のプラハ発言を発端に流れは加速され現在では、非核保有国がリーダーシップをとり、世界中の力の結集にその成果が表れてきつつある。依然として世界中には、17300発もの核兵器が保有され、核実験が繰り返される現状に強く抗議しながら日本政府には「核の傘」を脱却し、「非核の傘」へのリーダーシップ発揮を求めてきた。又、「核も戦争もない平和な地球を子どもたちに引渡

す」責任を被爆者は忘れず、すべての平和活動に全力をつくしてきた。

(2) 「友の会」の財政運営は、健全であり、黒字決算により次年度へ引継ぐ事ができた。

■ 2014年（平成26年度）活動総括

(1) 2012年（平成24年）12月の衆議院議員選挙で圧勝した自民党は、公明党との連立により、安倍第2次政権を誕生させ、第1次安倍政権で、教育基本法を改悪し、防衛庁を防衛省へ格上げした反動的政策を更に「戦争できる国」へと急進的に動き出しました。

(2) 2013年（平成25年）12月6日には「特定秘密保護法」を強行成立させ、言論統制への道筋をつけてきました。

(3) 2014年（平成26年）4月1日から消費税を3%増税して、8%にした事により、一般大衆の貧困度は更に深刻さを増し、わずかに1%程度と言われる富裕層との格差は拡大し、世代を引き継ぐ負の連鎖が続いています。

(4) 2014年（平成26年）7月1日には、日本国憲法に違反する「集団的自衛権の行使」を時の政権が容認する

閣議決定を行い、日本を「戦争する国」へと方向づけました。

(5) 2014年（平成26年）12月14日の総選挙は「アベノミクス」の失速を隠し、消費税増税10%の公約を先延しする安倍延命の大義なき選挙だったが、又も公明党とあわせて、議席の3分の2以上を獲得し、1強多弱の政治勢力図を定着させる結果となり、第3次安倍政権の延命がなされました。

(6) 日本周辺諸国、とりわけ、中国と韓国及び朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との関係は、領土問題や安倍政権の歴史認識問題、拉致被害者救済など、未解決の懸案があり、好転の兆しはみえず、逆に対立が深刻化しています。

(7) 米国との軍事一体化同盟を強化すればする程、国内的

被爆者5団体抗議

首相官邸前「身勝手な解散」



被爆者5団体は、首相官邸前で抗議行動を行い、首相官邸前を占拠し、抗議行動を行った。抗議行動は、首相官邸前で約1時間続いた。抗議行動は、首相官邸前で約1時間続いた。抗議行動は、首相官邸前で約1時間続いた。



奄美被爆者深まる孤立

県主催の会 30年ぶり調査



奄美群島の被爆者は、県主催の調査を受け、30年ぶりに調査を受けた。調査の結果、被爆者の数は増加していることがわかった。調査の結果、被爆者の数は増加していることがわかった。



には、沖縄県との内部矛盾が拡大し、国際的には、「イスラム国」などからも標的対象とされ、驚く程頻繁な外遊で「地球規模の外交だ」と胸を張っても、その成果は顕在化せず、むしろアジアの孤兒的批判にさらされています。

(8) 2020年東京オリンピックを決定する際に国際公約した「福島原発の収束」は未だ殆ど進展せず、12万人以上の避難者は、故郷を失い深刻な健康被害も出はじめています。この様な中での「原発を基幹エネルギーとする再稼働推進政策」は「潜在的核抑止力」に位置づけた戦略だと認識しなければなりません。

(9) 核兵器の非人道性から、核兵器禁止条約制定にむけた国際的な運動のうねりは、高まっていますが、核保有国と非核保有国との溝は埋まらず、「核の傘」の中にいる被爆国日本のイニシアチブの發揮は不十分で失望感是否めません。米・ロ核大国による核兵器削減交渉も停滞したままであり、世界中には16,000余発もの核兵器が保有されています。

(10) 核保有国による核実験については、承知した度毎に5団体が連携して当該国に対する抗議の記者会見と抗議声明および抗議文発送を続け、「反核座り込み」にも、可能な限り参加し、他の平和団体と連帯しています。

(11) 反核、平和の諸活動については、派遣や個人参加の場合の補助金支出など、可能な限り対応してきました。

平成26年度は、ピースボートへの乗船参加1名、NP
T検討会議への参加2名、韓国被爆者との交流団に3名
を派遣しました。

(12) 長崎市の戦後復興のシンボルの建造物で、文化財的価値も高く、半世紀以上にわたって、長崎の文化創造と発展の拠点として、活用されて来た「長崎市公会堂」の存続運動には、構成団体の一つとして、積極的な役割を果たしています。

(13) 「高校生平和大使派遣」「核兵器廃絶をめざす高校生1万人署名活動」「被爆者合唱団ひまわり」「キッズゲルニカ揭示運動」「福島と長崎を結ぶ会」などをはじめ、平和にかかわる文化活動への会員参加への補助金支出など必要な支援や援助を行いました。

(14) 「長崎の鐘」を定期的に打ち鳴らす「9の日打鐘」及び「長崎の鐘を鳴奏会」との共催行事に加わり、観光客など参加者に「ピースベル」を送り、喜ばれています。

海外原爆展や代表派遣時の配布を含め、毎年約2、000個を製作しています。

(15) 憲法をないがしろにした安倍政権の危険性は、平和の

衣を着た戦争内閣にあります。

平成27年5月24日に閣議決定し、15日に国会へ提案した「戦争法2法案」は、「戦争しない国」を「戦争出来る国」へ変貌させたのも束の間に「戦争する国」への暴走を明白にしました。

戦争の深い傷跡を身体に刻み込んで生きてきた被爆者は、まさに老骨に鞭打って、戦争反対の行動に立ち向かわなければなりません。

(16) 平成27年は、被爆70年、戦後70年の節目の年でありま

す。すでにとりくまれている各種団体などの記念行事にもかわり、自主的事业も推進して来ましたが、本年の総会は、過去を振り返り、未来にむけての記念誌の発行、長い年月にわたり、被爆者運動の先頭に立って来られた役員など、関係者へ感謝し、記念と慰労の集いとなります。

(17) 今後を担う「2世の会」の自首活動が促進されるよう運動を具体化いたします。
財政健全化を継続する為、組織の強化につとめ運営の効率化と安定化を図ります。

―被爆・戦後70年を迎えて―

過去から未来への継承

今をどう生きるか

平成二十七年六月十六日発行

発行

長崎県被爆者手帳友の会

〒八五二―八一―一八

長崎市松山町

TEL(〇九五)八四九―一四九四
FAX(〇九五)八四七―一九七〇

出版協力

ゆるり書房

〒八五〇―〇八七五 長崎市栄町六一二三 昭和堂ビル2F
TEL(〇九五)八二八―一七九〇

印刷

株昭和堂

諫早市長野町一〇〇七―二
TEL(〇九五七)二二一六〇〇

～被爆・戦後70年を迎えて～

過去から
未来への**継承**

今をどう生きるか

